心理學

文學博士元良勇次郎講義

文學會

（文學會講義筆記錄合本）

心理學目次

緒言……一
第一章　心理學と他の諸學科との關係……二
第二章　心の三分法及び其批評……四
第三章　心身の關係……七
第四章　識と無識との關係……二〇
第五章　情と識との關係及情の性質……二九
第六章　感情の結合……四五
第七章　想像……六八
第八章　知覺……八二
第九章　幻影……九八
第十章　記憶……一一七
第十一章　情の力と善惡との關係……一三一
第十二章　理想……一五〇
第十三章　快樂の種類及び其性質……一五七

心理學目次 終

目次

第十四章　音樂……一七一
第十五章　繪畫……一七六
第十六章　美の學理……一八〇
第十七章　笑……一八六
第十八章　愛情……一八八
第十九章　注意……一九六
第廿章　本能及び習慣……二〇三
第廿一章　意志……二一〇
第廿二章　自覺……二三六
第廿三章　社會……二三五
第廿四章　表出……二四〇

心理學

文學博士　元良勇次郎　講述

緒言

心理學の參考書は埃人リンドナーの著書(英文に翻譯せしものあり)を以て最も好しとす拙著心理學の如きも亦諸君が參考の一材料たるべきか

心理學は哲學者研究の一部分として現はれたり之れ心を以て形而上に屬するものとなしゝが故なり而して此に所謂形なる文字は之れを狹義に解したるものにして即ち形而下とは必ず空間に現はれたるものゝ限るが如し然るに此形なる文字の意義は必ずしも一定したるものに非ずして今日に於ては精神の活動即ち喜怒哀樂の如きも亦一の形ゝ屬するものとなす故に心を形而上及び形而下の二に區分す而して心理學は心の形而下を研究し心の形而上のものに至りては哲學の範圍となすを通常とす

緒言　心の意義　心理學は心に屬するものとなし

第一章　心理學と他の諸學科との關係

心理學と他の諸學科との關係

(一)心理學と哲學との關係　既に前に述べたるが如く哲學の研究する所は心の形而上にして心理學は其形而下に屬するものなりと雖も心の形而上なるものも猶ほ之れ精神現象の一部分たるに疑なければ哲學の研究も亦た心理學に於て資る所なかるべからず然るに或哲學者は心理學に關する智識些かなしとするも獨り哲學を研究し得べしと主張す此點に就ては猶ほ論ずべきことあれども今少しく此講演を進めたるの後に讓らん

哲學との關係

物理學との關係

(二)心理學と物理學との關係　此に所謂物理學とは之を廣義に解したるものにして物質に於ける總べての現象を研究する學問を言ふさて心の現象は身體に就て現るゝものなるが故に生理的心理學は近來漸く學者の注意を惹く所となれり亦た小兒心理學は心理學の本義として敢て重きを置くに足らざれども之を教育學上より考察すれば最も必要なる學問

なりとす故に心理的現象と物理的現象とを互に相對照して研究するは學者の當に務むべき所なり

社會學との關係

(三)心理學と社會學との關係　此に所謂社會學とは之を廣義に用ゐたるものにして人事界に於ける總べての現象を抱含したるものなり社會學は其研究未だ進まずして今日に於ては猶ほ一科となすべき價値なしと雖も將來大に望を屬すべきものあり人事界の現象は物理の法則と人情の法則と相交叉して現るゝものなるが故に物理の法則を知ると同時に亦人情の法則を解せざるべからず然るに西洋に於ては此研究に反對多く既に人情の法則と言へば之れ靈妙なる人間の資格を失するものとせり諸君の知る如く西洋にては宗教の信仰到る處盛にして宗教的思想より人心を以て奥妙不可思議のものとなし人情の法則を研究するものは全く人間を動物視して其資格を失墜せしむるものとなす彼のスペンサーの如きも一たび社會學を著してより四面殆んど楚歌を以て充たされたり元來宗教は個人的のものにして個人は各神に關すれども神の眼中全く社

會なきが故に隨て大ゐ此研究に反對せり然るに我國に於ては毫も此種の駁論なきは斯學の幸福と云ふべし

第二章　心の三分法及び其批評

心の三分法及び其批評

心を智情意の三部に分つは殆んど一の格言として信ぜられたり然れども予は其正當ならざるを認むるが故ゐ先づ講演の順序として三分法の由來を述べ次に其不可なる所以を說き終ゐ予が最も信ずる所の區分法を述べんとす

アリストートルの心の分類

古代の哲學を按ずるゐアリストートルは心を以て植物的靈魂、動物的靈魂及び理性的靈魂の三部に分ちたり

第一、植物的靈魂とは草木と同じく人間が生長する所の力即ち生活力を言ふ

第二、動物的靈魂とは肉體ゐ就て起る所の現象例へば肉慾想像等の如きを言ふ

理性

意志

第三、理性的靈魂を以て活動的靈魂及び受動的靈魂の二部に區分す受動的靈魂は身體と共に亡び活動的靈魂のみ獨り永遠に不滅なるものとす

今之を圖解せば則ち左の如し

アリストートルの心の分類
- (一) 植物的靈魂
- (二) 動物的靈魂
- (三) 理性的靈魂
  - 活動的靈魂
  - 受動的靈魂

時代稍進み宗教の勢力漸く盛なるに伴ひて靈魂不滅の說行はれたり中古に及では之れゐ關して別に說くべき程の事柄なし

近世ゐ至りては理性(英語の所謂Intellectなり理性若くは智と譯す)に最も重を置けり元來意志の觀念は道義上よりして古代既ゐ發達し希臘羅馬ゐ於ては最も意志を貴びたりこれ實際道義上の必要よりして然りしなり例へば忍耐剛毅等に於けるが如し而して心理學の研究ゐ於てはまた理性なる

情

三分法の不可なること

もの丶要用ありて此れ智意兩者の發達を促すに至り尋で情の觀念を生せり初め情を以て他の支配を受くべき一段下等の者となし丶こと佛教の一派と其歸を一にせりまた儒教に於ては其見解あよりて差異あれども自ら此臭味あるを免れず中古迷心的宗教の盛時に當りては歐洲の天地全く腐敗したるわも拘はらず棄慾の觀念大に流行して宛然一の仙人界を現出せり其後情性を最も高尚なるものなりと唱道したるは實にルーソー(民約篇の著者)を以て嚆矢となす氏は元來文學的思想に富みて感情最も强きが故に天地の美妙を觀察して以て之を文學上に展出したりカントに及て始て情を理性と意志と相並行して一の精神元素となすに至れり之れ智情意三分法の歷史にして此發達は心を分解したる結果と言はんよりも寧ろ社會の必用上より發達したるものと言ふべきなり

顧みて此三分法を檢するに感覺の如きは通常之を智の部に入ると雖も感應の如きは全く智に屬ずべきにあらずまた想像の如きは智性か將た情性か其幾分か理性的なるものなきわしもあらざれどもまた大に情性的のも

心の二分法

情

識

心身の關係

のありて存す故に三分法はなし得べからざるものにして其從來之を用ひしは他に一層適當なる區分法なきが爲めのみ故に予は心を以て識(Consciousness)及び情(Feeling)の二に區分せんとす

情は一の衝動力にして快不快の性を具ふ然れども物理學に說く所の衝動力とは全く其性を異にす例へば孟子の所謂四端の如し情は身體の活動に關して發するものなれば若しアリストートルをして分類せしめば之を動物的靈魂の部屬となさん識は身體以外のものにして情の活動に由て始て生ずと雖も其形は體の狀況如何によりて差異あらず例へば彼の論理法の如く其法則は病不病或は人種の別或は身體の大小によりて異るものにあらざるなり然れども其情に至りては各人特殊のものにして互に差別あり故に心を以て識情の二に分つは最も適當なる分類とす

第三章　心身の關係

心身の關係に就ては之を種々の點より研究せざるべからざるの必要あり

また之を歴史に徴して其種々に變遷せしことを知るべし今宗教上に於て之を考察するにもと宗教なるものは其起原必ず來世なる思想に關するが故に來世のことを言はんには先づ心身の關係を明にせざるべからず故に靈魂は身體の死後果して存在するものなりや否やを研究したるものあり或は哲學上より之を説明したるものあり或は教育上の關係より身體と共に心の發達する狀態につき研究したるものあり而して予は之を講ずるに當り先づ心理學上よりの研究を以て中心となし時に教育上或は宗教上に渉ることあるべし

プレトーの説

往古に就て考ふるにプレトー、アリストートルの時代に於ても既に心身の關係を論じたるものあり而して當時此の關係に於けるの思想は今日吾人が思惟する所と其差異實に甚しきものありプレトーの説に曰く靈魂は極めて純粋なるものにして身體の死後存在するのみならず身體は實に靈魂の活動を妨ぐるものなりと之を以て見れば身體と靈魂とを以て全く積極消極の關係の如くに思惟したるが如し乃ち以爲らく靈魂はもと天界に浮

遊せる永遠不滅のものなるが假りに身體中に宿るものにして身體ハ即ち靈魂の活動を妨くるものなり而して教育の助によりて此身體の妨礙を取除くことを得べし既ゐ身體の妨礙を取除けば靈魂は本來の性として自ら活動するものなりと而して彼が論據とせる最も著しき事實は小兒の智識の發達ゐ關する點なり小兒二三歳の頃は智識の發達實に驚くべきものにして此事實は實際教育に從事する諸君が既に熟知する所なりされば靈魂は吾人の身體に宿る前既に非常に發達したるものにして其身體に宿りたる後は却て身體の爲に壓着妨礙せらるゝものなり教育とは即ち此身体の妨礙を取除きて内部の靈魂が活動し得ることを務むるものとす此理を以て二三歳乃至四五歳なる小兒の心身の現象を説明するは最も興味あるを覺ふさてまた身體と靈魂とを積極消極の如くに分ちたる結果は基督教と結合して全教の觀念上に大なる影響を及ぼしたり即ち基督教は絶對的に靈魂を以て貴きものとし肉體を以て賤しきものとす斯の如く肉體を賤しむの念は啻にプレトー及び基督教のみならず印度にも亦た行れたり之を

要するに斯る風習は世界中一の廣き現象たること疑なし」

アリストートルの説

アリストートルも及て是等の思想大に緻密となれり勿論プレトーと雖も或點に於ては其所論頗緻密なるものなきにあらざれとも氏はもと文學を修めし人なれば大に文學的思想も制せられし所あり然るもアリストートルは今日吾人の所謂科學的思想に富みたるを以て此關係を科學的に論じたり即ちアリストートルの説によれば身體の死後生存するものは唯だ活動的理性のみにて其他の部分は身體の死と共に消滅する者なりとせり

近世の説

中古に於ては別に述ふる程の事なし近世に至りて哲學者の間に行はるゝ學説は靈魂と身體とを以て併行するものなりとす即ち身体靈魂共に存在し共に運動しつゝあるものなり例へば今予が手を動かさんと思ふは心の思想にして手の動くは物理的の作用によれり即ち予が動かさんと欲すると同時に手の動くはこれ神の作用なりとす然らざれば手を動かさんと欲することゝ手の動くことゝの間には何たる關係もなく全く隔絶したるものなりと此説は近世の初に於て行はれたり其後に至り身體と靈魂とは初

め造物主が之を造くるに當り二者併行して運動するやう裝置したるものなりとの學説現れたり即ち己が手を動かさんと欲すると同時に己の手の動くは全く然るべき裝置によれるものなり譬へば此に二個の時計あり共に其裝置完備して且正しきものなりせば一方が十二時を報する時他方もまた十二時を報すること疑なし而して一方が十二時を報することは他の方も向け何たる關係もなく兩ながら獨立したるものなれども唯其裝置共に全完なるが故に時を報するに於て一秒の差異あるを見ざるなり心身の關係も此譬喩に異ならず心の機關と身體の機關とは全く別物たること疑なけれども此二者併行して都合好く運動するやう造物主が之を裝置し置きたるものなりと今日よりして此學説を評すれば實も附會の説たるを免れず此説を以ては到底二者の關係を知ること難し

近世に至り科學の進歩したるに從ひ唯物論盛に行はれたり往者にも此論行はれたる事なきにあらざれども實に微々たるものもして世人の注意を惹きし事なし唯物論は吾人の精神を以て物質即ち腦髓活動の作用により

て起る者となし腦髓が主となり心は之によりて現れ來る一の顯象に外ならずとせり此論の旨とする處は彼の靈魂不滅と言へる宗教的の思想と全く正反對のものなり是に於て唯物論と基督教との爭論起り前者は後者よりして殆んど禽獸と一般の侮慢を受けたり然るに唯物論者は毅然として益鋭意勇進し敢て自ら信する所を曲げず終に其隆盛を見るゐ至れり又一方ゐ於ては身體と靈魂を以て全く獨立して存在するものとなし身體は死するも靈魂の生死には敢て些の關係なしとの論旨を維持せり此二說歐羅巴に於て非常に抗爭したる末或る點に於て稍々緩和する所あり宗教信者は曰く成程心は身體のため非常に影響を受くるものなれども敢て身體と共に死するものにあらずと即ち從來靈魂と身體とを以て各獨立ゐ存在して敢て些の影響を受くるものにあらずと主張し來りしも此に一歩の退讓をなせり又唯物論者は唯物のみを以て說明せんと試みたれども已れゐも隙分窮する所ゐるを發見し茲に物ゐもあらず心にもあらざる一の物ゐりと說くに至れり斯の如く漸次相退讓せりと雖も宗教信者は尙靈魂を以

て獨立ゐ存在するものなりとの一點(即ち其論旨の根本)は今日に至るも尙維持せり假令靈魂は身體の爲めゐ如何程の影響を受くるものなるも獨立の存在たるを失はざるものなりと主張せり

而してまた哲學家中には此に一の物ゐりて其物か兩面に現はるるものなりと說くものゐり(予は假ゐ之を二面一元論と名くべし)此說は現今最も廣く行はる然るに茲に一の困難ゐりそは所謂意志のことにして通例心理學ゐ於ては意志を以て精神活動に基く一種の力となし原因結果の法則以外のものとす然るゐ二面一元論者によれば別ゐ意志なる一種の力ゐるにゐらずして物理學上原因結果に關する法則の範圍內なる力ゐ外ならずとせり即ち一方に於ては意志を以て原因結果の法則以外のものとし他方に於ては其法則內ゐゐるものとす是ゐ於てか又一の爭論を構ふるゐ至れり

質ゐ此論點は啻に心理學上の研究問題のみならず又倫理學、法律學に大關係を有す若し意志を以て原因結果の法則以內のものなりとせば人の活動するは恰かも陣々風起り潺々水流るゝと一般にして倫理と云ふが如きは

全く之れなきゐ至るべし併し此等は隨分高尚なる問題なれば唯其大略に止めんのみ

予は此所に信する所の新説ゐ付て聊か述べんとすさて其新説に於て心身の關係を如何に説明するやと言ふに今日最も廣く行はるゝ所のものは前に述へたる二面一元論これなり之にも種々の反對あり其最も著しきものゝ論に曰く既に二面一元論と言へば三つの物即ち心、物及ひ非物非心の或る一物か其中ゐ合蓄せり心身の關係を説明せんか爲めゐ非物非心なる或中立物を其間に持ち來るは哲學上最も嫌忌する所なりと却説現今日本にて最も廣く行はるゝ所のものはベインの心理學なり而して氏の二面一元論ゐは斯る反對説あることを免れざるなり

二分法の適當なること

然らば如何に之を説明せんか既に前回に述べたるか如く心の三分法は最も説明に困難にして寧ろ識と感情の二分法を取るに如かす今單簡ゐ之れを説明せん

識とは精神中ゐ現はるゝ所の形なり論理學を以て之れを例せば論理學は

思想の法則とも稱するが如く思想の活動する法則を顯はしたる者ゐして思想の法則なる者は即ち識の形にして思想は其識の形に從ふて活動するものなり故に純正論理學の原則なるものは即ち識の形にして此形は決して變化せさるものなり勿論變化するものは既に法則にあらすして變化せさるものこそ即ち法則と言ふべけれ一般に法則と云ふ事に付て念の爲め此に一例を示し證かん例へば地球が太陽の周圍を廻るは一の動かすべからさる法則なれども地球は同時に軌道の全體に擴かること能はす或時は東にあり或時は西にありて時々其場所を異にす然れども地球が大陽を一周する點に於ては少しも異なる所なく毎年同一の法則に從て運動す之れと同じく心の作用も心理學上説く所の法則が一時に活動するものにあらすして時によりて思想の働には差異あれども其働を概括し來れは其間ゐ一の爭ふべからさる法則の存するを見る而して此法則は即ち識の形を顯はすものなり

感情は身體の活動と共に變化するものなり感情は即ち身體のファンクシ

一心身の統

ヨン(Fanction)(數學にて之を函數と譯す例へば $x^2+y^2=r^2$ の式に於て x が y と共に變化する故に x は y の函數なり)にして身體の變化に從て變化す斯くして吾人の身體か各特殊の形質を有するか如く其心も同しく相異なるものなりと雖も思想の法則に至りては決して各人差異あるものゐあらず今滿場の諸君にも一般に通したる思想の法則ありて存するなり之れに反して感情は或る部分ゐは共ゐ通すれども悉く同一なりと云ふへからず即ち身體の變化に伴て變化するものなり然るに識はもと感情と共に顯はるゝものなりと雖も其識の活動する形は決して共に變化するものにあらず して各人一般に通有する所のものなり故に心身は動力的關係を有するものなりと謂ふべし而して其所謂動力的關係とは身體の變化に從て心の變化するを云ふ此動力即ち力の活動する關係より論するときは心身の關係を以て統一的關係なりと言ふべし身體の活動と精神の活動とは離るべからさる關係を有するものにして或人は之を以て心身一なりと說くものゐれども一と言はんより寧ろ統一と言ふこそ適當なれ斯の如く心身は統一

的の關係を有するものなれども形の點より之を論ずれは識の形は物質の形と異なれり物質活動の法則は大抵空間によりて現はるゝものなり例へば地球が太陽の周圍を廻るが如き或はニュートンが重力に於ける法則の如き總て皆空間的の法則なり然るに心は識の形即ち思想の法則に從て活動するものなるが故に物理學の所謂重力の法則とは異るものゐして形の點より之を論ずれば心身は全く異類なりとす然りと雖も力の强弱なるものは空間的のものにあらずして物質其物に備るもの即ち空間以外のものなり例へば等しく原素なりと雖も酸素の重力は水素の重力に異るが故にたとひ其空間を占むる容積は互に相同じきも重力の差異あるを見る又心の現象中ゐも感情の如き强弱の別ありて絕へず變化す故に力の强弱は心身に通じて存するなり概括して之を云ふときは力の上より云へば心身統一なり形の上より云へば心身は全く異なるなり

右の如き形と力との二つに區分してさて此の二つのものゐ就き孰れゐ重を置くべきかとの點よりして此にまた數種の學派起れり形即ち思想の法

則に重を置くものは所謂純正哲學者にして彼等は論理學を基本として以て天地の理を究めんと欲するものなり而して其果して究め得べきや否やに就きては予は敢て此に論せず兎に角純正哲學者の採る所の方法は思想の法則を根本として推して心の性質を研究し更に進んで之を天地ゐ及ぼさんと欲するものなり何となれば思想の法則は英語の(Universal)即ち一般に通ずる性質を有するものにして思想の法則ゐ依りて研究すれば精神中の主觀的の法則を以て客觀的ゐまで推擴せんとするの傾向あるなり純正哲學者を以て先づ斯の如きものとすれば敢てさほどの誤解もあらざるべし然るに力即ち形の活動に就て主として研究するものは所謂進化論者にして進化論者は力の活動する點よりして研究し心に就ても其心の成長の點よりして論究するものなり故に下等動物よりして進んで小兒に及ぼし小兒より進んで大人に及ぼす而して斯の如く力に重を置くものは進化論者に限るにあらざれども兎に角進化論者は此の方法によるものなれば疑ふべからず故に研究の方法より言へば純正哲學的ゐ形の方より研究するも

の之を哲學的方法(Philosophical method)と言ひ力の活動よりして論究するものの之を發生的方法(Genetic method)と云ふ斯の如く其研究説明の進路の差異よりして此に一の爭を搆ふに至りたれども廣く之を考察すれば必ず一方に偏重すべきものにあらずして力の發達と共にまた形に就て研究せざるべからざるものあり故に哲學的方法と發生的方法の二つのものは啻に心理學に於けるのみならずしてまた國家學社會學教育學の如きに就きても等しく之を應用し得べきものなりされば吾人は必ず一を取て他を捨つべきにあらずして必ず此兩方法に依らざるべからざるが故ゐ從て哲學的に研究すべき事及び發生的に研究すべき事との相互の關係を明瞭にすべき事は今日心理學の研究上最も大切なる事と信ずるなり

以上講述したる所を概括すれば(一)心は三分法より寧ろ二分法を以て適當なる分類法となす(二)心身の關係は力の點に於て統一的の關係をなし形の點に於て全く獨立なるものなりとす(三)以上の區分法は哲學的方法ゐ於ても及發生的方法に於ても共に採る所のものなれば啻に心理學上の現象を

分つのみならずまた一般相通じて事物を研究するゐ最も都合好き區分法なりと信ずるなり

第四章　識と無識との關係

第四章　識と無識との關係

容料（コンテンツ）

心の現象は總べて識中ゐ現るゝものにて是れ心の特質なり而して識を觀察するの點二樣ありて識の容料即ち識中に含蓄するものに就て觀るときは心界及び物界悉く此の中に抱含せらる尤も物質は本來無識のものなれども物質も猶ほ吾人が識中に來らざれば吾人の知得する所とならざるが故に苟も智識なる範圍の內ゐ來るものは擧げて皆な識中の物なりと言はざるへからす而して此識なるもの又主觀客觀の二樣に分るこは識を容料或は容料の範圍といふ點よりして觀察したるものなり然れども識を活動せしむる根本より觀察すれば前段述ぶる所と大に其趣を異にして識と無識との區別は全く識の活動の變迁する方面よりして觀るものなり此點に於ては精神を以て有識のものとし物質を以て全く無識のものとなす而し

此點を標準として精神及物質の範圍を區別するを得ると雖ども漸く降りて極めて下等のものとなるに至りては兩界互に相近接し其有識なるか將た無識なるか殆んど兩者の限界を知るゐ苦むものにして此區別を定むるは心理學上最も困難なる一問題たり此疑題に就て學者の所說種々あれども先づ通常吾人の思惟する所ゐより自動する所のものは總べて有識のものなりと斷定すれば其限界甚だ明了なるが如しと雖ども彼の植物中捕蠅草（とりもうそう）の如きに至ては或る意味ゐ於て全く自動するものなりと謂ひ得べし又た自動を以て只た漫りに運動するものならず必ず或る確定の目的を有するものゝ謂なりと解釋すれば其間一層明晰を加ふるが如しと雖ども之をしも猶ほ未だ一定したるものならず實際吾人が平時自体を直立せしむるに當りて其中心を得ん爲に種々の筋肉活動すれども其活動は自動的に働きて敢て識中ゐ現れず故ゐ目的ゐるの活動も未だ必ずしも有識なりと定むべからず斯く論じ來れば漸く其錯雜を來して畢竟一點の光明をも認むべからざるの憾ゐれば予は此ゐ此等の諸說研究の結果を以て此問題を解

心は腦髓の活動によりて發す

釋すべし即ち收縮纖維或は筋肉の如きもの下等動物のアミーバ即ち外物來りて刺激するゝ遇へば收縮纖維ありて必ず之れに反應するが如きものは必ず識を有するものなりと斷定し得べきなり抑も吾人が運動するの時に當りて不知不識の間になす活動も多くは曾て識中ゝ現れたりし事疑なく只だ其の不斷の習慣により今は全く無識のものと變せしなり彼の收縮纖維を有するもの即ち外物の刺激に反應するもの丶如きも元來有識なりしものなりしが其屢次の運動ゝよりて竟に無識のものと化し恰も本能の如きに至りしなり斯の如く解釋するもの當時心理學者間に於て最も廣く行はるゝの學說なりとす然れどもこはこれ最下等の物に屬す予は次に最も高尚なる吾人の精神に關して此關係を述べんとす

吾人が心は腦髓の活動より發するものなり然れども腦髓の活動はこれ物質的のものにして既に心と名くる以上は有識のものたらざるべからず而して其無識のものよりして有識に移るの限界は固より一線を以て其間を區劃するが如きものならず他の天然物と一般に漸次に變移するもの

識の三種
○明瞭なる識
○○無識
○○不明瞭なる識

にして兩者の間には甚だ明瞭を欠くものゝあり之を區別すれは卽ち左圖ゝ現したる如く明瞭なる識及び無識の三となる

a　明瞭なる識
b　無識
c　不明瞭なる識

cの範圍なる漠然たる精神現象は吾人が能く注意すれば識了し得べし不注意なれば殆と識了し得べからざるものたるなり又たacの界域を以て假りに之を表面と名くれば此表面は時ゝ隨て昇降するものにして終始必ずしも一定の部分を占有せず例へば情の活動激甚なれば此表面は頓ゝ昇りて大に識別の容料を減ず喜怒哀樂の最も烈しき時に於るか如し他の譬喩を以て之を解すれば彼の海草が平時水面上に其上部を現はし居れども潮流遽かに膨湃し來れば全く其の覆ふ所となるが如し而して此昇降は元と腦の活動ゝ基くものなれども猶はこれ精神の現象ゝして是れ無數の細小感覺に基くものとす其の無數なる細小のもの漸く集りて以て心の基礎を

一般感情又無差別感情と云ふ

成す例へば衣服が皮膚に觸るゝ時或は血液が血管中を循環する時は爲に些少の刺激あり之を有機感覺(organics Sensation)と云ふ卽ち身体活動しつゝあるが故に無數の最小刺激が始終腦の或る部分ゐ蒐集して有無の間に彷彿たる漠然のものあるなり或は之を一般感情又た無差別感情と云ふ而してこは吾人が精神の快若くは不快の時に現はるゝものゐして又た其人の人品上(Charactor)最も大なる影響を有するものなり有機感覺良好なれば其人の快樂自ら外面に現るゝと雖ども之に反するものは外貌上自ら不快樂の觀あるを免れず或生理學者の說によれば有機感覺中最も强きものは胃腑の感覺にして飲食旣に足り胃腑にして滿足すれば一般人類は敢て不平を鳴さざれとも若し其不足を感ずる時は爲に大なる騷擾を起す事ありと之を要するに一般感情なるものありて始て精神現象の基礎を成すことは敢て疑ふべからざるなり

一般感情の上ゐありて區別的に活動するもの及び其中ゐありて無差別的に活動するものあり此の感情漸く昇り精神現象の唯熱心一方ゐ偏して殆

無差別より差別に移る限界

んど物の撰別を缺く事あり又た其漸く降るに隨ては終に虛心平氣に復し種々なる現象は精神內に區別して現出するものなり夢の時に於ては一般感情大に低下して畫間潛匿して全く憶出し能はざる事まで も漸く精神內に現れ來る又た吾人が羅症中にありて殆んと意想外なる奇異の事柄を喋する事あり是れ皆同一の理に基くものにして之れに由りて觀るときは吾人が事物を思考するには此の感情の最も低きを宜しとす通常神經質なりと言ふものは其人の体力旣に弱りて神經極めて銳敏となれるもの卽ち一般感情の最も低下したるものを言ふ之れに反して彼の應揚なる人々は其身體の强健にして一般感情の大なるに由るものなり

予は之れより一歩を進めて無差別より差別に移る限界に就て講述すべし此變移に就ては其間何か著しき差異ありて存せざるへからず例へば一の寒室にあり不知不識の間に漸次其溫度を增せば些少の差異は之を感せざれども若し暖室にありて一方の扉戸を開き遽かゐ朔風の凜烈たるに遇へば吾人は其寒きを識り得るなり斯く吾人が事物を識了するには其間一の

一　識域
二　差別域
　　絶對域

變化を要す隨て此に差別なるものを生するなり而して其變化の分量が幾何に達すれば可ならんかとの問題もまた吾人が研究を要すべき事たり今之を解釋せん爲め光線に就て一例を擧げんにこゝゐ六本の蠟燭を點ずる室と五本の蠟燭を點ずる室あり然るに其燭數を知らずして只燈光の炳然たるを觀るのみゐては以て燭力の差異あるを識別する能はず若し乙室に於て猶は一本の蠟燭を減じ六と四の割合となるに至りて始て其明暗の差あるを識ると假定せよ此場合に於ては即ち四と六との割合を以て最小可知差異なりと言ふことを得べし最小可知差異を以て限界となし之れより差異少ければ無差別となり一般感情の部類に入る此最小可知差異即ち六と四に於けるが如き比例を稱して識域と言ふ然れども之れ固より腦髓中ゐ一定の區劃あるものにあらずして只た其數の比例ゐ下したる名稱なる事を忘るべからず此識域に亦二種の別あり差別域及び絶對域と言ふ差別域とは前例の光力に於るが如く其差異を識別し得べき最小可知差異を言ふなり絶對域とは前例の蠟燭を漸く減じて既に見能はざるの點に達したる

時即ち其燭光を漸次割除して二十分の一に至り猶は僅かゐ見ることを得るも既に二十一分の一ゐ達したる時は全く視能はざる者と假定すれば即ち此點を以て絶對域と名くるなり斯くの如き比例によりて其差異ある時ゐ於ては吾人は之を明瞭に知覺し得るも其差異之れより少き時は吾人は知覺し能はざるものにして之を無差別感情に屬するものとなす斯く論じ來れば其間自ら一定の限劃あるが如しと雖ども猶之を探究すれば終に其同一たるを知るべきなり光線に就て之を言へば吾人の網膜は血液循環して常に活動し其血液中の養分を吸收して其他を排拒し英語の所謂オスモス(Osmose)の作用を有す故に網膜は外部より光線の刺激を受けざるも網膜其ものゝ活動に由りて猶は或る感覺を有し眼中紫色に似たる或る一種の色あるを感ずるなり故に絶對域ゐ達するも猶は網膜内に於て光の存するあるが故に全く暗黑なりとは言ふべからざるなり而して絶對域なる名稱は只た便宜上より附したるものにして其實網膜其ものゝ光を基本となし之れに對じたる差別域たるに外ならず抑吾人の識なるものは差別より生ず

るものにして差別は識の特質なり斯く言へば只だ差別の三なるが如しと雖ども然れども元來差別なるものは一に對して生ずるものにして彼の佛教に所謂一にして多、多にして一と言へるが如く一にして一にあらず多ゐして多にあらず其間に差別なるもの存するなり一なる無差別なければ全く差別は生せざるものにして予が所謂差別の如きも即ち甲乙の差別ある時此兩者を包含したるものあらざるべからず故に差別域は識の域ゐして識は即ち差別なりと言ふべきなり而して識の形とは一ゐして多、多ゐして一と言ふが如きものを指したるものにして其れより以下を無差別感情或は一般感情と謂ひ猶ほ其れより以下を絶對的無識の腦髓活動とするものなり以來の心理學に於て一般感情の研究ゐ就ては猶ほ甚だ曖昧なり今日に於ては其性質頗る明瞭となり精神現象の基本は實に此感情なることを知るに至れり以上講述したる所を以て則ち識と無識との關係となす

第五章　情と識との關係及情の性質

今日は情と識との關係及ひ情の性質を述ぶべし、前に予は精神を分ちて識と情との二つゐすることを云ひしが、其の分ちは固より研究の便宜の爲めにせしものなれども單に理由なき區別をしたるにあらず、大に其の理由を存するなり、そは一般の物理學上の比論を以て識は靜力的即ち變化せざる形なり、空間に於ては恰かも幾何學ゐ於ては圓しとか四角なりとか云ひて物の形を研究するが如く識を純粹なる感情より分離して考ふる時は幾何學の如く運動せざる變化せざる形ゐして、感情は其の形の中に運動する所の力即ち動力なり、此の故ゐ物理學の區分法と相對して物理學ゐ於ても形と運動力とを區分するが如く心の活動の上ゐ於ても形と運動力とに分つ時は大ゐ研究の助となるべし、啻ゐ心理研究の爲のみにあらず物理學との關係を保つに於ても甚容易なるが故にかくは二分したるなり、然れども心理學ゐ於ては未だ幾何學の如く綿密なる研究ゐ達せず、まづロヂック即ち論

理學といふのは略ぼ之れに近けれども論理學は古くはアリストートルの論理學或は印度の因明學といふものあれども近世に至つてアリストートル流の論理學も大ゐ趣を變じ來りたれば近來は論理學は如何なるものなるか殆と一定したるものなしといふべく頗る其の基礎に動搖を生じたり、後來其の中より確乎たる論理學の成立する時は是即ち識の形にして其の形に從つて精神の活動せざるべからざる法則なるべし、此の事に付きても少しく考ふる所あれども猶漠然たるものにして今日に於ては未だ確乎たる科學の名は下すこと能はざるなり、當時大學に於ても智識論といふ一科ありて心理、倫理、論理は一の講座となり居れども論理は通常アリストートルの論理學ゼボンの論理學の如きものにあらず智識論即ち論理の因りて起る根本を研究する學問ゐして今日智識論と云ふ所の者を講ずるなり、識といふことを精神の中より一個拔き出して其の不變形なる形を一つに解釋せむとすれども未だ全く成立したるものにあらず、故に是は只かゝるものがありと云ふのみに止め置くべし、

感情の活動即ち精神中に活動する所のものは何かとならば即ち感情なり、此の事は頗る容易ならぬことゐして予自身も今は重にこの事に注意して研究に從事す故に予が所謂心理學は重に其の方向に傾けども必しも之れのみにあらず尙智識論と感情の性質との兩方より說かざるべからず、然れども今日の心理學はいづれか進めると云へば情の活動といふに傾けるが如し、されば先づ感情の性質及其の活動の方法を述べて其の方より心理學を說くを便宜なりとす、感情とは通常吾人が云ふ所の感情と同一なれども精神現象の根本となる感情は吾人が日々の經驗に於て或は怒り或は喜ぶ所の感情よりは遙に簡單なる感情を惹き起す所の根本なり、簡單なる感情とは如何なるものか、次第に之れを極むる時は其の極度に至つて單一なる感情といふに達す、此の單一なる感情とは吾人の經驗以外なるものなり實際吾人が經驗するものは已ゐ多少尨雜となりたるものなれば到底吾人の學問の基礎となる能はず總べての學問の根本は皆單一なるものに歸すべきなり、物理學に於て此の如きものゝ存在する根原は分子なりと云へども

其の分子といふものは未だ誰として之を見しものなし之を化學者は元子と云へども尙これも元子を一個分離して見しものなし、唯活動する上に於て玆に酸素あり、こゝに水素ありと云ふに過ぎずして誰として酸素一倍分離して如何なる精細なる顯微鏡に於ても見しものなし、かゝる學問の根本に至ればかならず吾人の知覺することを得ざる公準(postulate)といふものなかるべからず公準とは一の標準なり、されども單わ標準と云ひては一般に云へば尺度(モノサシ)にても標準なれどもこゝわ云ふは然らず其の學問を構成する所の根本に達したるものにして即ち標準の標準なり、恰も化學者が元子を以て公準とし物理學者が分子を以て公準とするが如く心理學者は感情と云ふものを以て公準とするなり、然るに其は見ることを得ざるにあらずや、誰も單一なる感情を見しものなしと云ふもろは唯化學者にても物理學者わても同じと答ふるのみにして外に理由を存せざれどもとにかくかゝる公準を置かずしては到底一科の學は成立すべからず故に單一なる感情といふものを公準として次第に研究するなり、然るにこゝに又一論

あり「此の如き單一なる感情といふものを置きて公準とするは妨なしとい へども必しもろは感情と云はず意志として可なるべし、單一なる意思が公準ならずや、或は意志にもあらず感情にもあらず單一なる力ありといふも可ならずや」といふ說も頗る行はる、然れども是には種々の精細なる議論もあれども其の混雜を避けて數言に之を陳ぶれば感情は最も早く發達するものなり、小兒の生るゝや否や直に泣聲を發するは意志わよれりとも云ふべからず、力なりとも云ふべからざらん、心なしとすれば論もなけれど心が存在するとすれば泣くことは感情の中にあり、下等動物わ於ても感情は最も早く發達し、次わ吾人一人前の者となりたる後の精神に於ても始終感情が其の人の心の基礎を構成するものとす、即ち過日述べたる如く無差別感情一般感情といふものありて心の基礎を構成するものなり、或る人之を喩へて感情は恰も地面の如く智識は其の上わ立つ所の家屋の如し、表面より見る時は直わ家屋が存在するが如くなれども其の實は家屋の下わは多量の砂利或は石などを積みて基礎と固むるが故に其の家屋も安全に存在す

るなり其の地面の下に隠るゝ砂利或は石は即ち感情なり、感情といふものは隠れて精神の基礎を成し其の上に智識或は觀念といふ者が存在するなり、さて此の智識觀念總べて智力の活動といふものは感情と比較すれば大ゐ綿密にして且つ複雜なるが、綿密にして複雜なるに從つて其の根ざす所淺く、感情の方は已に智識も觀念もすべて全く破滅し盡したりとも尚存在すされば感情は最も早く發達して且つ吾人の精神に於ても始終心の基礎を成す者なり一説に人の精神か次第に發達して如何なる觀を呈するかといふゐ人中年に至りて智力其最高點ゐ達し尚齢を重ぬるに從ひ次第に感情的となる之を論者は智慧の衰ふるなりとして例へば人間は六十七十にも至れば感情的となりて理屈を失ふは心の衰へたるものと看做すを得べし。之を以て必ずしも感情が發達せりとは云ふべからずとす此論によれば精神活潑なる時は智力最も盛なる時を云ふなり而して高年に至りて精神衰ふるものとす假りに一歩を讓りて此説に同意するも感情は最も早く發達して始終吾人の心の根本を成すものなるが故に智力の衰へたる後ゐ於

ても尚感情は衰ふることなく存在するなりと云ふを得べしされば感情は始終心の活動の根本にして生より死に至るまで常に存在するなり、然るに智識は之と反して其の中年に高く昇れども又高齢に達して低くなるを以て見れば感情の根本たるべきこと明なり、又宗教に付きて考ふれば宗教は元來感情より始りその後は正義といふことゝなるが又後には感情に終る之を佛教に考ふるに佛教は元ブラマ教より起りしものにてブラマ教の根本は感情より起れるものなり、是には大に議論あることなれどもそれは去ばらく措きてともかく感情より起れるなり、さて次に中頃は正義に走りて義といふことを重するに至りて罪人が自分の業を以て罪を購はざるべからずとの考に遷りて其の方ゐ向ひて大ゐ進歩したりしがかくては遂ゐ人情を滿足せしむること能はず、是に於て釋迦が現れて慈悲の教を立てたるが故に佛教ゐては慈悲を最も高尚なるものとせり、其の慈悲とは何かと云へば即ち感情なり、基督教も亦此の如く元は感情より起りしが後に義といふことを重じて人は法律を以て罪を購はざるべからずといふ一方に馳せ

過ぎしかば基督出でゝ法律を破り愛を以て之を改革せること恰も釋迦の慈悲の如く情を以て人を救はむとせしゐ同し、さて又社會一般の活動につきて考ふるに世間の人は情七分に理三分といへど情八分に理二分か或は情九分に理一分なるやも知るべからず、社會の情ゐよりて活動すること明なり、或は情ゐよりて活動するが故に惡しきなりと云はむか、然れども社會をすべて理窟におし當てむといひても到底能ふべからず又望むべきことにもあらず、情に由て活動するが至當のことなり、社會の活動力は人情なるが、人情を支配せむが爲に理を要する者にて理を造らむが爲に情を要する者にあらず情は主人ゐて理は一の器械の如きものに過ぎず、情といふ主人ありてその情を都合好く支配せむ爲ゐ理を要し始むるなれば情の活動は社會活動の根本なり、此の如く精神の活動する方より見るも社會の運動上又は宗教上の諸點より見るも情が根本なりと思考す、是は予一人のみにあらず、歐羅巴の學説も同じくこの方に傾けるが如く思はる、されど又反對論より云へば僻眼の誹も免れざるべけれど予は情が精神活動の根本なりといふ説を採るものなり

さて其の所謂情を科學的に研究せむには單一なる情を公準として次第に進まざるべからず、其の情は之を主觀的ゐ見る時は快樂或は不快樂といふものゐして之を客觀的に見る時は一種の衝動力なり、されば之を一方より見れば快樂或は不快樂といふ性を備へ他方より見れば衝動力なり、其の單一なる情は到底吾人の見ること能はざるものなるがその知覺し得べきものゐして最も單一なるものは感覺なり、されば研究の上ゐ於て實際吾人が研究の材料とするを得るものは感覺なればまづその感覺は如何なるものかを極めざるべからず

感覺とは心が外物の刺激ゐ反應して生ずる所の一の精神現象なり、今指を突けば痛しといふ感覺あり、物に觸るれば觸れたりといふ感覺あり、光線が眼ゐ入れば眼に入りたりといふ感覺あるは皆是感覺なり、既に感覺となりて現れたる時ゐは頗る複雜なるものなれども吾人の精神現象に於て知覺し得べきものはとゐかく感覺なり、此の感覺に三の性あり、

感覺の三性

(a)質
(b)強サ
(c)快或は不快

(一)　質とは皮膚に觸れたりとか、或は耳に觸れたりとか、或は眼に觸れたりとか、或は鼻に觸れたりとか、或は口に觸れたりとか云ふ所の質なり、光線の感覺と音響の感覺とは其の質を異にし、音響の感覺と香の感覺とは又質を異にせる等皆各質あり、之を質と名つく、

(二)　強さとはこの感覺が強しとか、或は彼の感覺は弱しとかいふ通常の強度なり、

(三)　快樂或は不快樂とは感覺は一種の感情なればその感覺は快樂なりや不快樂なりや二者其の一に居らざるべからざるを云ふ、

「質」と「強さ」と「快樂或は不快樂」の三者を備へたるものは感覺なり、活動する間には外物が心に反應して來るなれども既に過ぎたる感覺を取りて分析すれば必此の三者を有するものとす、

強と質との關係

次に此の三者に頗る奇妙なる關係あり、今茲に一感覺あり其の質は少しも變らざれども其の量變化すれば或は快樂となるか、或は不快樂となるか、或は苦痛となるか知るべからざれば質の變らざる時は強さの變動によりて快不快の上に變動を及ぼし即ち強さと快不快とが共ゐ變するなり、然れども其の變動の有樣は又別の問題にして強さの次第に其の度を高むる時は快樂の度をも增すべきかといふに必すしも然らず、或る程度までは快樂增加するも此度を過ぐる時は返りて苦痛を生ずることあり、快或は不快といふは之を合したる一語なきが故に已むを得ず言ひ惡しけれども誤なからん爲に此の如くいふなり、

次に強さと質との關係なり、是も亦頗る妙なり、強さと質とは全く別物の如く考へらるれどよく〳〵究むる時は大ゐ二者の間に關係あり、例へば光線と音響との如きは其の感覺の精神上に現れたる上ゐ於ては全く別物なれども物理學上より其の性質を研究すれば音響は空氣が一秒間に幾つの振動をする時は音響の感覺を生するなり、ヘルムホッツの研究にては十六よ

り以下は調子を成すこと能はずして單ゐ音を生し、十六以上の音が寄る時は一個の調子となり、是より上りて四万許となりては殆と聽くこと能はず耳ゐは感すべからざるに至る、さて又うの數非常に增して一秒間に何億万の振動となれば眼に感して光線となると云ふ、されば元音響と光線とは全く違ひたる、ものゐあらずしてたゞ數の關係(强さにはあらず)によりて此の如き相違を呈するなり、されども音響が四万に止りて何億万と云ふ光線の波動に達するまでの中間あり、予が考ふる所にては熱は光線よりは波動粗く音響よりは細かなることは物理學のいふ所なれば熱の音響と光線との中間にあるものなること疑ふべからず、之を見れば光熱音の三者は全く質を異にするが如く見ゆれどたゞ數の關係のみなることを知るべし、通常質は別物の如くなれども物理學上の研究より相連絡するものあるを發見すべし自餘の感覺、味覺、嗅覺等も此の波動の數によるものならんと云ふものあれども果して然るや未だ發見することを得ず、一秒間に幾何の數が鼻を擊ちて震動すれば嗅覺となるか、幾何舌を震動すれば味覺となるかはいまだ不

明なり、たゞ已に明なる音響、熱、光線の關係を以て此の如き關係あることを知るべし

是より少しく强さのことを研究せむにコップと水瓶とを持てばコップは輕く水瓶は彼よりも重しといふは如何にしてか知るぞと問はゞ答ふるゐ困まむ、是は輕からずや、持ちて見よといふより外なし、さて持ち捧げて此は輕し彼は重しと云へどもそは如何なるものぞと又問ひ返されなば重きが故に重し、重く感ずるが故に重しといふ外なければ今は輕しといふ感覺と重しといふ感覺とはいかに相違するかの問題となるべし、そは感覺は同じけれども其の量ゐ强弱あるべしと云ふとも量といふことは如何にして起れるか、コップと水瓶とを持てば誰しも水瓶を重しと云ふべけれど二物の中、重き方を次第に輕くし輕き方を次第に重くする時は其の間に自ら違ふ所あらむに實際いづれが重くいづれが輕きかを別ち難きに至るべし、例へばこゝに(イ)といふ感覺と(ロ)といふ感覺あらむに只見たるのみにては(イ)と(ロ)との二つの感覺ありといふより外なけれど之を經驗して(イ)の感覺を權

衡に掛くれば八オンスあり(ロ)の感覺は一パウンドありとせば(ロ)の感覺の重きこと始めて明なれば強弱の感覺は物理上より云へば度の差違に由るものなれども精神上より云へば全く關係なき二の質の違ひたる感覺なること恰かも前の音響と光線との關係の如し、即ち音響と光線とは全く質を異にせる感覺なりと思ひしに物理學上より關係を生したるが如く重し輕しといふは類を異にせる感覺なれども實驗上より此は重し彼は輕しといふ比較を生したるなり、但音響と光線との如きは深く研究せされば其の關係のあることは知るべからざれども重し輕しの感覺は種々日常の必要よりして早く野蠻時代に於て其の關係を發見せり、其の後に至りては重し輕しの感覺は殆と先天的に備りたるが如くなれども最初に於ては決して何の關係もなきものなり、只(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)といふ類の異なりたる感覺ありしを經驗上よりして(イ)を一に、(ロ)を二に(ハ)を三に(ニ)を四に(ホ)を五にしたりといふが如く經驗的に秩序も明なるに至れり、或は(ロ)(イ)(ニ)(ハ)(ホ)の如く感覺の混雜して秩序なかりしが經驗上より順序を定めたるものなれば質と強

さとは大に共に關係せしものなり、今日質の異なるが如く思ひしものも相互に關係を有することあり、又は質は違はずして量の違へりと思ひしものも大に質に差違を生ずることありて質と強さとは互に相關係するものなり、されば單に強しとのみ云ふ時には且感情にして明に是は強し或は弱しといふことを認むること能はず、恰も彼の兒童が喜び或は泣くが如きものに似て己の喜ぶは果して實の喜か或は悲なるか、泣くことは果して實に悲しきか知るべからず、唯自然の儘に悲しき時は能ふ限の聲を揚げて泣き、嬉しき時は能ふ限にとび歩くが如く感情の強さのみ存するなり、次第に經驗を積むに從ひて種々の感情ある中に一二三四の順序を會得し始めて此は強し彼は弱し等の考を生ず、これは只強さといふべきものにあらずして強さといふものに秩序を立て標準を定めて測り見るが故に非常に悲しきことありてもさばかりは泣くべからずと思へば抑へ、嬉しきことありても喜を表すべからざる所なれば又抑ふるが故に遂に強さに標準を生ず、之に隨つて此の感情は強し彼の感情は弱し等の區別を生ずるなり、既に標準定り

其の標準に對して此は強し彼は弱しと區別するゐ至れば即ち自然に感情を測定することを得るなり、この測定するを得べき爲に強さを指して量と名つく、測定すること能はざる小兒の感情には只強さのみあり次第ゐ標準が定る時には量となる、故に外の物につきて比較すれば可なり、例へば「水が澤山ある」といはむに澤山といふは如何程をさすか漠然として意味なきが一升或は二升といへば已に標準を立てゝ測りたるものなれば之に相應する量を知るべきなり、されども量の定らぬ時には只容ゐるのみ、容と云ひ量といふも畢竟同じけれども區別する時は測らざるものを容といひ測りたるものを量といふなり、力量の如きも測らざるものは強さにて測れるものは量なり、已ゐ量となりたる上は種々の類を異ゐせる感覺が集りて測ることを得たるなれば單に強さゐはあらずして強さゐ質の加はりたるものなり、強さに質加はりて量を生ず、質と強さと快不快とが互に相關係して活動すること此の如し

感情の結合

第六章　感情の結合

感情なるものは之れを極めて單一なる元素に至るまで究極するときは殆と無差別となる其無差別なる所に既ゐ感情の元素存するなり然れども吾人の知覺し能ふ感情は此等微細の元素ゐあらずして即ち感覺なりとす既に感覺と稱する以上は目に映じたる感覺手に觸れたる感覺耳に聽きたる感覺と云ふが如き一定せるものならざるべからず是等一定せる感覺は已に述べたるが如く其量の微少なる時に於ては之れを區別して(即ち視覺觸覺聽覺と云ふが如く)覺知し得る能はず故ゐ此時に於ては未だ吾人の稱して一ッの感覺と云ふものにはならざるなり然れども之れを構成せんとする活動は正に存在す例へば木葉の二三枚あるときゐは微風のために音を發せずと雖ども其積て山を爲すに至ては微風ゐだも驚くべき程の音を發す夫れ然り既に山を爲すの多きに至て發音するものとせば其僅に一枚の時といへども自然其作用の幾分かを存せざるべからず只微少ゐして之れを

知覺し得ざるのみ如此吾人の感覺も一の感覺となりて現はるゝ前極めて微細單一なる元素の重積して成立するものなること明かなりとす吾人が物を見る事を得るは光線の眼を刺激するより起るなり而して光線の刺激なるものは極めて微細なるものにして一「セコンド」間に何億といふ刺激を與ふるなり此微細なる光線の震動積みて吾人の眼に一の感覺を與へ茲ゐ始めて吾人は一の物象を認むるを得るなり然らば幾何位積て一ッの感覺を生ずるものなりやと云ふに其量定は頗る困難なる問題なりとす去りながら其光線の強弱に由ても大に相違あるものゝ如し例令ば電光の如きは一「セコンド」の何千分の一(或人の計算ゐよれば二千五百分の一なりといひ又或人の計算には尚之れより短かしと云ふ)にて能く物を吾人に視覺し能ふ程の強力を有すといへども蠟燭の光の如きは一「セコンド」の千分の一位ゐ達するときはすでゐ感覺朦朧として殆と有耶無耶の間ゐ至る尚其二千分の一に至るときは充分試驗することさへ能はざる程にして殆ど無感覺なるが如し如此幾何積て一ッの感覺を爲すやと云ふ事は其量定頗る困難なり

感覺重積ゐ就ての二說

といへども兎ゐ角微細なる元素重積して遂に精神現象を起すといふ事は疑ひなきものゝ如し

然り而して其積み重るといふ事に二個の說あり即ち何處にて積み重るものなりや神經の作用に由るか將又感覺其ものゝ積み重り行くや換言すれば神經の作用にて積み重ねる以て一の感覺として精神中ゐ現出せしむるものなりや又微細なる感覺の多く積んで更に一の大なる感覺に至るものなりやと云ふ二個の考なりとす余輩の考にては之れは兩方の作用あるものゝ如し何となれば此處(講師手を指す)の神經は只一線の神經纖維なれども既に脊髓に入り腦髓に達するときは僅かに單一なる一線にあらずして神經細胞を通ず其細胞より細胞に傳達するには幾分か其處にてEnergyを積み始めて其次位の細胞に達するなり語を換へて云ば細胞なるものは或る刺激を傳ふるに當て幾分か抵抗するものゝ如く其れ故に數多の神經細胞を經て終ゐ腦中に入り一の感覺を生ずるには餘程のEnergyを積まざるべからず此點より見れは疑ひもなく神經作用の上ゐてEnergyを積み重るな

り然らば一ッの感覺となりたる以上は互ゐ結合するの性質なきやと云ふゐ決して然らず一ッの感覺となりたる以上にも亦必ず結合するの性質を有するものにあらず故ゐ一部分は神經の作用に由て積集し一部分は感覺となりたる上に於て更に積み重り此兩作用に因り微細なる刺激漸く積り以て神經作用を生ずるなり

同類の結合

而して其結合は同類の結合と異類の結合の二あり同類の互に結合するといふ事は物理界ゐも存する事にして必ずしも精神界に於てのみ存する作用にあらず此同類のもの互ゐ結合すると云ふ事は物質、精神、共ゐ通有する所の一ッのEnergyの作用なりとせば大に瞭解し易きなり故に同類結合と云ふ事に就ては別に説明を要せず其委細なる事は種々書物もある事なれば其書物に讓り之れより異類の結合と云ふ事に就き説明せんとす

異類の結合

異類の物は何故に結合するや物質界に於ては異類の物は互に拒反し背離するといふを原則とす尤も化學の作用に因て種々の物の抱合するといふ事あれどもこれは物質世界に於ても亦一種特別の作用に屬するものなれ

ば別に化學と稱する一科を爲せり然れども一般より論すれば同類は互ゐ相集り異類は互に相拒反すと云ふ事は物質界より精神界ゐ通有せる作用なりとす今此精神界中に於て異類を結合せしむるものは何なるか此要素は時にあるものなりとす時が結合せしむと云はゞ何やら時に力を含有するものゝ如く聞ゆるも決して別段時に力の存在せると云ふにあらず只同時に精神中に現はれたるものは互に結合するものなりと云ふ事なり去りながら同時と云ふ思想の活働なるものは瞬間ゐ現はれ瞬間に止息するものにあらずして漸次に現出し來り漸次に沈靜するものにして即ち一ッの現象の未た止息せざるに引續きて又一ッ來るといふが如く時間の繼續し來る所に即ち同時に現はれたるものゝ未た沈靜止息せざる内に次の現象來るを以て即ち時間の繼續の上ゐ於て疑ひもなく同時に現はれたる者となるなり故に爰に「同時に思想中に現はれたるもの」は「互に結合す」と云ふ一ッの法則を生ず之れを通常心理學にて觀念の伴生又は觀念の聯合と云ふ然れども伴生法若くは聯

合法と稱するゐ當ては時の同伴又は類の同伴と云ふが如く種々類別すれども結極之れを論究すれば時の伴生及ひ類の伴生の二に外ならず彼の同類の互に結合する者なる事は物心二界を通して有する作用なりと認むるも同時に現はれたる異類の者の互に結合するは全体如何なる理由なりや是れに就ては多小想像説ありと雖とも所説多くは哲學上ゐ渉らざるべからざるを以て此問題は暫く之れを他日に讓る事とせん然り而して同時に現はれたるものゝ必ず結合するといふ事を一の事實として考ふるときは是れ即ち心理上學の所謂伴生法にして精神の作用も亦時に支配さるゝものなりとす而して同時ゐ現はるゝものと云へは其如何なるものゝ現出し來るや知るべからず吾人の思想中に現はるゝ所の偶然にして且つ種々異樣なるものは其時を同ふするに於て必ず聯合せざるべからず是に由て之れを觀れば吾人の思想の發達なるものは實に偶然のものにして之れを換言すれば我々の思想の發達は外界の境遇に支配されつゝゐるものなりとす夫れ然り吾人々類の思想の發達が外界の境遇に支配せらるゝものなり

とせば彼の教育なるものゝ如何に大切なるものなるやを知るゐ足らん故ゐ幼稚なる兒童の思想の發達も同時に思想中に現はれたるものゝ毎に聯合するものなれば其思想中ゐ現はるゝ所のものをして毎ゐ善良にして且人間の生涯に必要有益の事のみなりせば是れ即ち家庭の教育と云ふべきものにして非常に幼童の思想の發達を助くるなり然るに若し偶然にして少しも秩序立たざる事のみ毎に同時に精神に現はれなば小兒の思想は偶然に發達して或は後に一定の學問を修めしむる能はざるに至るやも知るべからず兎ゐ角秩序的不序的を論せず同時に精神に現出したるもの聯合して伴生の元となる事疑ひなし而して其伴生は前に述べたる如く同類の伴生と同時に現はれたるものゝ伴生の二にして其同類の伴生は或は之れを内部の聯合とも名つけ得べきものなり何となれば聯合すべき同類のものはもと其れ自身に聯合すべき一の性質を有して聯合するものなれば内部の聯合と稱するも不可なきなり然れども時を同ふして現はるゝものは夫れ自身に聯合せんとするの性質を有するにはあらざれども例へば此コ

伴生法

ップ」と水と(講師机上の「コップ」を指す)を同時に感覺し同時に精神作用を作すときは其「コップ」及水其ものは固より互に聯合すべき性質を有せざるも感覺の時を同ふするより毎に伴生し來るなり如此自己の性質外に聯合するものの之れを外部の聯合と云ふ而して精神作用中此二作用の何れが尤も多きやと云はゞ内部の作用なるものは極めて少くして人の經驗に富み漸々發達せる精神外部の聯合多きものなり當に多きのみならず此外部聯合なるものは吾人々類に採り非常に必要なる精神作用なりとす

予はこれより感覺が聯合し且伴生する所の順序に就て講述すべし通常稱する所の伴生法若くは聯合作用なるものを區別すれば時の聯合及び類の聯合の二となる其他之ゐ加ふるに場所の聯合を以てするが如き種々の區別をなすものあれども予は此二分法の最も適當なるを信ず而して類の聯合とは精神其物が固有する所の作用にして一に之を内部の聯合と稱す即ち精神相互の内界作用より起る所のものなり時の聯合はすべて外部より來るものにしてまたこれを外部の聯合と云ふ何となれば同時に吾人の感

類の聯合

判斷

覺に入り來りしものは其如何なるを問はず必ず後に伴生するものなればなり是を以て或心理學者の如きは類の聯合は決して無きものにしてたゞ時の聯合ゐのみよるものなりと唱道するあり然れどもこれを予が平素の經驗に徵するに同類の聯合は精神固有のものにして必ず其れ自ら特立すべきものなるが如し故に予はこれより類の聯合及び時の聯合が吾人の精神活働上に如何なる影響を與ふるかを區別して講述せんとす

同類の聯合なるものは心の總合作用にして此作用より起る所の精神活動は種々異樣の現象を呈出すと雖ども之を大別すれば判斷、區別、及び概括の三作用ゐ過ぎず此三作用は即ち總合作用の變化し來りたるものにして尙は其中には種々精細の區別ゐるべしと雖ども歸する所はすべて皆總合作用に外ならずとす以下總合作用が如何ゐして此三作用ゐ變化し來るかの理由に就て說述せん

第一判斷　物を判斷するは如何なることなりや予は實例によりてこれを說明せんに今吾人が一物を見てこは硝子なりと判斷すと仮定せんか斯の

如き判斷をなす場合に於ては其以前既に吾人の精神内ゐ箇々の概念存在せざるべからず例へば左の(甲)(乙)(丙)の三箇を以て既に存在する所の概念と仮定し

(甲)……硝子
(乙)
(丙)

(イ)なる物體が眼より吾人の感覺ゐ入り來るとせん而して此(イ)なる物體は未だ聯合作用の行はれざる以前に於ては其何物なりやもとより明了ならざるが故に予は姑らくこれに付するに(イ)なる名稱を以てし置くべし却說此物體は既存の概念(甲)(乙)(丙)の三者中其孰れゐ近きや若し此物體ゐして全く(甲)に合するとせんか此に始めて總合の作用により(イ)は即ち(甲)なり(甲)は即ち硝子なりと判斷し得べきなり然れども一の概念なるものは種々雜多の觀念中より抽象概括して得たるものなれば此場合に於けるも(イ)なる物體の觀念が全然(甲)の概念に總合一致するものにゐらず斯る場合に於ては

たゞ(甲)に近似の部分のみ總合して其近似せざる部分は拒反せられて殘留すべし即ち(イ)と(甲)と總合したる部分に於てはこは硝子なりと判斷し得たれども未だその何種の硝子なりや又何人ゐ屬するやの點に於ては兩者の間總合せざるを以てもとより判斷することを得ずこれゐ因りて之を觀るに判斷とは吾人の精神中既に存在する所の概念が新ゐ吾人の感覺に入り來りたる心象中より自己(既存の概念)に類似する部分を抽出してこれを自己に聯合せしむることを云ふなり即ち前例に於けるが如く吾人が既に(甲)即ち硝子なる概念を有する場合に於て新に來りたる(イ)なる心象は此概念と互に相聯合するにより始めて(イ)は硝子なりてふことを判斷し得るなり之を要するゐ吾人が物を判斷すてふことは新來の心象と既存の概念と相互の聯合作用ゐよりて始めて起るものなり即ち同類の物が相合するてふ精神作用より起るものなりとす

第二概括　概括も猶は總合作用によりて起るものなり例へば爰に(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)なる物體ありて是れ等の物體は共に

(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)
(甲)(甲)(甲)(甲)(甲)
(い)(ろ)(は)(に)(ほ)

(い)(甲)(イ)
(ろ)(甲)(ロ)
(は)(甲)(ハ)
(に)(甲)(ニ)
(ほ)(甲)(ホ)——(物體)

(総合作用によりて分離したるもの)——(概念)

皆通有の性質(即ち甲)を有するとせんか此場合に於て吾人の精神中既に(甲)なる概念あれば此概念によりて各物を觀察し以て各物共に此概念に通ずべき性質あるを判じ得べし故に是れ等の物體中(甲)なる部分は既存の概念(甲)に聯合して上圖の如き趣きとなるなり

既存の概念

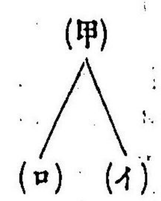
(イ)(甲)—(い)
(ロ)(甲)—(ろ)
(ハ)(甲)—(は)
(ニ)(甲)—(に)
(ホ)(甲)—(ほ)

さて以上は(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)が普通性を有すると見做したるものなれども此際にも是れ等物體の心象が既存の概念

と総合せざる部分は別に殘留して(い)(ろ)(は)(に)(ほ)となる即ち(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)なる物體の心象は分れて(甲、い)(甲、ろ)(甲、は)(甲、に)(甲、ほ)となるなり而して斯の如き分離は総合作用より來りたるものゝみして別に吾人の精神中分解力若くは分析力と云ふが如き一種の力有りて(イ)を(甲)と(い)に分ちたるものにあらず(イ)の中(甲)なる通有性のみ既存の概念に結合したるを以て(い)なる部分は自ら分離したるなり即ち此分離は総合作用の結果にして別に格段なる力の作用によるにあらざるを知るべしそは恰も化學の分析に於けるが如く分析は全く原子の親和力に基するものにして別に化學上分離力なるもの存在するにあらざると全一の理なり故ゐ予はこれを稱して概括と云ふなり

第三區別　吾人が物を區別してこは硝子なりこは陶器なりと知り得るは是れ亦新來の心象中類似の部分を既存の概念に聯合せしむるより起るものにして別ゐ吾人の精神中區別力と云ふが如きもの存在するにあらざるなり今此に(イ)(ロ)なる酷だ類似の性質を有する二物ありと假定しての類似の二物が如何なる狀態に至らば區別し能ふか又如何なる狀態ゐ至らば區

別し能はざるかに就て說明せん



例へば此に(イ)(ロの二物あり此二物は表面甚だ相類似するを以てもとより普通性あること疑なしと雖どもまた其間自ら幾分の差異なきにあらず而して今此三物を以て(甲)なる概念に比較すると假定せんゐ若し概念の總合作用にして密ならず且鈍なりとせば此二物は彼の概括の場合に於けるが如く相分離せず(甲)と(イ)と(甲)と(ロ)との關係共に緻密ならずして殆んど兩者を區別すること能はずこれ(甲)なる概念甚だ明了ならざるが故に從て此二物を總合する力弱きに因る今實例に照らして猶ほこれを詳解せんに此に二箇の金貨あり其一は正實の金貨にして他の一は贋造なり然るに其贋造甚だ精巧なるが故に通常人がこれを見るときは殆んど兩者を判別すること能はずこは金貨に就て大體の概念を有すると雖ども其概念甚だ緻密な

らざるが故に正實贋造孰れを見るも殆んど同一の如くにして其間の差異を看破する能はず即ち金貨なる概念の總合作用弱きゐ因るものなり故に彼の兩替店に於ては小僧をして贋金の看破に巧ならしめんがため先づ初は純金のみを取扱はしむ斯くの如くして二三年を經過すれば後には一瞥以て贋金と否とを看別し得るに至ると云ふまた近時米國政府の大藏省に於ては不正貨幣を取調べんが爲めにこれを判別するの專門家を備用し居れり而して其不正貨幣を看別するの巧なるは實に驚くべくして通常人がたゞ其箇數を算ふるよりも速かなり其取調べの際若し疑はしきものおれば之れを傍に區別し置き後一々これを檢するに果して皆不正のものゝみなりといふ而して其如何にして斯く速かに看別するやを問ふに彼自身も猶ほこれを解せずたゞ其箇數を算ふるの際何となく差異あるが如くゐ感するのみ而して其差異とは强固若くは柔軟と云ふか如き明了なる性質のものにあらずして甚だ漠然たるが故に幾んどこれを言辭に表はすこと能はずと云ふこれ即ち他にあらずたゞ金貨なる概念の緻密なるが故なるの

み故に前例に於て(甲)と(イ)との關係密にして從て總合の作用強きが故に直に(イ)は純金なり(ロ)は贋金なることを判別し得べく若しこれに反すれば(イ)も(ロ)も共ゐ混同して殆んど區別すること能はざるべきなり斯の如くたゞ(イ)のみを標準として(ロ)は反面的に眞正のものにあらずと區別するは即ち總合の作用によるものなり

以上は即ち純金と純金ならざるもの即ち一を否定する所の區別に就て說明したるものなり而してこは黃金なりこは銅なりと云ふが如く其區別を可定するの趣も略ぼ否定に於けるが如しと雖ども此兩者の間ゐ於ては精神の狀態少しく異なる所あり即ち二物の區別を可定する場合に於ては(甲)と(乙)との二箇の概念存在せざるべからず而して此二箇の概念にして精神內既に細密なる區別あれば其總合の作用もまた從て强し例へば爰に(甲)と(乙)及び(イ)と(ロ)とあり而して(甲)は金(乙)は石の概念なりと假定せよ

(甲)——(イ)——金
(乙)——(ロ)——石

若し淺識のものにして此二箇の概念綿密ならざれば幾んど(イ)(ロ)の二物を區別すること能はざるべしと雖ども其概念にして既に綿密ゐ且明確なりとせば(イ)は(甲)に屬し(ロ)は(乙)に屬す即ち(イ)は金にして(ロ)は石なりてふことを判別し得べきものなりこれ即ち可定と否定の區別ゐ於て差異ある所なりとす

以上講述したる所は精神固有の活動は分解力にあらずして總合の作用なり之を換言すれば總合なるものは即ち精神の固有性なり實際に於てはもとより物を分解すてふこと行はるゝと雖ども分解力なる力の作用によるにあらずして總合の作用より其結果として自ら分解を生ずるものなりとのことこれなり

總合作用が概括、區別、判斷の三作用として現はるゝことに就き尙ほ此に一言せんとす凡そ知力未だ幼稚なるものは分析、總合孰れの方向ゐ向て進暢するやと云ふゐ總合が基原となり總合漸く復雜となるゐ從て分析もまた精密となるものなり故ゐ世ゐ所謂總合、分析として恰も異別の如く稱ふる

時の聯合

ものも其基原一にして兩者に分岐したるものなり即ち此兩者の一に歸する所は實に總合なる基原の一點に外ならずとす然れども若し總合及び分析を比較し來りて其孰れか復雜なりやと云ふに至りては實に其分析なること甚だ明了なり吾人は常に一理を以て多事に推及せんとするの傾向あり即ち既に一二の道理を了得せばこれを以て諸事に應用しこれによりて諸事を判斷せんとす是れ總合の作用なりと雖も時と場合とを區別し其差異に從て道理を應用せんとするは大に分析の作用を要することにして斯の如き場合に於ては分析は復雜なる精神の活動なりとして解すべし而して以上はたゞ內部の聯合でふ點に於て總合、分析の如何なるものなるかを説明ゑたるのみ

予はこれより外部の聯合即ち時の聯合に就て講述すべし時の聯合とは其物の何たるを問はず同時に精神內に現はれたるものを精神が聯合すと云ふことこれなり故に其中には現はるゝこと實に偶然にして相互の間些の關係なきものあるべくまた物質世界の理法による所の、本體と性質若くは

物質世界の理法により相伴ふべきもの

偶然同時に現はるゝもの

本體と働きと云ふが如きもの例へば馬なれば走る、硝子なれば脆し、また水なれば溺るとふが如き全く物質世界に屬する所の秩序なるものあるべしよつて時の聯合を大別すれば(一)物質世界の理法によりて終始相伴ふべきもの(二)偶然同時に現はるゝもの、二となるべし

(第一)物質世界の理法によりて常に相伴ふべきものを猶ほ仔細に觀察すれば其中種々の區別あるを發見すべしと雖ども予は先づ其大體に就て講ずべし抑も物質世界の關係即ち本體と働き若くは本體と性質と云ふが如き關係は常に吾人の精神內に同時に現はるゝものなるが故に精神の聯合の秩序を定むる上に向て大なる影響を與ふるものなり即ち物質世界のものが斯の如く活動するが故に精神の活動もまたこの摸型に從て鑄冶され吾人の精神活動中少くも此點に於ける秩序は物質世界の活動の秩序によりて定めらるゝものなり

(第二)偶然同時に現はるゝものは其範圍極めて廣漠たるが故に從て其變化もまた幾んど窮極なきの觀あり即ち心像によりて大に變化する所のも

のあり例へば教場内ゐ修身畫を掲げ置き其傍にて讀書する時は其畫と書物とは全く些の關係なきものなりとするも同時に其觀念中に入るが故ゐ後ゐ至て此二者自ら伴生することあるべきなりとは即ち偶然同時ゐ現はるゝものが伴生すてふ理法を以て教育上に應用したるの一例なりまた兒童には何れの時何れの場合を問はず最も善良の摸範を示さゞるべからずと雖ども殊に家庭に於て然りとす何となれば人として家庭ほど他に愛すべきものなく家庭は實に安逸、愉快、融和の樂境なり然るに其家庭に於て不良の摸範を示し其最も愛する所のものと不良の事とを聯合せしむるに至らば教育上に障害を與ふること夫れ果して幾何ぞや若しこれに反して示すゐ善良のものを以てせば其兒童の腦漿に浸染すること蓋し深かるべし善良の摸範はもとより何れの時何れの場合に於けるに論なく大に兒童の德性を養ふに効あるべしと雖ども其最も愛する所の家庭に於てこれを示せば二の善良のもの聯合するが故に其勢力や實ゐ強大なるべしまた通常世間に於て利用する所の伴生法に就て其一例(道德上の善惡は敢て問はず)を示

せば我國在來の公事師なるものが人を說服するに極めて妙を得たることこれなり而してそは如何にして說服するやと云ふに對手が最も希望する所の情慾に訴へて其人を最も愉快なる感情ゐ誘き入れ而して後徐々談判を始むるなりさすれば愉快の感情と談判と聯合するが故ゐよし其談判は全く其人に關係なき事件否殆んど正反對に於けるの事件なりとするも己の情慾に訴へられて最も愉快なる感情中にあるが故ゐ終に其判斷に應するに至るべしこれ愉快の感情と談判を聯合せしむるを以て對手の心を緩和せしむるに利用したるものなり而してこは全く相互無關係のものを聯合せしむるの一好例として見るべきなり

是ゐよりて之れを觀るに實際吾人の精神活動中には幾多の總合作用ゐるべしと雖ども時の聯合なるもの其大部分を占むるが如し抑も時の聯合なるものは其何たるに論なく同時に外部より來るものを悉く聯合するものなり故にまた一方よりこれを考察すれば精神はもと如何なるものも總合して以て一團となさんとするの性を備ひ而して精神中の智識に種々

精神を尨雜となす所の秩序

の材料を與へて漸くこれを尨雜となすものは即ち外部より來るものなるを知るべし之を要するに總合せんとするものは精神固有の作用にして尨雜となさんとするものは即ち外部より來るものなることを記憶すべし精神を尨雜となさんとする所の秩序は一部は物質世界の活動の秩序に從ひ他の一部は全く偶然的の結合によりて定まるものなり偶然的の結合と雖ども之れを屢すれば終に精神固有の作用の如くなるべし通常心理學に援引する所の一例を擧ぐれば曾て馬が或場所に於て或る事情の爲めに驚嚇せられたり而して爾來其馬は復び其場所に赴くを嫌忌したりとこの例に於て其場所と驚嚇せられしことゝは全く偶然的の結合なれども此馬にとりては終に必然的の關係となるに至りしなりこは啻に馬のみに止まらず人間世界に於て斯る事例を擧ぐれば比々指を屈するの煩はしきに堪へざるべし斯の如く偶然の作用ゐより起りし所のものも終に精神内ゐ於て必然の關係を生ずるに至るものなり是によりて觀るに吾人の教育なるものは其幾分は内部の聯合即ち總合作用を修練することによりて遂行せ

らるゝものなり殊に兒童の教育に於ては尨雜なる智識を與ふるの必要なく力めて内部の總合作用を修練することに留意すべし是に於てか所謂開發的教育なるもの起るを見る然れども其兒童の知力漸く進暢して中學以上の教育を受くるに至らばたゞ内部の總合作用ゐのみ偏重すべからず種々の事情に遇はしめ種々の經驗を積ましめて以て尨雜なる智識を與へざるべからざるなり而して尨雜なる智識を與へんには經驗によるの外途なし若し經驗少く内部の總合作用にのみ富むときは如何なる人物を造るやと云ふに能く事を判斷し物を區別してこれを批評すること甚だ巧妙なるべしと雖ども自家獨立の見識を立つることゝ乏しかるべし若しこれに反し種々の事情に遭遇して經驗を積み重ぬるときは尨雜なる智識を得て卓然超立し自家一定の見識を現はすに至るべきなり然れども又た只經驗にのみ富ましむるを以て直に優秀の人物を得べしと速了すべからず實に内部の總合的聯合と外來の尨雜なる智識とは人知の要素にしてまた人知の根本なり此二者の間を過不及なく最も適當の比例に從はしめて以て教育を

施すものは即ち稱して最良の教育者と謂ふべきなり彼のサレー氏等の心理學中伴生法の條下に於て説明したる所のものはもとより其正確如何の點に於て是非すべき所なしと雖ども亦其範圍を頗る狹隘に限りたるの嫌あり聯合若くは伴生法なる精神作用は人の智識全般に向て影響を與ふるものにして其及ぶ所の範圍極めて廣衍其占むる所の地位は頗る重要なり

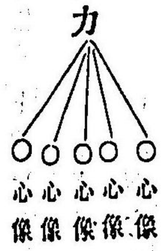
第七章　想像

連想即ち觀念の連合に就て吾人の心が活動する順序と外界の順序とが相符合する所以の道理は既に前章に於て説明したり故に予はこれより直に想像に移りて講述せんとす然るに或心理學者は想像の説明を以て今少しく後段に讓るを適當の順序なりとなすものあり然れども予は此語を以て狹義に使用したりし時のみ或は然るべし予が此に所謂想像なる語はこれと異ふして極めて廣衍の意義に使用したるものなるが故に其講義も

また自ら殊別の經路によらざるを得ず抑も廣義に於ける想像とは記憶心像及び記憶心像の結合若くは分離によりて心中に發現したるすべての心像を抱括するの語にして是れ等の心像をばこれを總稱して想像的心像(廣義の解釋にて)と云ふなり故に想像とは記憶心像の連合作用より起る所のすべての働きを包含するものなり舊來の心理學に於てはこれを想像力と稱して一種の力なるが如く説明したれども想像は毫も或格段なる他力を籍るものにあらずして記憶心像の結合若くは分離によりて發生す即ち記憶心像其ものゝ活動よりして發生するものなり而して斯くの如く説明するものは即ち英吉利の學派なりとす

今復び此に此二派の説を詳解すれば

(一)想像力なるものありて既に存在する所の數多の心像を總括す

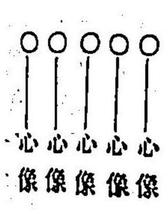


舊來の學派

英吉利學派

其趣恰も上圖に示すが如し例へば彫刻ゐ適したる想像、繪畫に適したる想像、或は詩、歌、若くは小説ゐ適したる想像等敢て其種類の何たるを問はず皆な一の想像力なるものによりて諸般の心像を或は綜合し或は分析し加味配劑して以て始めて構成するものなり

(二)各個心像其ものが互に相集りて種々異樣の形狀に變ずるものにして決して想像力と云ふが如き或格段の他力を藉るものにあらず其趣は即ち左圖に示すが如し



而して其變化の趣は「グライドスコープ」(覗き目鏡)の比喩を借りて容易に了解することを得べし「グライドスコープ」とは紅、紫、青、黄等種々の彩色を施せる數多の硝子片を圓筒内に容れて造りたる玩具ゐしてこれを廻はしつゝ筒中を覗き見れば其硝子片は相集りて種々異樣の形態を現はす

ウントの説

自覺的連合

を觀る想像に於けるもまたこれと異ることなく諸般の心像が互に相群集し而して其連合の趣を異にするによりて各樣一ならざる千變万化の形狀を現はすものなり斯くの如く諸心像が相群集し相連合するの際に於て偶然非凡の想像生じ馬琴、山陽、若くは沙翁の如き偉人の錦心繡腸を文やどるに至るものあり

此二個の極端説に於ける抗爭の點を調和して其折衷説を唱道したる人は即ちウント(Wunt)なり其説く所によれば曰く敢て必ずしも想像力なるものあるにあらず而して若し諸種の心像が時の連合と類の連合とにのみよりて變化するものなりとせば想像は恰も「グライドスコープ」の筒中に於て硝子の碎片が種々の異狀に變化するに異ることなし然れども此類及び時の連合に猶ほ附加して一の自覺的連合なるものこれありやも未だ知るべからず此所謂自覺的連合とは時若くは類の連合ゐあらずまた想像力と稱すべき所のものゐもあらずと雖も尚一種心の作用によりて働くものゐして觀念が連合するの際ゐ於て其連合の秩序を定むる所の力なり今之を實

際の事例に照して解説すれば美術的想像若くはニュートンが重力の發見ゐ於ける想像の如きはたゞ類の連合及び時の連合のみを以て説明すると能はずすべて是れ等は非常の想像を要するものにして從來他人の未だ工夫し及ばざりし所及び自己の未だ經驗し至らざりし所の全く新奇なる想像をば精神内に構成せざるべからず即ちろの新奇なる所以のものはたゞに偶然に生じたるの結果にわらず實に總べての人心ゐ感化を與ふべき所の非凡の想像を精神中より造出せざるべからざるものなり而して斯くの如き非凡の想像はたゞ時の連合及び類の連合ゐのみよりして構成し來るやと云ふゐ至りては未だ遽かに首肯すること能はず其間必ず自覺的連合なるもの即ち吾人が感官よりして得たる所の記憶心像をば或は綜合し或は分析し吾人の精神内にて恰も適當の想像を構成することを司るものゐらざるべからずと而して氏の思惟する所によれば自覺的連合なるものは吾人が外界より得たるものにわらずして精神の創造力即ち精神が自體よりして創めて物を造り出す所の一種の力なり而して此力は實に吾人の精

想像を精神活動の範圍を擴張す

神内に於て最も重要にして且最も高尚なる役目を有するものなりと予は以上の講義を以て想像に就て大體の説明を終りたればこれより少しく精細の點に進んで想像の性質及び想像なるものが吾人の精神活動上に於て如何なる役目を有するかを講述せんとす[illegible]抑も想像なるものは吾人が精神活動の範圍を擴張するものなり若し吾人の精神内に於て記憶及び想像なるものなくんば精神界の活動はたゞ其時々の瞬間に限られて忽にし感じ忽にして忘るゝが如く其感ずる所は終始新奇のものにして既に感せし所のものは悉くこれを忘却せざるべからず造化の妙手豈斯くの如くして措かんや是に於てか記憶なるものゐり精神活動の範圍はこれゐよりて漸く擴張せられ數十年前に起りし事實も猶ほ今日に追記し得べし然れどもこれのみにしては其思想必ず一たび經驗したる所の範圍内に制限せられざるべからず人生五十年とせば其一生間に經驗する所のもの實に僅少の數ゐ過ぎざるべし然るに吾人は猶ほ此範圍を超越して過去未來ゐ於けるの事象も宛然眸下に描出し得べきものは實

に想像の作用による

(イ)　(ロ)　(ハ)
過去　現在　未來

例へば上圖に示すが如く(イ)の時ゐ生れて今(ロ)の時に在り其間僅かに數十の星霜を經過せざりしとするも吾人は猶ほ數千年の過去未來に亘りて其思考を及ぼすことを得べく即ち時間の上に於て精神活動の範圍を擴張し得べし而してこは實に想像の作用によるものなり

想像なる語の意味

想像なる語は種々の意味に使用せらるゝことあり例へば全く在り得べからざることを假空的に考ふるてふ場合に於て此語の使用せらるゝことあるが如し英語に於ても其意味一定せず此語を以て空想の意味を表はすことあり然れども廣くこれを解釋すれば其何たるを問はず吾人の心像によりて物を考ふることをすべて稱して想像と云ふ俗に物を考ふると云ふ語は我國及英吉利に於ても其意味甚だ曖昧のものあり惟り獨逸に於ては其語の區別甚だ精密にして「デンケン」(Denken)なる語は英語の「スインク」(Think)邦語の思惟す若くは考ふるてふ意味に適合するものなれども此語はたゞ抽象的の場合にのみ限られたるものなり即ち腦中特に心像を描くにあらずしてたゞ抽象的に事理を考ふるの意味にのみ使用せらる我が國に於ても通常考ふるてふ語は敢て感官によりて感じたるが如き心像を造くるにあらずしてたゞ事物の道理を考ふるの意義を表はす而して其眼に映じ手に觸れたりと云ふが如きすべて心像を描きて考ふることはこれを稱して想像と云ふなり即ち實形の心像によりて考ふると否とにより此二者の區別生ず又個々人々によりて或は想像の強きものあり弱きものあり文學者、音樂手、畫士、の如きはすべて想像に強健ならざるべからざるも數學者、哲學家の如きは之に反して抽象的に事理を考ふること必要なり斯の如く想像てふことを以て廣義に解すれば吾人の精神活動上に於て諸種雜多の關係を有するものなり

想像の精神界に於ける役目　第一

予はこれより逐次序を追うて想像か精神界に有する所の役目に就て講述すべし

（第一）想像は吾人の有意運動を介助するものなり吾人が有意的に運動せんと欲する際には必ず先づ想像の力を藉らざるべからず即ち豫め其云爲せんと欲する所を想像してこれが腹案を作り而して後其實行に着手すべきなりそは大工が家屋を建築せんとするに當りて先づ繪圖を描きて其設計を一定し而る後其効を起すに異ることなし而して極めて想像の強き人は斯くの如く特に繪圖を描くを要せず其心中一の家屋を構架し來りて以てこれを想像することを得べし彼のニュートンは有名なる數學者にして極めて抽象的に物理を考ふる人なりしと雖ども又大に想像に富み其最も數學に熱心したりし頃には敢て紙上に數字を寫すを要せず其自ら空中に現はるゝを見たりしと云ふ然れども通常一般の人に於ては先づ豫め想像して其爲さんと欲する所の模型を定め而して後其模型に從て實行す例へば談話せんとするに際しては先づ想像によりて其言はんと欲する所の

事項及び其順序、言語の配列等を定むるを要す斯くの如く想像强健の人は豫め其心中に於て自在に取捨して模型を定むるが故に其言動は自ら趣味あり秩序あるものを得べしと雖ども其孱弱のものに至りては止を得ず此便宜を欠くを以て從て其云爲する所枯燥無味にして且贅冗駁雜のものたるべきなり

以上講述したる所を概括すれば吾人が事を爲さんとするに際しては先づ實形の心像によりて其腹案を定め而る後其實行に着手す而して此役目をなすものは即ち想像なりと云ふに在り

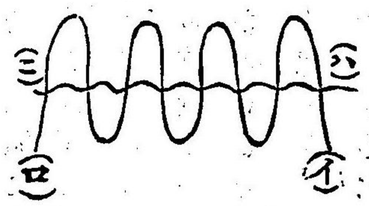
（第二）想像は過去と未來の關係を聯絡すべき役目を有す若し吾人が毫も想像することなくんば決して未來を考ふること能はず眼前殆んど闇夜たるゐ異らざるべしと雖ども吾人は幸に想像の作用を有するが故ゐ絶へず未來と過去に渡りて思考し諸般の事像をば宛然指顧の中ゐ描出することを得べし或は時として全く想像の外に出づることなきにあらずと雖ども此は殆んど事例の外にして先づ通常の場合に於ては翌朝に於ける事も今

朝の事より推究して想像し其間敢て甚しき懸絶なきを見る而して今朝の事を追想するに際しては或は少しく忘却したる所あるが爲めに精細の點に於て其事實と相違することありとするも敢てさほどの不都合を感せざるべし然るに翌朝の想像に於ては若し其事象が想像に違ふことあれば其差違は如何に僅少なりと雖ども為めに的面不都合を感ずる所少からざるべきが故に其差違の點をば明了に認知し得べし然れども其精神上の活動即ち精神中の想像と云ふ方面よりして考察すれば過去の事實を追想すると未來の事象を想像するとに於て其實際に適するや否と云ふに至りては其間毫も徑庭なき事柄なりと信ず吾人の眼前は決して烏羽玉の闇夜ゐゐらずして吾人は明日の事、明年の事、乃至數十年の未來に關しても想像し得べきなり

以上の講義を概括すれば想像は過去と未來の間を聯絡すべき役目を有するものにして吾人はこれによりて過去の事實より推究し未來の事象を想像し得べしと云ふことこれなり

（第三）想像は吾人の快樂不快樂に就て重要の關係を有するものなり快樂不快樂は吾人の一生涯最も大切の部分を占むる事柄にして若し一生終始の甲斐なかるべし故に其何人たるを問はず皆可及的一生を快樂中に送らんと企望するものにして或は偶ま情實の爲め若くは義理のために求めて痛苦の位置ゐ陷るものなきにあらずと雖もそは所謂苦中の樂にして其人に向ては却て快樂を與ふるの資料たるものなり然るに若し吾人の精神內ゐ於て想像なるものなくんば喜ぶ時は足を揚げて舞躍し悲む時は聲を限りに啼泣するに至るべし彼の兒童が舞躍し啼泣するものは全く想像の未だ發達せざるに職由するものなりよし他に種々の理由なきゐわらずとするも少くも其基因の一大部分を占むることは疑ふべからず實ゐ吾人ゐして想像なくんば喜びに遇ひてはたゞ其喜びのまゝにして毫も未來の憂苦を考ふることなく悲みに遇ふもまた其悲みゐ任して決して未來の歡樂を思ふことなきが故ゐ其或は啼泣し或は舞躍するもの自ら伴ふ所の狀勢な

りと云ふべきなり然るに想像なるものありて斷へず其間を聯絡するの役目をなすが故ゐ悲哀ゐ在りては未來の快樂を思ひて抑制し歡喜に在りては未來の痛苦を考へて制限す是に於て始めて其激烈を和ぐるを得るなり其想像なくしてたゞ悲哀と歡喜のまゝゐ任する趣は恰も左圖に示すが如く



(イロ)高低の激烈なる者

(ハニ)高低の緩漫なる者

浪の高低激烈なるが如きものなり然るを想像なるものありてこれを和げ以て其高低を緩漫にす馬琴の翁も云へり人歡びに切なるはまた悲みの情堪へざるものなりとこれを抑制してこれを融和する所の想像なるものは實に吾人の精神内ゐ於て最も重要の地位を占むるものと云はざるべからず之を概言すれば吾人は悲み若くは喜びの時に於て想像によりて未來の痛苦快樂を思ひ以て現在の情を抑制すと云ふに在り

以上講述したる所(一)吾人が有意的運動の模型を造ること(二)過去と未來の關係を連絡すること(三)快樂不快樂の間を融和すること此三は即ち想像が遂爲する所の役目なり然れども猶は一層廣衍の義にこれを解釋すれば吾人の精神活動なるものは皆其基因想像に在りと謂ふべきなり故に通常講義の順序に從へば先づ記憶若くは知覺の如きものに就て說明せざるべからざれども想像は實ゐ精神活動の根原にして最も重要の地位を占むるものなるが故に予は此ゐこの講述をなしたる所以なり

終りに臨んで猶は一言す世には想像して以て事物を考ふるに巧みなるものとたゞ抽象的に道理を考ふるに長じたるものとあり此差違あるに從て其人の好尙若くは言動の如きもまた自ら其趣を異にす而してこは敎育の

敎育上注意すべきこと

上ふ於て最も顧慮注意すべきことなり普通唱ふるが如く形象によりて觀念を得せしむれば其觀念は確實にして且明瞭なりと雖もこは一般ふ就て云ふことにして或格段なる場合ふ於ては必ずしもこの主旨のみを墨守すべからず數多の兒童中には形象によりて物を考ふるに巧みなるものと或は否らざるものとこれあるを免れざればなり或人の說によれば頭顱の前後に長き人は形象によりて物を考ふるに巧みふして其左右に廣き人は抽象的に事を考ふるに長ずるものなりとこは未だ遽かに速斷し得べからず雖ども亦また參考の一說として教育に從事するもの常に此點に就て留意觀察すれば或は其得る所思ひ半ばに過ぐるものあるべきなり

第八章　知覺

本章に於ては吾人が外物を知覺することに就て講述すべし舊來の心理學に於ては精神活動の論理的順序によりて之を論じ先づ吾人が外物を知覺して始めて種々の觀念を得るものなりとなし說明もまた自らこの順序に

由れりと雖ども知覺なる精神活動は其性質もと單純のものならざるが故にたゞ論理的順序ふのみ從ふは心理學講究上甚だ策の得たるものにあらざるなり即ち發達の順序より大に攻究せざるべからず何となれば吾人が外物を知覺し能ふ時期に達したるときは精神の狀態既に複雜のものとならざるべからざればなりその複雜なる關係とは

(一)外物の知覺に關して必要なる感覺は如何なるものなるか

(二)其感覺より得たる所の心像が如何に結合して知覺を生ずるか

即ちこれなり今順次此關係に就て講述すべし

(一)外物の知覺に關して必要なる感覺は如何なるものなるか　直接或は間接にすべての感覺は皆外物の知覺に關係を有すと雖ども其直接なるものは即ち視覺と觸覺となり今更ふ觸覺を細別すれば其中に左の三感覺を包含するを見る

觸覺 ⎧(一)觸覺 (二)神經感覺 (三)筋覺⎫

即ち從來觸覺なる語を以て表彰したる所の感覺を更に小別すれば觸覺神經感覺及び筋覺の三となる而して觸覺を細別してまた觸覺を得るとは或は奇異の感なきふわらずと雖ども綱の觸覺は廣義に解したるものゐして目の觸覺はこれを狹義に使用したるものなり今實例に就て此三感覺を說明すれば即ち左の如し

(一)外物の皮膚に觸るゝより發生するものを觸覺といふ

(二)手を擧げ足を投せんと欲するときの如き動神經を刺激するに當り發する感覺を神經感覺と云ふ

(三)手を以て物を揚ぐるとき其物重ければ手に抵抗し而して其抵抗が感神經に反射するより發する感覺を筋覺と云ふ

右の如く外物が皮膚に觸るゝよりして起る所の感覺を觸覺と云ひ腦髓より神經を刺激したる際に起る所の感覺を神經感覺と云ひ物に抵抗して筋肉が收縮するより起る所の感覺をばこれを稱して筋覺と云ふなりこれに加ふるに視覺なるものゐり而して此四の感覺は即ち外部の知覺と直接の

關係を有するものなりとす

視覺なるものは吾人が外物を知覺する上に於て最も勢力ある所の感覺なり而して更に微細の點ゐ進んでこれを分析すれば其中に左の二感覺を含蓄するを見る

視覺 ⟨(一)色の感覺 (二)形の覺感⟩

色の感覺及び形の感覺は名詮自稱其意義自ら明了なるを以て予は特にこれを說明せざるべし而して色と形は共に吾人の看取し得べきものゐして此二感覺は必ず視覺より分離すべからざるものなりと說くものゐり或は視覺はたゞ色の感覺のみにして形の感覺は後に他より附加したるものなりと唱ふるものゐり此點に就ては諸說區々未だ孰れに歸着するかを知らずと雖ども予は視神經固有の感覺を以てたゞ色のみなりと信じ形の感覺は運動より來りしもの即ち筋覺より得たるものなりと思惟す而して如何にして色と形が斯く相分離すべからざる關係を保つに至りしやの問題は

知覺なる題目の下ゐ於て先づ劈頭第一ゐ論究すべき所のものなりとす今此二者が如何にして斯く相離すべからざる關係を保つに至りしやを說明せんに眼は極めて運動し易き性質を有するものにして其自然のまゝに放任すれば幾んど斷へず運動を停止することなし若し强て其運動を停止せんと欲せば却て幾何かの力を要するものなり。夫れ然り而してこれに附屬する所の筋肉及び神經もまた終始網膜上に映する所の物ゐ從て適當の運動をなしつゝあるものなり故に今予が圓體を觀んとすと假定せんか其圓體小なれば一目これを觀るを得べしと雖ども若し其體にして大なりせば其周邊ゐ沿ひて眼球を回轉せしめ而して後始めて其圓體なるを知るを得べし而して其周圍幾尺以下は一目して觀るべく幾尺以上は其周邊に沿ひて眼球を運動せしめざるべからざるか其境域に至りてはもとより一定すること能はずと雖ども兎に角實際に於ては其體の大小によりて此差違あること極めて明了なり斯の如く吾人が初め外物を知覺するには縱令小なるものも一々其周邊ゐ沿ひてこれを觀て後其形體の如何なるかを知覺したるなりと雖ども此の習慣漸く重なりて竟に一瞥の下にこれを知覺するを得るに至りしなり即ち度々經驗して重積したる心像が精神中ゐ存在し而して外物を觀るときは其心象、外物と結合するを以て一目してこれを知覺し得る樣なりしなり。然れどもこは以前眼球を回轉して經驗せし所の運動の感覺が精神內ゐ於て外物と結合するゐよりて知覺し得るものなれば外物の形は網膜の感覺と眼ゐ附屬する所の筋肉の感覺とが相結合するよりして始めて知覺し得べきものなりと云ふべし加之またこれによりて以て物の大小を判別す即ちたゞに其周邊の圓なりてふことのみならず其表面の大小如何を判別するもまた視覺と觸覺との關係より起るものなり大なり若くは小なりと云ふが如きは極めて複雜なるが如き觀あれども其實自ら一定の標準ありて存するものなり例へば此に左圖の如き一の圓體あり

ボルクリーの説

此圓體の大小如何は吾人が手を以てこれに觸れ其周邊に沿ひて手を回轉せしめ吾人の精神に此大さ丈けの觸覺を與ふるによりて始めて知るを得るものなり故ゐ物の大小は眼に映ずる所の形の大小によりて定むべきものにあらず吾人は其物の周邊に沿ひて那れ丈け手を回轉せしむべきか其觸覺の分量によりて始めて知るを得るものなり。これによりて觀るも吾人が物の大小を判別するはもと視覺と觸覺の結合に基因することを知るべし。此事を明了ゐ説明したるは即ち愛爾蘭の高僧ボルクリー其人なり

ボルクリーは極めて明確なる思想を有したる人にして其視覺に就ての攻究の結果は吾人が採て以て研鑽の資料とすべきもの多く其賞賜たるや實に鮮少ならず氏の説によれば曰く觸覺と視覺とはもと毫も相互の關係なき感覺なれども此二の感覺は終始相共に働くが故ゐ思想の聯合上より其作用もまた聯合するに至りたるものなりそは恰も人の赧顔することゝ慚愧の感情とは性質上何の關係もなきものにして一は精神内の感情他の一は顔面の色たるに過ぎざれども人の慚愧する時は往々顔面朱を潮するこ

とあるを以て終に此二のもの相聯合するに至りたると異ることなしまた物の遠近は其物の明了なると不明了なるとによりて判別するものなり。英人がスイスの國を旅行せし時山の距離を判斷して大に誤りたることあり。これ英國はもと煙霧深くして咫尺の間も曖昧模稜たること往々これあるにスイスの國は空氣清明にして一天常に朗々たるが故其遠きものも甚だ明了ゐ見ゆるによるなり故に物の遠近は其明了不明了によりて判斷するものなるを知る然れども其判斷はもと物の明了若くは不明了なるとき其物所在の地まで歩行せば如何程の距離ありと云ふが如く歩行の分量と明了不明了の度と連合するによりて起るものなり即ち其遠きものは足のEnergyを要すること多く近きものはこれに應じて少し故にこれまた運動の分量と眼に映ずる所の物象とが互に相連合するによるものなることを知るべし

斯の如く物の形體、大小及び其距離の如きは皆觸覺と視覺の連合によりて判斷するものなること瞭々たり。かく此理より漸く進んで推究せば近時生

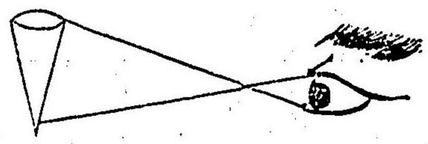
物は眼ゐ倒映す

理學者が一般唱道するが如く物は吾人の網膜ゐ倒に映ずるものなること毫も疑ふべからず而して網膜ゐ倒映したる物象を恰も直立するが如くに見得るものは果して如何なる理由によるかこを説明せんは實に至難の問題たり而してよくこれを明晰に解説し得ば知覺なるものゝ性質もまた自ら氷釋するに至るべし抑も此問題に就ては種々の説明をなすものありて區々未だ孰れにも歸着せず試にこれを擧ぐれば

或は曰く網膜に映ずるもの悉く顚倒す故に吾人は悉くこれを直立するが如く見得るものなりと然れどもこは實ゐ無稽の妄説と云はざるべからず何となれば宇宙の万有即ち自己の身體までも悉く顚倒すればこは即ち顚倒ゐあらず然れども自己の身體は網膜に映せずして自己以外の物が悉く倒に映すれば其物はすべて倒に見ゆること甚だ覩易きの理なればなり

この疑問に對してはボルクリーの説明最も當れるが如し而してボルクリー以後今日に至るまで其説明甚だ明了なるものこれあるにも拘はらず猶は種々の異説を唱ふるものあり其一二を擧ぐれば

曰く左圖に示すが如く元來凡べての物は倒まに網膜に映ずるものなれども



網膜に投出力なる一種の力ありてその映像を復び前に投出す而して其投出の際もと物像が光線ゐよりて眼中に倒映するが如く復び顚倒してこれを投出するが故にその投出せられたるものは原狀の如く直立すと斯の如く一種奇異なる力あるが如くゐ説明するものゐれどもこは未だ遽かに信

を措くべき説にあらず

或は曰くこは習慣によりて直立するが如く見ゆるものなりと縱令習慣の勢力如何に強しとするも豈これによりて顚倒したるものを直立の如く見得ること能ふべけんや然れども或意味に於てはまた毫も當れる所なしと云ふべからず其説の甚だ奇異なるが如きは未だ少しく其説明の足らざるゐ坐するのみ

今これを明了に説明せんには視覺と觸覺とは其性質もと全く相異るものを吾人の經驗により此二者を結合する時のみに於て即ち相結合する所以を知得し置かざるべからかずかくて網膜上に物象の映ずるとき觸覺よりしてこれを見れば上下、左右、孰れの所に其物象の留まるかはもとより明了ならず何となれば吾人は曾て手を網膜に觸れたることなし若し夫れ顏面手足の如きは手を以てこれに觸れ容易に其所の孰れなるかを知るを得べしと雖ども吾人は到底吾人の觸覺をして網膜に及ばしむることを能はざればなり斯の如く、網膜には殆んど觸覺なしと云ふことを得べし彼の眼病に

罹りたるものゝ如きが眼の痛みを感ずると云ふことあれどもこはもと觸覺と云ふべきものにあらずまた血液の如き「オスモス」若くは其他種々なる液體の如きは眼に觸るゝものなれ[ど]もこは終始斷へず相觸るゝものにして未だこれに觸覺の名稱を付すべきものにあらず即ち吾人の眼には有機感覺あるも觸覺なしと云ふことを得べしたゞ網膜を刺激するものは光線のみにして網膜は即ち光線に感ずるものなり故ゐまた吾人の眼には視覺あれども觸覺なしと云ふことを斷言し得べきなりかくて元來物の位置(上下、左右、前後、の如き)を定むるは吾人の運動によるものにしてそは今斯の如く身體の直立するときは即ち直立すてふ感覺ありまた斯の如く(手を以て物の上端を摩して)物ゐ觸るゝときはこの感覺を上と名け之に反して斯の如く(手を以て物の下端を摩して)物に觸るゝときはこれを下と名くるが如し斯く物の位置即ち上下、左右、前後、の如きは觸覺、筋覺及び神經感覺により て定まるものにして視覺は毫もこれに與かる所のものにあらずこれを要言すれば物の位置は觸覺(廣義の)によりて定まるものにして毫も視覺の關

係する所にあらずと云ふべきなり然るに今斯の如き一物(机上の鐘抔を指して)ありこの鐘抔が網膜に映じたるとき網膜の感覺(其映象の位置が網膜の中上下、左右、孰れにあるかは措て問はず)と及び手を以てこれに觸れたるとき其位置の觸覺(これ丈けの高さありと云ふが如き)と此二の感覺相結合す即ち視覺と觸覺が相結合するにより終に視覺によりてこは高し若くは低しと云ふが如く判斷するに至るなり

斯の如く網膜中に於ての位置は生理上これを發見するのみにして吾人の知覺上には毫も關係する所なしたゞ經驗によりて視覺と觸覺が外界ゐ於て連合(心の作用によりて連合するものなれども敢て網膜中に於て連合するものにあらず)するのみなり若しこの二の感覺が網膜中に於て互に相連合せば網膜上に映ずる所の物象時としては直立し時としては顚倒して見ゆること蓋しこれあらん然れども其連合は外界に於てするが故に其時の身體の位置により上下、左右、若くは前後と名くるものなり故に物象の網膜上に倒映することは物の位置を定むる點に於て決して何の關係もなきも

觸覺主ゐして視覺は補助なり

のなり

以上講述したるが如く視覺と觸覺と相連合するよりして吾人の知覺なるもの生ずるものなり然るに此視覺と觸覺は孰れが主ゐして孰れが賓なりや即ち視覺主にして觸覺これを助くるか將た觸覺主にして視覺これを補ふか此疑問に就て通常吾人の俗識によれば眼を以て視ること最も確實なるが如く即ち視覺主にして觸覺はたゞこれを補助するに過ぎざるが如く思惟すと雖ども其實却てこれに反して觸覺これが根元となるものなり元來觸覺なるものは既に前に述べたるが如く筋覺、神經感覺及び觸覺の三感覺を含有するものなり其中神經感覺は心より活動して起る所の感覺即ち活働的の感覺にして他の二者は受動的の感覺なり即ち觸覺中には活動的及び受動的の感覺を含蓄するを以て甚だ完備すれども視覺はこれと異りたゞ受動的の感覺を有するのみなりまた實際吾人の經驗に徵するも視覺は屢其判斷を誤ることあり世間に於ては往々幽鬼を觀たりと說くものあり然るに幽鬼を覩るも未だこれを手に捉へたる人ありと云ふを聞かず否

これを捉べたる人あるもそは所謂彌次の犢鼻褌に於けるが如き類のみ斯の如く既にこれを捉ふれば其何物なるかを明了に知り得べしと雖ども たゝこれを觀るのみにしては甚だしき誤謬ゐ陷り彼の八公山の草木に於けるが如く終に救ふべからざる失敗を招くことだに往々これあり斯く通常視覺は甚だ便利なるが如しと雖ども其確實の點に至ては觸覺遙かにこれに勝るものなり而して此二感覺が斯の如き差異ある所以を明了に說きたるものは實にボルクリーを以て嚆矢となす然れども氏はたゝこれを理論上より說きたるのみにして未だ其實證を擧げたることなかりしが其後偶然奇異の事實よりして終にこの理論の誤謬ならざるを證し得るに至れりそは

英國の或州に生來盲目なる一人の娘ありしが十五才の時其兩眼を開くを得たり然るに此娘は從來視覺なく凡べての物を皆觸覺のみによりて判別し居たるが故に或時剪刀を使用せんとして其傍なる幾多の裁縫器具を觀たるもたゝ錯然として其孰れなるかを判別し得ずよつて手

を以て逐一これに觸れ而して後始めて其孰れが剪刀なるかを識り其後は敢て觸覺を藉らずしてたゝ眼を以てこれを看別し得るに至りたり

また或所ゐ一人の盲者ありこれも中年に至りて其兩眼を開きたり此人從來極めて猫を寵愛し居りしが其猫なる概念は吾人の概念と大ゐ異りたゝ手を以てこれに觸れたる概念のみなりしなり然るに或時己の家に犬と猫とを觀るに其孰れが猫なるかを看別し得ずよつて手を以てこれゐ觸れ始めて愛する所の猫なることを識別したり

是れ等の事實よりして元來觸覺と視覺は毫も關係なきものなるをたゝ經驗上よりこれを結合せしむるに至るものなることを證明し得たり斯の如きは即ち所謂實驗說と名くるものなり而して今現にこれを實驗せんと欲するも固とよりなし能ふべき所にあらざれども以上の如き偶然の事實が吾人に其證明の資料を與へて終ゐボルクリーの理論は一層炳然として其光明を添ゆるゐ至りしなり

以上の如くなるが故に盲者が實在世界即ち實際ゐ於ける世間の狀態を知

覺し居る所は吾人の知覺する所と大に異る所のものあり然れども盲者の概念は一點の誤謬あらざるべく若しこれに反して視覺あるも身體を運動することを能はざりしなれば其の概念や決して眞正確實のものにあらざるべきなりこれを實際に徵するに盲者が始めて眼を開きたるとき身體を運動せずして凡べての物を覩るに皆其兩眼ゐ觸接するが如く見ゆると云ふ故ゐ視覺は甚だ便利なれどもまた極めて誤り易き感覺なりと云ふべし

以上講述の概括

以上講述したる所を概括すれば視覺と觸覺の連合よりして知覺なるもの生ず而して此二者を比較すれば觸覺主にして視覺はこれを補助するに過ぎざるものなりとのことこれなり

第九章　幻影

幻影はまた一に幻像といふ予は本講義に於てすべて幻影の語を用ふべし英語或は獨逸語に於てはこれを表はすに左の二の言辭あり

Illusion. イリュージョン
Hallucination. ハルシチーション

幻影の起因

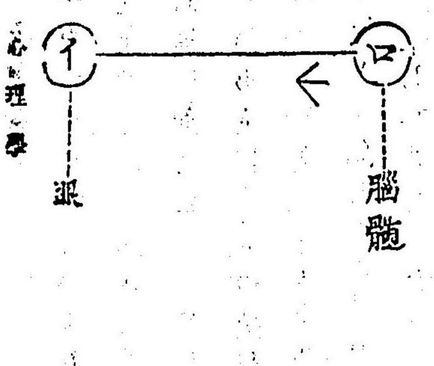
イリュージョンは幻影全體を表はしハルシチーションはこれを小分したる其一部分を表はすの言辭なり而してイリュージョンもまた狹義に使用することあり例へば少しく距離を隔てゝ一物あり其物扁平なるも圓球の如く見ゆるか若くは小なるも大なるが如く見ゆる等すべて其眞個の形狀を變じて吾人の眼瞳に映じ來るが如きを云ふハルシチーションとは無きものを在るが如く感ずるを云ふなり即ち夢幻の如き或は發狂者が蔭影をも留めざる空間ゐ於て儼然實物の存するやう感するが如き全く精神中より想像によりて此に造出せるものを云ふ以下イリュージョン幷にハルシチーションの起因、實例及び是れ等が吾人日常の生活に於て如何に吾人を助くるか將た害するかに就き順次講述すべし

第一幻影の起因　予は敢て此ゐ幻影一般に就て講究せんと欲するにはゐらず前回に於て視覺のことを講述したるが故にたゝ幻影の視覺ゐ就て現

はるゝものゝみを說明せんとす抑も幻影はまた聽覺、味覺或は觸覺等によりて現はれざるにあらずと雖ども其最も多きは實に視覺ゐ於てするものなりとす而して予は今これを論せんとするに先ち尙ほ視覺に就きて此に一言の注意し置くべきことあり予は前回ゐ於て視覺なるものは網膜ゐ物象の映するによりて起るものなり而して網膜ゐ映ずる所のものは元と色のみにして其形を知覺するは眼球の運動によりてするものなることを講述せり然らば吾人が物を見てこれを知覺するは網膜に感ずる所の色と其形を知覺する爲めに運動する所の眼球運動の關係の結合とによりてするものなるを知るべし故に吾人が物の形態及び物の運動を知覺するには茲ゐ物と網膜との間相互の關係なからざるべからず即ち網膜運動せずして而して其上に映する所の物體運動せば以て外物の運動しつゝあることを知るべしまた外物の運動せずして而して眼球のみ運動するときも網膜に於ては其上に映する所の物象動くが故に尙ほ吾人は關係的ゐ運動を感ずべし斯の如く網膜の上に於ては眼球運動せずして而して外物を運動するも

また外物運動せずして眼球のみ運動するも其影響する所は毫も異る所ゐらず而して實際其外物の運動するか將た眼球の運動するかは網膜以外の感覺の作用によりて知覺するを得るものなり今此點に就て左に少しく詳細の探究をなすべし

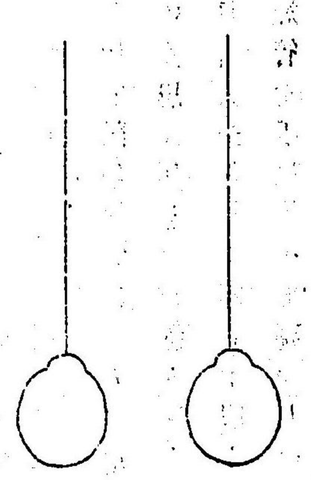
腦中に刺擊を與へて眼球を運動するとき其眼球の運動せしことは如何にして知り得べきか若し眼球の運動せざるに先ち神經を刺擊せば左圖に示すが如く(ロ)の所に感覺を生ずべし



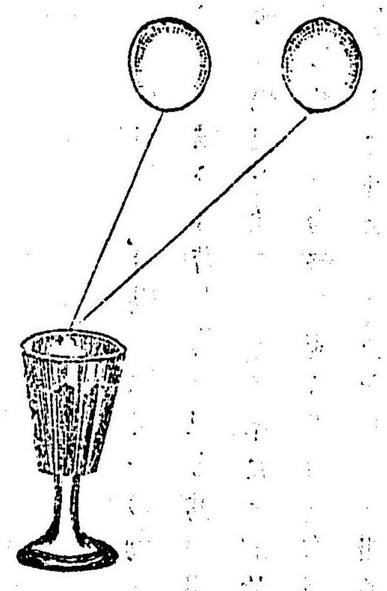
これを神經力の感といふ神經力の感あれば未だ眼球の運動せざるに先づ其如何程運動せしかを知るべし何となれば此際刺擊する所の勢力の强弱によりて眼球の如何に運動せしかを知り得べければなり然るに此點に就て種々の議論あり曰く(ロ)の感覺は全然無きものにして先づ幾分か眼球を運動しそれより反射し來りて此に始めて感覺を生ずるものなり故ゐ眼球の運動せしことを知らんゐは他に其運動を知らしむるものなからざるべからず即ち反射し來るものなきを得ざるべし若し眼球運動し瞼に對して眼球摩擦するか若くは外物を注視しつゝある間其物運動せざるに尙ほ網膜の運動するが如く感せしならばそは眼球の運動せしことを知るなりと斯の如く(一)未だ眼球の運動せざるに先づ神經力の感によりて以て其運動を知ると說くものと(二)眼球運動の結果によりて始めて其運動を知ると唱ふるの二說あり然れどもこは甚だ僅少の運動に就て起るべき議論のみ運動稍多きに至れば必ずしも其結果によらずして知り得べきが如し而してこれを抽象的にのみ論述するも速かに瞭解し難ければ予は左に種々の實例

を擧げて說明すべし

今簡單の例を以てこれを示さん左圖の如く吾人の眼球兩個相並行して其位地を保つときはこれを自然の位地といふ



而して左圖に示すが如く兩眼を以て一の物體を視るときは兩眼は自ら其一點に集るべしと雖ども若し物を以て其一眼を遮るときは其眼は視るべきものなく即ち視線を注ぐべき標準なきが故に竟に自然の位地に復すべし今最も注意して一の物體を視るときは右眼に來る所の勢力は尙ほ左眼にも來り双方より均齊 Symmetrical して兩眼適當の位地を保つが故にこれ



を遮るも尙ほ右眼の勢力によりて左眼の位地を保つ然れども若し物體を視るも己の意思作用を緩め餘り注意せざるときはこれを遮れば眼は運動すべしこれ吾人が知らず識らず眼を運動するの一例なり

又例へば煙管を手に携へて凝視しつゝ同時に壁上の畫幅を視んと欲するも双方同時に精細に看取すること能はず主として畫幅を視れば煙管は漠として其形質分明ならざるべくまた專ら煙管を注視すれば畫幅は模糊として其何物の描寫しあるかをも認視すること能はざるべし而して若し煙

管を凝視しつゝ徐かゐこれを動せば壁上の畫幅もまた共に動くが如く感すべし實際畫幅は依然として靜かに壁上に懸かるも眼球は殆んど無識に煙管の動くに從て動くが故に網膜上ゐ映したる畫幅の印象もまた共ゐ動くべし而して若し此際吾人眼球の動くを知れば決して畫幅の動くか如くは感せざるべしたゞこれを感するは吾人が眼球運動の感覺なきが故に然るのみ

此に一の奇談あり予が親戚の者某醫學を修めんとて曾て或醫師の許に寄寓せり其家は所謂妖怪屋敷と稱ふるものにして往々狡狸の來りて惡戯をなすことを世に評し合へり而して某もまた言へり深夜人定るの更少しく讀書に倦み思はず机上に凭りて眠ることあり偶ま夢覺めて徐かに四邊を顧みれば案頭の短檠自ら動くを見る而して稍霎時閑沈坐屏氣してこれを凝視すれば其動搖は則ち止むと元來眼球には數多の筋肉あり以て接合すれども睡氣を催したるときは神經當然の働をなさゞるが故に眼球は停止すること能はずして自然に運動すべし然れど其運動は意識中に入らざる

が故ゐ恰も短桀の動搖するが如く感ずるなり

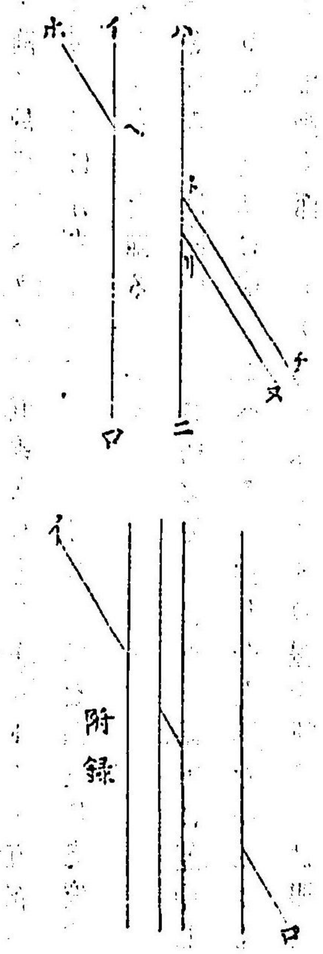
また予の師ゐして米國にコールと名くる人あり曾て予等同窓の學生相集りて種々心理學上の談話をなしつゝありし時師曰く予は時々奇異のことあり晨起の後徐かに窓を視れば窓少しく動搖するが如く感じ而して雲時にして止む諸子は斯る經驗をなせしことなきや否やと然るに一人も經驗したりと答ふるものなかりし故に箇の底のことはもとより普通一般にあるにあらざれども日々の學術研鑽に倦みて腦髓疲勞するか或は非常に睡氣を催したるとき眼球運動して恰も外物の動搖するが如く感じ爲めに一驚を喫することあり是れ等は世に誤認して以て妖怪の一種となすものならん

其理これと同じくして其形少しく異るものあり抑も眼球には周圍に六個の筋肉ありて以て其運動を掌る故に今眼球右方に向て動かんとするに當り強てこれを止むれば筋肉自ら緊張すべし從て外物はこれと反對の方向即ち左方に動くが如く感ずべし夜間雲の馳ると反對の方向に月の動くが

如く感するもまた同一理なりこは雲の形貧かに月よりも大なるが故に雲全體すべて右方に走れば月は自ら反對の方向ゐ動くが如く見ゆるなりこれ生理的反射運動によりて自ら然りとす即ち網膜上に映ずる所の物動搖すれば眼球もまたこれに伴ひて運動せんとす然るに今月を眺めんとすれば眼球を止ざるべかず從て眼球は斷へず一方に向て運動せんとするの傾あるが故ゐ月はこれに反對の方向に走るが如く感せらるゝなり

また左圖に於て(ホ)(ヘ)(リ)(ヌ)は直線なれども(ホ)(ヘ)(ト)(チ)が直線の如く見ゆるなり其誤謬自然に存するが如しと雖ともこれを精密に考究するときは判斷の誤謬より來るを知るべし

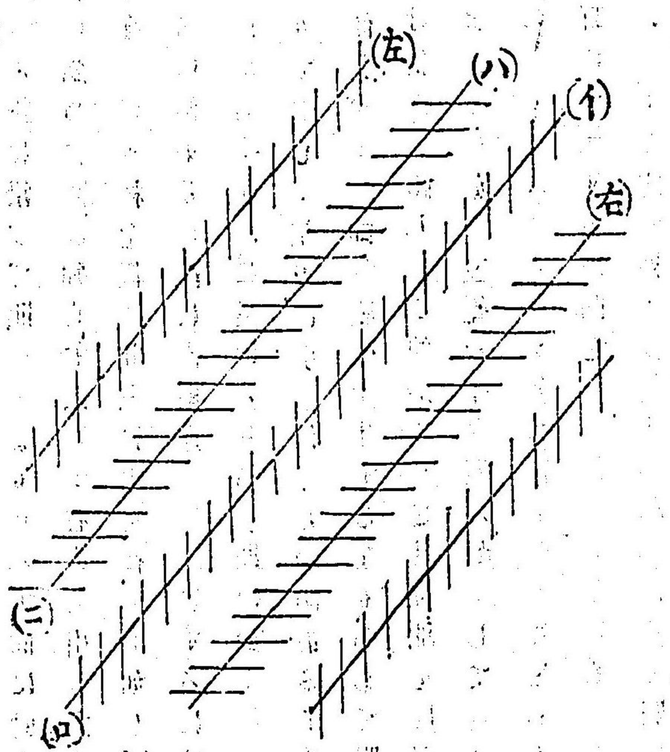
眼が物を視るには同時に廣き面を見ず絶へず諸方に運動して初めて物を認識することは既に前に述べたるが如し今上圖を視んにも眼は絶へず其線ゐ沿ひて動く而して(ホ)(ヘ)の線と(リ)(ヌ)の線を連るには眼は(ヘ)より(ヌ)まで飛び越さゝるを得ず然るに(イ)(ロ)の線は之を妨げて(ヘ)より(ヌ)に飛ばんとするときに(ヘ)(ロ)の線に沿ひて少しく眼を引き下げんとするが故に矢により



て示したるが如き方向ゐ眼を動かすの筋力なかるべからず而して眼は(ヘ)より(リ)に至らずして(ト)に至るなり然れども此運動吾人の意識外に在るが故に其感覺に於ては(ホ)(ヘ)の直線に沿ひて直に飛びたりとなし斯の如く誤謬の感覺を生ずるものなり

左圖ゐ示すものもまた同一理なり即ち直線は各平行線なれども恰も平行

せざるが如き誤謬の感覺を生せしむ



上圖の平行線を認識せんとするには眼球は絶へず線に沿ひて動くものなり例へば(イ)(ロ)の線に沿ひて眼球(イ)より(ロ)の方向に動くときこれを横斷する所の斜線の爲めに眼は知らず識らず右方に引き去られんとす恰も道路を横切りて多くの棍棒を置き其上に車を挽くが如し斷へず右方に引き去られんとするの傾あるが故に直前進行せんとするには少しく左方ゑ傾くの力なかるべからず眼球に於けるも猶は斯の如くそを運動せしむる筋肉の作用によりて少しく左方に引き付くるの傾あるが爲めに(イ)(ロ)の直線少しく右方に傾きたるが如き感覺を生ずるなり而して眼が(ハ)(ニ)の線に沿ひて動くときは斜に横斷したる線が(イ)(ロ)と其位地を反對にするが故に(ハ)(ニ)は右方に傾きたるが如き感覺を生ず斯の如くして竟に全く誤謬の感覺を惹き起すものなりヘルムホルツ曾て試驗せしことあり即ち電光を以てこれを照し眼球の運動する時間をして無からしめしに斯の如き幻影を生せさりしと是ゑよりて之を觀れば是等の幻影は全く眼球の運動より生することを知るべきなり

また要時間極めて迅速に運動しつゝあるものを凝視し俄かに轉じて他の靜止するものを視れば其物猶は運動しつゝあるが如く感ずるものなり予曾て或温泉ゑ在りし時屋後の溪間に一條の小流あり其水潺湲として時に石に觸れ飛で小沫珠をなすの光景如何にも齒邃の趣ありければ思はず欄に倚りて姑らく眸を凝らしてありしが偶ま轉じて背後の壁面を視たるに壁上猶は水流の髣髴たるを感じたりまた泰西の或心理學者も言へり滊車の進行中姑らく窓外の風光を眺めつゝあり遽かに車内を顧れば物悉く反對の方向に動くが如く感ずと是れ皆同一理なり而してこは川流を眺めつゝある間眼は川流に沿ひて動かんとするの傾あるも實際然らずして尚は同一の點ゑ留まるが故に幾分か緊張せらるべし緊張せらるゝか故にまた其筋肉は疲勞す故に今轉じて壁面を視れば其疲勞止み而して他の筋肉と同時ゑ働けば其疲勞したる部分は感することと多きか故に恰も物の其方向に動くか如く感ずるなり

眼の網膜其物の性質によりて起る所の幻影あり然れども其作用甚だ錯雜な

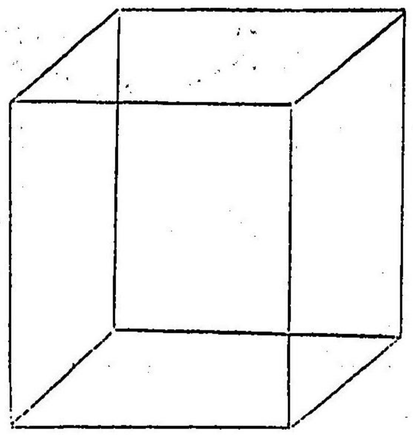
色の對比上の幻影

るが故ゐ必ず網膜其物の性質にのみよりて起るか將た他筋肉の作用之に交雜するかは明白に論定すること能はず然れどもたゝ視覺の上に於て起る所の幻影あるは疑ふべからざるなり例令ば色の對比(Contrust)上より起る所の幻影ありとは何人にても直に經驗し得べきなり即ち白色鼠色及び黑色と順次相接するときは鼠色の白色と相接する所は稍多く黑色を帶ふるが如く感るが如く感じ又鼠色の黑色と相隣する所は稍多く白色を帶ふるが如く感ず又最も著るきものは赤色若くは黃色の紙面上に幅二分長一寸若くは一寸五分位の鼠色の紙を置き猶ほ薄葉を以て其上を蔽ふときは頗る奇異の現象を呈するものなり又黃色赤色及び青色の紙を各別に置き同じく鼠色の紙片を其上に置き尙ほ薄葉を以て其上を蔽ふときは其鼠色の紙片各異別の色を呈するものなり理論上より之を言へば青色の上にあるものは黃色、赤色の上に在るものは綠色、黃色の上にあるものは青色を呈せざるべからず然れども其色悉く完全ならざれば全然斯の如くなること甚だ難しと雖ども兎に角色の對比上より起る所の幻影あるは爭ふべからざるなり又

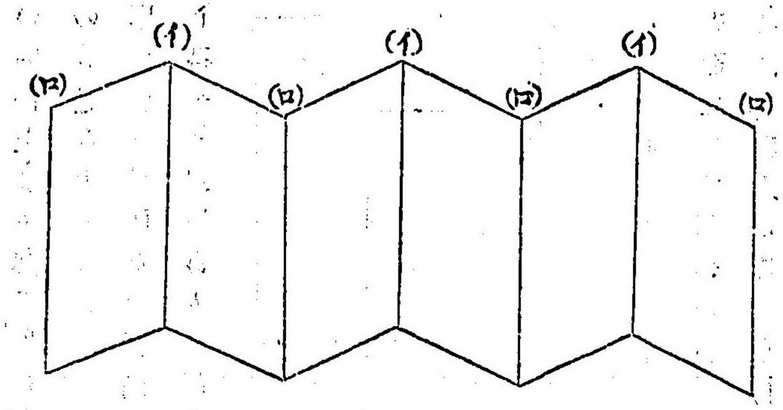
色と形の關係より起る幻影

色と形の關係上より起る所の幻影あり即ち繪畫の紙面上に浮ふが如く感するもの等是なり

以下幻影に就きて種々の實例を示さん抑も吾人の意志作用によりて隨意ゐ變更し得べき幻影あり其趣甚だ奇異なり例令ば左圖の如きものは



何れか表面にして何れか裏面なるか甚だ判然ならずたゞ視覺の構造によりて何れにも考ふることを得べきなり又左圖の如きものは



(イ)の線を以て畫きたる所前に凸出し(ロ)の線の所後に凹入たるが如く感ずべく又之と反對ゐ感ずることとれあるべきなりこは(Prospect.)なきが故何れにも考ふることを得べし

日々の生活上ゐ於て幻影の大に吾人を助くることあり抑も吾人は常に言ふ努めて總べての事實を知らざるべからずと然れども吾人は元と事實を知るが爲めに此土に生活するものにあらず吾人は感情動物なり故に吾人等の望む所はたゞ事實を知るのみに止まらざるなり例令ば遠く山水の風光を見れば其媚明言はんかた無かるべしと雖も若し近く其所に到れば或は汚穢人をして嘔吐せしむるものなきにあらざるべし斯の如き場合には寧ろ事實を知らずして眼目を娛ましむる方可ならん繪畫の如きも亦た然り其事實の如く扁平に見へんよりは寧ろパノラマ若くはジオラマの如く眼目を眩ます方甚だ快樂を感せしむべし而してヂオラマ若くはパノラマは事實を知らしむるよりは寧ろ眼目を眩ましむるを以て其目的となす故に曰く幻影は生活上に於て大に吾人を助くと

吾人若し幻影なるものなくんば或は憂ひ或は悲み常に失望の境遇ゐ沈淪すべし然れども アリストートルが言ひし如く青年は皆希望を以て充さるものなり從て其希望中には或は空想あり又妄想あらん而して其空想の爲めに吾人を害すること少らず吾人は之を避けざるべからずと雖も或範圍内に於ては其幻影の尤むべからざるのみならず却て人を奬勵し其空想あるが爲めゐよし全く其目的を達し得ずとも或は半ば之に近くことを得べきなり斯の如き場合ゐ於ては幻影の吾人を助くること蓋し鮮少ならざるべし

然れども是れ元と幻影なるが故に自ら制限なくんばあらず例令ば實際吾人が視官によりて物を視るときは一目甚だ瞭然たるが如しと雖も若し漸く實驗し來るときは視覺は實に誤れるもの多きを知る即ち大なるものを小なりと感じ曲れるものを直なりと思ふことあるが如し然れども視覺は吾人の爲めゐ實際上支障なき丈けの用に立つを得べきなり即ち歩行して物に躓かざるを得る等實際上大體の運動ゐ關して支障なき丈けは吾人に

其力を與ふるものなり若し之を研究すれば其研究の精密なるに從て益其不完全なるを知るべし却て巧妙なる技師が製造せし顯微鏡天文鏡若くは其他の器械の極めて精密なるものゐり斯く不完全なるが故に幻影ゐるを免れず然れども實際に於ては敢て支障なく啻に支障なきのみならず之ゐるが爲めに大ゐ吾人を助くることゐり

第十章　記憶

從來心理學者の説く所によれば記憶力なる一種の力ゐり其作用によりて以て物を記憶すと云へり然れども今日にゐりては斯く一種の能力ゐるを認むる學派なし即ち今日學者の認むる所によれば記憶は能力にゐらずして心の記憶作用なりと云ふにゐり

記憶作用に必要なるもの三ゐり

(第一)把住、一たび經驗したる所を把住す

(第二)再生、一たび經驗したる物を再生す

把住

(第三)時を定む、昨日若くは前月と云ふが如く時を定む

斯く三種の作用を備ふるものを以て記憶と名く而して此三作用は必ずしも共同するにあらずして各獨立の作用を有するものなり故に把住するも必ず再生するにあらず又再生するも必ず何れの時之を經驗したることを憶起するにあらざるなりまた一方より云へば時を定むるが爲めゐ把住と再生の必要あり再生の爲めには把住の必要あるべし故に以上三作用中最終のものゝ爲めには第一及び第二の必用あり又第二の爲めには第一の必要あるべしと雖も若し之を反對の點より觀察すれば第一は第二若くは第三の作用なくして存するを得べきなり

把住とは吾人が經驗したる所を心中に貯ふることなり今日の生理心理學者の言辭を借れば即ち惱中に之を貯ふるなり惱中に貯ふる作用は生理作用によりて起るものにして特に心に固有なるものにあら又把住作用は身體の各所何れの邊にもあるものにして其及ばざる所はあらじ例へば今負傷せんか若し其傷深ければ縱令平癒するも其痕跡を留め其苦痛を把住す

而して縱令平癒したるの後も其傷痕に觸るれば少しく奇異の感覺を起すべし實際予の經驗する所によるに其欺かざるを知る是れ以前負傷せしときの痛を再生するものなり故に把住及び再生なるものは啻に腦髓ゐ於けるのみならず吾人身體の各所其作用の到らざる所なきなり

然るに生理學者の說く所ゐよれば吾人の身體は幾んど七年にして其組織を一變するものなり即ち身體の細胞七年にして全く一新するものなりと然れどもこは以上講述したる三作用に關係する所あらず何となればそは身體の分子爰に一新するも其一新したる分子は身體の變化を繼承するものなればなり吾人が惱中ゐ受くる所の印象淺ければ其癒ゆるに從て記憶全く滅了すべし故に心理學上吾人の記憶は如何にしてよく之を保持するを得べきか其種々の狀態は尙ほ吾人が生理上身體に受くる所の狀態と符合す

斯の如く把住は一種の能力にあらずして只生理作用によりて以て把住するものなれば之を腦の作用に歸することを得べきなり

再生に就ては從來種々の議論あり之を腦によりて說明すれば毫も不都合の點を見ずと雖も今心理學を研究するに當りては之を生理上の說明にのみ止むべからず故に予は今心の作用によりて再生を說明するは如何なる方法によるべきかを少しく講述せん

今全く腦髓を離れ心の作用によりて吾人か經驗を把住し又再生するを說明せんには、頗る困難の點なきにあらず抑も其吾人の精神中に現るゝときは喜怒哀樂の如き一の精神作用たりと雖も既に心中を去れば其觀念那邊に留まるか是れ一の困難なり而して若し之を腦中に留まるものとせば以て說明し盡すべしと雖も腦髓作用を說かざる論者は此點に於て困むこと蓋し少からず抑も觀念は如何にして存在するか如何にして保存せらるゝか又如何にして再生するか腦髓作用拒斥論者は曰く心の別に存在するにあらず又把住するにもあらず只心が斯の如き一の性質を得たるなり故に其既に心中より去りたる間は別に觀念の存在するにあらず例へは今此に經驗しつゝあることを一時間後になれば全く忘却し了ることあるやも圖

るべからず其際ゐは全く觀念なきなり而して之を再生するは心が其作用によりて過去のことを表現し得べき一種の性質を受くるによるなり譬へば寫眞ゐて撮影すれは硝子板上の藥品に變更を受けて此に一の形像を現す後之を見れは其人若くは其風景を憶ひ宛然其眼前に在るが如くなるべし然れども是れ實際其人若くは其風景の此に存するにあらざるなり即ち種子板上の藥品に變更を來して此に其形像を留めたるのみ而して斯の如き場合ゐ於て如何にして心が過去のことを憶起するやそは敢て過去の經驗が頭中に存在し之を抽出し再現せしむるゐはあらずして只心が一の變更を受けたるによるのみ因て心の作用により再び過去のことを現すを得べきなり故ゐ記憶ゐよりて憶起することは決して過去の事物其物ゐあらずして只之を代表する所の繪畫の如きものに異らずと

而して其再生は果して如何なる法則によるか偶然に再生するか將た一定の法則によりてするかと云ふにそは必ず後者によるものなり而して今腦髓作用を離れ只心の作用によりて之を說明するときは頗る困難を感ずる

ことあり固より腦髓により説明するも充分に明確なること能はず然れども只之を心の作用にのみよりて説明するよりは幾分か容易の點なきにあらざるなり

印象の押捺せられたる腦髓の部分活動しつゝある間は其印象精神中に現るゝものなり然れども腦髓全體が始終活動しつゝあること能はざるか故ふ或部分の活動する間は他の部分休止す而して其休止したる部分漸く活動するに至りて觀念再び表現す

定時

再生の法則は今日所謂伴生法なるものこれなり而して其既に再生し來りたるものは之を記憶心象と名く而してそは全く過去の事物其物にあらずして其事物を代表したるものゝ表現し來るなり故に或論者は曰く把住及び再生作用の範圍廣衍ならざれば精神活動の範圍狹隘なるべく若し把住及び再生にしてなくんば精神の活動も亦た全く無かるべしと

第三の要素即ち時を定むることは極めて煩雜の作用ふして之を把住再生に比すれば遙かに其複雜の度を加ふるを知る故に往々吾人は記憶と名く

るものを以て把住再生に止め時を定めずして憶起することを尚ほ記憶と稱ふることあり例へば實際吾人の經驗上に於て何月何日斯の如きことを經驗したりと明確に其時日を定むることは甚だ稀にして大抵は漠然として其何れの時なるかを知らずたゞ其事實のみ憶起す故に予は今把住再生の意味に關したる意見を二に分ちスペンサーの所謂有機記憶なるものと心理學に稱ふる所の記憶なるものゝ二點より之を説明すべし

把住再生は今説明したるが如く生理的に屬したるものにして特に心に固有なるものにあらず故に吾人が凡べて生理より經驗したる所のものにして其身體に殘留するものは皆之を記憶と名くるを得べし習慣の如き亦た記憶の一種なり例へば予の足は歩行するの習慣を得たり即ち其歩行し得るやう腦髓に一種の變更を受けたるなり其他談話し能ふこと或は飲食し能ふこと等皆然らざるなしスペンサーは之を稱して有機記憶といふ何となれば是れ等は皆有機體に附屬する所の記憶なればなり斯の如く論じ來れば記憶は其意味極めて廣衍のものとなるべし而して斯の如きを以て尚

は有機記憶と稱し得るや否やを論ずる者あり曰く既に記憶と云へば憶の文字あり其意味心に屬して身體に關するものにあらず故に記憶を以て有機體に關するものとなすは不可なりと然れとも予は思惟す若し把住再生ゐ就てのみ論ずるときは心に關する所の記憶及び有機記憶と稱するが如く特に區分するの必要なしと心に關したるものより觀るときは記憶なるものは必ず過去の經驗を代表したる心像即ち記憶心像なるものあらざるべからず而して記憶心象は其昨日のもの前月のもの將た昨年のもの往々混雜することあり今其時を以て空間に譬ふれば恰も旅行の場合に於て既に經過したる場所を回顧するに異ることなし即ち吾人が記憶心象により て過去の事物を見るは吾人の眼を以て既に經過したる場所を顧み彼所は幾丁を隔ち此所は幾丁を距ると其距離を計るに同じ然れども記憶心象ゐよりて過去の時を定むるは眼を以て其距離を見るよりは遙かに難しそは恰も視力不充分のものが後を回顧するに異らず其何れが遠くして何れか近きや甚だ判明ならず啻にそれのみならず既に忘却したる記憶心象の再

表現することあり例へば幼兒の時父母に伴はれて或場所に至りたることありしに其後全く之を忘却し居たり然るに其後偶ま其所に到り始めてこは以前に來りたることあるを憶起することあり又英國の或書中に以下の如き例を援引したるものあり曰く一女子未だ二三歳の幼兒たりしとき其母病痾を或田舍に養ひ居れり然るゐ病漸く革まりて到底快復することの難きを知り今一たび其女子ゐ面會せんとて其旨を鄕里に言ひ送れりやが て女子は母の許に到りしに母は之を抱き上げ悲哀遣るかたなく覓に其場に斃れて永眠不歸の客とはなりぬかくて女子は倫敦に歸り漸く成長して最早人心も付きぬる頃には己の幼兒たりしとき母に別れしを知れども其何れの日何れの場所なりしかを確知せず全く之を忘却し居れり然るゐ早や二十年の星霜も過ぬる頃偶ま其田舍ゐ到り以前母の在りし室に入りしが女子は大に驚きて己曾て確かに此室に入りしことありたゞにそれのみならず或一婦の己を抱き上げて大に悲嘆せしことありしと記憶心像は明かゐ其精神中に表現し來れり女子は如何にも之を奇怪に思ひ事のまゝを

遇ふ人々お語りしにそは斯く々々の次弟なりとて遂一に以前の事實を告げられ始めて疑團を解きたりと

又英國の人某曾て倫敦近傍なる或城廓の下に至れり此地は今公衆の遊歩場たり某以爲らく予は以前此地に來りたることわりと然れども其何れの月何れの日なりしやを明了に記憶せず其家に歸りて之を其父母に告げたり父母もまた之を忘れ居りしが今其子の語るを聽き熟ら往時を顧みて始めて某時此處に遊びしことを憶起し得たりと是れ等の例は今一々之を擧ぐるに遑あらざるべし

又口頭を以て傳へられたることゝ書信にて通せられたることを混同することわり予が米國に在りし時鄕里の朋友歿し母の許より書信を以て委しく其狀況を通報せられたり當時予は之を想像して恰も母の口づから聽取りし心地せり此心像一たび把住されしが故に爾來數年を經過して之を追想すれば予が米國に來りし後訃音の達したるとは思はず予は如何にしても之を母の口頭より直接に聽取りしが如く思ひ且其間には種々錯雜した

る事情あるが故に明友の死去は予が鄕里出發以前なりしが如く記憶せり只其事實を聽けば理論上予の記憶の誤謬なりしこと明白なりし斯の如き誤謬は蓋し諸君の經驗中にも少からざるべきを信ず

斯く記憶心象によりて過去の時を考ふるは頗る不明了のことたり而して把住と再生は一般に記憶に於ける廣き事實にして時を定むることは此二者と大に異り一の精神作用なり即ち把住再生は生理と通ずる所の有機記憶(Organic memory)なれども時を定むることは只精神内に限るものなり故お記憶なる言辭を最も狹く最も適當なる意味に使用する時は時を定むることと必ず之に附隨せざるべからず即ち時を定むるは記憶にして若し之を定めざれば記憶ならずと謂ふべきなり

今時を定むることに就て少しく講述すべしこは前例に於て示したるが如く頗る混雜すれども今最も其簡單なる方法を擧ぐれば記憶心象活動の明了の度によりて之を定むるものなり故に明了なる記憶心象は其近きものを現はし時の漸く經過するに從て不明了となる是れ一般の定時法なり恰

記憶の種

も吾人が物の遠近を定むるゐ近きものは明了にして其漸く遠くなるに從て明了の度を減ずるが如し而して之を一般の定時法と言へば恰も一の規則の如く思惟すべけれども吾人は敢て此規則によりて時を定むるにはあらず是れ自然に然るものなり

時を定むるは極めて困難のものなり吾人は事象の最も顯著なるものを記憶す例へば一日の中晨起夜臥或は晝餐に於ける事の如きは能く之を明記すと雖も是れ等以外通常一般の事は記憶すること稍難し然れども既に朝夕及び晝午の事を記すれば彼は晨起の後にして此は晝餐以前なりしといふが如く測量の標準點を置きて之を追想するが故に略ぼ其事實を記憶するを得べし斯の如く時を定むるは一定の能力によりてなすゐあらず種々の事象を相比較して其作用をなすものなり從て其甚だ複雜たるを免れず之を要するに記憶に於ては把住再生及び定時の三作用を以て必要の條件となす

以上は記憶に就て其一般の性質を講述したるものなり而して記憶にも亦

類

記憶は滅絶せず

種類の異なるものあり即ち自然ゐ腦中に把住せられ又再生し來る所の記憶にして之を詳言すれば吾人が憶起せんと欲して而して後憶起するゐはあらずして其憶起は自然に出るものを云ふ英國に於ては箇の種の記憶を表示すべき一定の言語なし獨逸に於ては之をエルヲルンク (Erinnerung) といふ又吾人が憶起せんと欲して而して後憶起するものあり之をゲダハス (Gedachtniss) といふ此二者は少しく類似する所あるを以て我國に於ては一般に之を包括して記憶と稱すれども其實大に異るものあり前者は特に自覺作用を要せず只自然ゐ精神中に現るゝものなり而して後者は必ず自覺作用を要し之によりて以て己の欲するまゝに憶起するをいふ

或は曰く吾人の記憶は必ず滅絶するとなし恰も物質世界に於ける勢力不滅の法の如く吾人一たび之を經驗すれば縱令一時之を忘るゝとありと雖も其心象は全然滅了するの期あるなく他日必ず之を憶起することあるべしと今其例證とする所を示さん獨逸の婦人某曾て熱病に罹り將に死に瀕せんとするゐ當りて頻りに喋々し其言語一も傍人に解せず天主教の僧侶

之を見て曰くこは惡魔の憑る處となりしならんとやがて退治の祈禱をなして甚だ力めたれども到底之を治することを得ざりし是に於てか衆相計り先づ其演ぶる所の言語を記錄せしに豈圖らんこは決して無意味の譫語にあらずして一のヘブリユー語なりしヘブリユー語は極めて博學の者にあらざれば之を修むるものなし而して此婦人は甚だ貧賤の家に生れて尙は能く之を知るは甚だ奇怪なりとて其噂漸く高く竟に佛國にまで聞ゆるに至り只之を聽かんが爲に諸方より來るもの甚だ多かりし爾後漸く之を探究し始めて此婦人が數年前或僧侶の許に下婢として働き居りしことを知り得たり而して又此僧侶は甚だ博學の人にして能くヘブリユー語を解し其廊下を運動するときは何時もヘブリユー語を口に唱ひしことを知れり而して其ヘブリユー語は實に此婦人の演ぶるものと同く毫も異る所あらざりしといふ是に因りて之を觀るにこは自覺作用によりて記憶するにあらず只知らず識らず耳に入りて精神中に把住されしもの今病痾に冒されて再生したるものなり以て一たび經驗せしものは必ず之を忘るゝことあらずと主張するものあり然れども是れ等僅少の例を以て記憶は必ず滅絕せずてふ一の大なる概括をなすことを能はざるべし

情の力と善惡の關係

感情は快不快の性を備ふ

情の力と善惡との關係

感情の道義上に關する性質を述べん既に前に述べたるが如く從來吾人の精神を以て智情意の三部より成れるが如く說明するの習慣あれどもこは歷史上より由來したるものゐして必ずしも此三分法を以て不動の眞理と稱すべからず故に予は精神を以て感情と識とに區分せんとす

却說吾人日常の經驗に徵すれば感情は必ず快不快の性を備ふるものなり即ち感情は快樂の感を起すことありまた痛苦の感を生ずることあり然れども中には幾んど知覺し能はざるが如き少量ゐ於て現はるゝことあり其快不快孰れに屬するかをも充分明亮ならず然れども如何なる場合ゐ於ても感情は必ず此兩者の一に居ること疑ふべからず

或は曰く快樂を慕ひ痛苦を避けんとするは是れ吾人の通情なりと然り豈

痛苦を好み快樂を逃れんとするものあらんや然れども其快樂を慕ふといふもの又痛苦を避くるといふものは元と同一の事情を只言辭を換へて表彰したるふ過ぎざるのみ例へば凡て物體の下方に墮落すると云ふが如し既に快樂と云へば好むの意を含み痛苦と云へば避くるの義を有す好む所即ち快樂避くる所即ち是れ苦痛なり是れ古往今來吾人々情の一般の性質として疑ふべからざるなり啻に然るのみならず快樂は元と互ふ結合し互に調和せんとするの性を備ふ而して快と快とが互に相調和するのみならずまた快感は常に身體の生理的活動と調和するものなり而して不快は之に反して互に調和的性質なく啻に其物自身の互に衝突するのみならずまた身體の健全と衝突す故に動物が種々の境遇に逢ひ自然の陶汰により自家保存の法則によりて進化するが如く感情も亦た自家の保存によりて發達す即ち快樂は自然の陶汰に逢ふも互に調和結合せんとするの性あるを以て之を免る而して痛苦はもと衝突より起るが故に陶汰に逢ふときは自滅せんとするの性あり然れども天然はもと人の爲めに造られたるものに

快樂は調和の性あり

不快樂は衝突の性あり

あらず天然は衝突多し吾人を圍む境遇は實に幾多の衝突を以て充さる故に吾人には痛苦の感多きも痛感は自滅せんとし快感は必ず自存せんとするの性を備ふるものなり

今例を以て之を示さん幼兒が燭光を見るときは初め其光の灼々たるを見て試に之に觸接せんとす而して之に觸接すれば直に熱痛を感ず即ち眼には快感を覺へ手に痛感を生ず是に於てか衝突起る故に後復び之を見るときは前の痛感を回想して之に觸るゝを避けんとす是れ痛感の自滅するものなり大人に於ても猶ほ然り彼の負瘍の如きは實に苦痛の甚しきものなり然れども猶ほ之を拒ぐを得べし而して其拒ぎ能はざるものは實に離別の情なり一朝彼の最愛の父母と手を別ちて遠く天涯に隔離するや春花秋月之を追想する毎に轉た惆悵に堪へざらんとす故に此苦痛を避けんと欲すればたゝ之を忘るゝに如かず而して其到底忘れ得ざるものは成るべく他の事情を以て慰籍するを宜しとす痛感は漸く他の感情の爲めに薄弱となるものなり之に反して快感は其物元と快なるが故に動もすれば之を追

人は常を快樂に求むるか

想し記憶從て强健となり長く保存することを得是れ其自家保存の性ありとなす所以なり抑も人生は自然の境遇に牽制せられて其心中幾んど痛苦の絶ゆることゝあるなし然れども以上の如きは實に人情自然の性質なるが故に快感は發達し痛感は漸く自滅せんとするの傾向あるものなり

夫れ人の快樂を求むるは猶ほ水の低に就くが如し然らば人は常に斷へず快樂を求むむるか曰く否抑も物理上に於て物の下方に墮落せんとするは自然の性なり然れども物體は必ずしも常に墮落するにあらず空氣漸く温度を增せば空中に向て上騰せんとす而してうは地球の引力を夫ひ彈力を生じて敢て然るにはあらず其温度を增すも下方に墮落せんとする本來の性質を失はずと雖ども たゞ比較上塞冷なる他の空氣の爲めに推し上げらるゝのみ斯の如く人は元と快樂を慕ふと雖ども比較上其多きものと少きものあり故ゐ或事情の爲めには一時痛苦に耐へて快樂を壓抑することあり以て後來快樂を得るの手段となす故ゐ快樂は元と人生固有のものと稱すへきなり

幸福と快樂の區別

道義學に於ては幸福と快樂を區別す即ち快樂とは其一時のものを云ひ幸福とは長く快樂を享くるの狀態を稱す例へば飲食の樂は即ち快樂にしてへず快樂を享くるもの即ち比較上不變の狀態に在るものを稱して幸福と名け一時の感を快樂と稱すと雖ども此に論ずるものは其廣衍の義に從ふものにして幸福快樂共に全體を包含するものなり故ゐ道義上より考察すれば孟子の所謂人性は善なりといふもの又善を好むは水の低に就くが如しと唱ふるものと略ぼ一致す而して儒教に於ては人性を善なりとなすか將た惡なりとなすかは實に一大疑問たり其說種々あり中に就て孟子は力めて性善を說く然れども未だ惡の根原を明解したることなし惡は實際世界に存す然るに猶ほ之を明了にせず是れ人をして迷はしむる所以なり而して予も亦た人の快樂を好むを以て其性の善なるを信ず其惡に至りては孟子は即ち言へり曰く勢即ち然るなりと何ぞ其言の漠焉たるや予は未だ首肯する能はざるなり予は今惡の起因に就て以下少しく講述せん

天然は人の爲めに造られず

夫れ天然は人の爲めに造られず故に吾人の四圍は幾んど衝突を以て充滿す而して其衝突は天然其物の互になすあり或は天然と吾人の身體の間になすありまた身體に於ても慾と慾との互に衝突するものあるを觀る例へば食物の健全に於けるが如し吾人は此兩者を欲するの慾あり而して猶ほ飽饜すれば健全を害す吾人は實に此衝突中に在り故に人情之を避け快を求めて以て調和せんと欲す然れども衝突既に在り一時に之を平服する能はず故に漸次其勢を殺ぎて調和を得以て快樂を增さんと欲す是れ吾人の大望なり

天然の法則を使用す

末開の時に在りては雷電水火天然の災を以て神の憤怒に出づるものとなしたり然るに世の漸く開明に趣くに從てや事理を究め物理を探り天然の法則を明了ゐして之に依りて以て天然を人の爲めに使用するを得るに至れり例へば電氣風若くは水の如きは天然の儘ゐしては恐るべき災殃を來すことあれども之を利用せば以て人生に非常の便益を與ふるが如し故ゐ予は謂ふ天然は人の爲めゐ生せず元と衝突を以て充さると而して吾人は

道義上の惡

其智によりて天然力を使用し以て衝突を省き調和を得故ゐ言ふ或意味に於ては世の開明の度は其天然力を使用するの度によりて量るを得ると實に吾人を欺かざるなり

却說惡は元と人世に存在す必ず後世に發したるにあらざるなり惡とは何ぞ即ち天災をいふ然れども道義上に於ては之を惡と認めず其所謂惡とは人と人との衝突なり而して道義上の惡は社會の原始時代ゐ於ては極めて少し何となれば人少く從て爭の必要鮮ければなり社會上衝突の起因二樣ゐり左に之を述べん

惡の起因

第一

(第一)野蠻時代に於て慾情强盛之を抑制すること能はず從て衝突起るものの是なり即ち憤怒嫉妬若くは復讎の念の如き惡心をいふ惡心は元と衝突其物を好むものなり故ゐ予は是れ等を以て全く惡心なりと思惟す而して之を適度に使用するは即ち權道なりと唱ふるものゐり然れども予は之を以て全然社會に要なきものなりと思惟す斯の如き惡心は實に野蠻に多し而して其惡心の爲めに衝突生ず然れども是れ等は比較上甚だ僅少のこと

第二

なり

（第二）外界の境遇の爲めに止を得ず起る所の衝突是なり世の漸く進歩するに從て人口繁殖し食ふに物なく耕すに地なし是に於てか竟に爭論發す之を是れ道義上の惡といふ此衝突を省き調和を計るは即ち道義學の目的とする所なり而して儒教に於ては道義學を以て政治學と同一のものなりとなす此點に就ては古來種々の議論あり未だ一定せずと雖も予は此兩者を以て全く異別のものにあらずと思惟す道義學に於ては人と人との衝突を避けんとす政治學の主意とする所亦た之と異るなし而して其衝突を避けんとするは反面的にして正面的に於ては即ち人情の本性に基き漸く快樂を增進せんとするを目的となす政治學に於て人生の幸福を高めんと欲するもの即ち是れなり然るに世には往々此二學を以て異別のものとし政治學は權謀術數を逞くするものなりと說くものあり是れ權道を以て權謀と混一するものなり政治學に於ては實に權道に從ふこと多し而して道義學は元と常道に據る其然る所以は即ち政治は社會上に起る所の急變に應

情と道義の關係

じ力めて之を調和せんとし道義學に於ては長く人生百年の計を立るを以て主となすが故なり然れども其目的の共に幸福を增し衝突を避けんとするにあるは即ち一なり

以上述べ來りたるが如く惡は之を二樣に區別して一は元と人世に存在する所の天災の惡となし二は吾人相互の間ゐ生ずる所の衝突より起る惡となすべし而して第二の吾人相互の間に生ずる所の衝突即ち外界の境遇より止を得ず起る所の衝突を除くは是れ道義學の目的とする所なり之を除かんとすれば快樂を壓抑しまた病苦に耐へざるべからざることあり一時の快樂を壓抑するは實に究竟の大快樂を得んと欲する所以なり吾人の痛苦ゐ耐ゆるもの身を其犧牲ゐ供せんとするの意にあらざるなり

情は道義上ゐ如何なる關係を有するか抑も儒教に於ては人性の善惡論は極めて切要の問題にして古來之ゐ就て說論したるもの甚だ尠少ならず王陽明は曰く人心より發するものは悉く是れ天理なり唯た其不可なるものを名けて惡といひ可なるものを名けて善と稱す即ち善惡とは人心の外部

善惡は人情の本とす

に發動したるものに就て其適度を得たると否とによりて名稱を異にするのみ其根本に至りては等しく是れ天理たること毫も差異あらず故ゐ所謂人慾の如き區別を設けて一の特殊のものゝ如く思惟するは未だ可なるを見ずと

予は王陽明の說を以て頗る趣味あるものなりと信ず凡べて心より發するものは皆等しく天理なれども之を惡と名け善と稱するは其發動の後に下したるの名稱なるが故に往時惡なりと思惟したるものも今は却て善と稱せられ前ゐ善なりと稱賛せられしものも後には却て惡として擯斥せらゝことあるを免れず即ち善惡は時勢の變遷に隨て差異あるものなり而して人情も亦時勢の變遷に隨て其影響を蒙ることなきにあらずと雖も比較的甚だ僅少なり故に物徂徠の如きも人情は總て天理に從ふものにして敢て善惡あるものにあらずと論述したり

故に人の道義を修むる上にて斯くすべし斯くなさゞるべからずと論ずるはもと不可なるにあらずと雖もこは既に枝葉に屬するものにして其根本

近來の惡弊

たるものは即ち人情を措て他にあらず情の性質にして可なるものなりせば縱令多少の過はこれなきにあらずとするも大に人の道義を進め得べきものなり若し其性質にして不可ならんか之を匡正せんがため細密の法則によりて約束せんとするときは却て其進歩を防碍しよし世に害毒を流す程のものに至らずとするも決して善良のものとなすべからず故に廣衍の意味を以て考ふるときは道義を進めんには先づ其根本たる人情の發達を謀るを以て專とすべきなり

然るに近來世の狀勢を觀察するに修身敎育の如きは專ら矯正的に傾き斯くすべし斯くなさゞるべからずと務むるを以て其能事了れりと思惟するもの比々然るが如し然れども前既に述べたる如く情の性質にして元と不可なるものなりせば如何に之を匡正せんとするも決して善良のものとなすこと能はざるべし故に苟くも經世に意あるもの天下の道德を發達せしめんと欲すれば先づ人情の發達を計るを以て其任となすべきなり人情にして既に善良に進めば惡は自ら滅亡すべし

善惡の發達

人情即ち情の力はもと善惡に超越したるものなり即ち善惡は枝葉にして人情は其根幹たるが如し故に先づ其根幹を養へば枝葉は自ら茂然たるに至るべきなり而して其枝葉たる善惡は果して如何にして發達し來りしか是れ予が以下に說述せんと欲するの問題なり

或論者曰く人の心は生れなからにして六角若くは八角の如き形體を備ふるものなり(固とより心は形體あるにあらず是れ一の譬喩のみ)而して人心其形體を失ひたるときは是れ先天的に既に惡なるものなりと

又他の論者は曰く人の心はもと先天的に形體の定りたるものにあらず譬へば圓形二箇をとり兩方より壓迫するときは半圓形のものとなるべく三箇を集めて壓迫するときは各箇圓の三分の一のものとなるべし而して若し數十箇若くは數百個相集めて壓迫するときは其六角となるや固より論を俟たず人心も猶ほ斯の如く其始獨り世界に生存するやたゞ己の欲するがまゝに行動し得べく毫も他に憚る所あらず然れども二人三人續で數十人相集合するに至りてや互に慾の衝突を生ずるが故に其衝突を省かんが

道義上の善惡

ためふ權利義務若くは禮儀なるものを生じ漸く人の繁殖するに隨て社會的の關係は益煩雜に至るべし斯の如く社會的の關係即ち君臣の關係の如き父子の關係の如きは先天的に之あるにあらずして君臣あり父子ありて而して後發生したるものなり治者と被治者との關係教師と生徒との關係等皆然らざるはなし而して此社會にありて善と稱せらるゝものは二樣の意味を有す自己一身の健全を助くるものを善となす其一なり例へば過食の癖ある人其健全に害あるを知りて適度に節制するが如き即ち是なり而して其情慾を制限する能はず常に過食して身體を害するが如きは是れ惡なりと言はざるべからず然れどもこは道義上に於て論ずる所の善惡にあらず道義學上の所謂善惡とは吾人相互の關係上より起るものにして相互の衝突の如き之を名けて惡といふ例へば茲に一村落あり其人民皆魯鈍愚昧にして他の文明社會より觀れば甚だ嗤笑すべきが如しと雖も其人民等自身は皆鼓腹擊壤し和氣洋々たる武陵の桃源に生息す然るに今一人の外より來るものあり人民等に說て曰く汝等實に魯愚憫むべきものなり予は今

汝等ゐ敎ふる所あるべしと彼を說き此を敎ふるときは恰も春陽駘蕩の天に一陣の狂風來り襲ふが如く其村落の平穩は爲めに攪擾せられて從來の太平を謳歌すると能はざるゐ至るべし此場合に於ては此人の所爲決して善良なりと稱するを得ず何となれば村落の平安を害するものなればなり」善惡の關係は以上の如き事實よりして發達し來りたるものなり抑も人は社會的の動物にして一の國體をなして生息するものなるが故に其調和を助くるものは即ち善にして之を妨ぐるものは皆惡なりと言はざるべからず故ゐ善惡の意味を只一個人に就て考ふるときは其身體の健全を助くるもの善にして之を害するものは惡なりと雖も之を社會上より觀れば人民相互の調和を助くるもの即ち善ゐして之を害するものは皆惡なりと言はざるべからず斯の如く考察し來れば世に惡人なるものなきに至るべし何となれば一方面より觀て善なるものも他方面より觀れば則ち惡なれば なり例へば此に一隊の賊あり隣村の財產を刼掠して其衣食に給しつゝありとせんか之を賊の方面よりして觀れば捕拿の多き丈けそれ丈け善なり

然るに若し一轉地を替へて隣村より之を觀れば捕拿せらるゝ所のもの多き丈け惡なるなり是に於て之を觀る善惡は決して一定するものにあらざることを又或者は言へり(之に對して異說あるが故に未だ其眞否の如何を確知すべからざるも)現今の所謂白色人種即ち歐米に蔓延する所の人種は印度人と同一種にしてアーヤン人種と稱ふアーヤン人種は元とイリニヤンと名け往時亞細亞の西部に於て歐羅巴人と共に棲息したり然るに其漸く群集するや宗敎及び其他の事情に就て感情思想を異にするものあり終に黨派を生じて軋轢甚しく共に棲息するの困難を觀るに至り是に於てか一派は今の印度に來り他の一派はポルシヤを經て歐羅巴に移れり此に一の奇談ありポルジヤの天地開闢記によるに初め善神と惡神あり此二神戰鬪を開き前者勝て後者敗れたるより此世界は爾來圓滿に發達し來れりと而してポルジヤの所謂惡神なるものは印度の善神なると同じく印度の惡神はポルジヤの善神なり即ちポルジヤ人及び印度人の唱道する所は全く正反對にあり

善惡は關係的なり

是れ等の點より考察すれば善惡は全く關係的より發達したるものにして本來決して一定するものにあらざるなり故に荀子等の所謂人性は根本的惡にして終に互に爭鬪するに至りたりとなすものは未だ其可なるを見す

以上は善惡の根本に就て說明したるものなれども今日に於ても尙ほ此關係あるは歷々として實際に徵すべし例へば白色人種が亞米利加を押領したるが如き之を白色人種より觀れば廣延の土地を以て其衣食に給するが故に甚だ善なるが如しと雖も之を亞米利加土人より觀れば其惡たること極めて明亮なり故に人性を以て根本的に惡なりとなすが如きは其末を觀て未だ其本を察せざるものといふべし

以上講述したる所のミに就て善惡の如何を考究せんとすれば終に標準の一定する所なく彝倫壞亂世は闇黑と化し了するに至らん故に彼の倫理と稱ふるものゝ如きは全く聖人の詐謀によりて作爲せられたるものとなすも不可なからん然れども人情は自ら歸する所あり夫れ空氣は何れの處を

人情歸一

問はず常に東西に動搖して全く秩序なきが如しと雖も之を氣象學者若くは地文學者に質せば自ら其秩序あるを知る即ち風の强弱方向の如きはよし綿密ならずとするも其大概を豫知するを得べきなり只吾人の俗識を以てすれば殆んど之を豫知すること能はず故に其動搖は全く秩序なきものと忠惟す而して吾人の運命も亦斯の如く何れに生れ何れに終るかを知らずとなし坐ろに嘆慨するものなきにあらずと雖も恰も風の方位に秩序あるが如く自ら歸一する所あるを觀る

夫れ空氣の動搖は元と物體墜下の法則による人情も亦斯の如く其反覆し轉環するも自ら一の法則あり若し之れなくんば固より道義學の世に起るべき理なし惟是れあり因て以て善惡定まる例へば山中に獰賊の一群あり毫も生產的事業をなさず常に近隣の村落を侵し其捕拿し得たるものを以て己の生活を營みつゝありと假定せよ是れ等はすべて貪婪飽くなきの獰賊なるか否必ずしも然らず其中尙ほ惻隱の情を備へ且仁あり義あるものあらん然れども是れ等も尙名けて惡人といふ何となれば其所業人情に反

人情に反するを惡とす

するものなればなり然りと雖も是れ等の人も若し一朝其非を悛めて生産的事業に着手するに至らば或は良民となるやも計るべからず

善惡を只關係的にのゝ考察すれば甲の惡は乙の善にして乙の惡は即ち甲の善なるべしと雖も人情の向ふ所は自ら一定す故に之に反するものを以て惡人となし之に從ふものを善人となす

善惡は元と關係的の思想なれども其漸く經驗を積み智識の進むに隨てや恰も氣象學者の天氣を豫報するが如く一般人情の天氣豫報ともいふべきものを造るに至る即ち其向ふ所を發見し以て善惡の標準となす

之を再言せば初めは所謂未定確論なれども漸く文明の進むに隨て一般人情の向ふ所一定し之を標準として以て善惡を確定す是れ所謂文明社會に於て論ずる所の道義學なり

人情の歸向する所未だ一定せざれば決して世に道義學なるものあるべき筈なし夫れ吾人の心中に發動する所のものは元とすべて天理なりと雖も社會漸く進歩するに隨て互に衝突を生じ衝突生ずるに至て縱令人を害するもの尙は己の意を遂げんとするに至る是れ之を惡人といふ之に反して互に調和安全を計らんとするもの之を稱して善人といふ而して其根本たるものは即ち人情是れなり善と稱し惡と名くるもの皆人情を根本とし之に從順なると悖戻するとの如何によりて始めて分る既に人情なくんば未た善惡なるものの之れあるべからざるなり恰も是れ物體の墜下し若くは上騰するが如し元と共に重力の作用によると雖も其結果は終に反對の方面に向て分る善惡も元と情の作用によりて生ず其圓滿發達を計らんとするものは即ち善なり然るに其根本たるの人情を忘れて只表面の形狀のゝに注意し表面の規則を名けて義務といひ責任といひ以て吾人が嚴守せざるべからざるものとなす然れども其根本たるの情を忘れて義務若くは責任のみを論ずるも恰も蒸氣を入れずして機械を修繕せんとするが如く縱令機械を修繕するも決して運轉することなかるべし若し機械を修繕すると同時に蒸氣を入るれば蒸氣の活動よりして此に運轉を始むるに至らん倫理に於ても亦斯の如し仁義若くは德なるものを要すべしと雖も只之を注入するのみ

にしては決して善人となすこと能はず

近來社會の狀勢を見るに只表面の形狀にのみ注意するものあるが如し若し單に斯の如くならずして其根本たる情の圓滿發達を研究し之を補ふに義務責任若くは道德を以てすれば大に此道義を進むることを得べし

第十二章　理想

理想

天然と人意

吾人は通常天然の語を以て此覆載間に存在する所の森羅万象を包括するの意味に使用すれども時としては少しく其意義を狹隘にし惟り物質界のみに通用して以て精神界と相對せしむることあり即ち天爲人造と相對稱するが如き是なり而して天爲に人造を交ゆるときは往々にして其高潔美妙を汚損することあり故に天然の眞美を樂まんとするときは之に人間の工夫を交へざるに如かざるなり然れども他方より考察するときは天然のもの皆悉く完全なるに非ず若し天然にして果して完全ならんには彼の慓悍猛獰にして相距る禽獸と遠からざるの蠻民は稍々天然に近きが故に却て開化の人民に優らざるべからず豈然るべきの理あらんや是に於てか往々人意は天然に參りて天然の美を保維し天然の力を使用し其缺點を補ひて以て吾人高尚の希望に應せんとす

開化とは如何

斯の如く人は天然の働きを見て己れが過失を悟り以て天然に倣はざるべからざる場合あり或は其精神の働きにより以て天然の缺點を補ふべき場合あるを以て兩者相俟て始めて完全に達するを得べきは固より疑ふべからずと雖も若し其兩者作用の範圍を比較し來れば後者の前者に優ること甚だ萬々なり世界開明の歷史は即ち人が天然力を使用して以て天然の缺點を補修したるの歷史なり又果して世に社會力若くは國家力なる一種の勢力存在すとせば是れ即ち天然力に人意を結合したるものに外ならざるなり

變化中の不變

吾人が物の完全不完全を論ずるは必ず一定の標準に依據せざるべからず天然人意果して孰れか完全なるか兩者は共に千變萬化し決して不易の標準なきが如く然り

抑も古來幾多の哲學者が拮据慘憺以て天然の眞理を發見せんとせしは實に此不易の標準の所在を定めんとしたるに過ぎざるなり佛氏は涅槃を以て老子は道德を以てパイサゴラスは數理を以て、而して孔子は之を國の歷史に求め祖先の例を取りて以て其標準となさんと試みたりソクラテスは曰く天然常なく人心窮りなし何れか共に不變のものならざらん然りと雖も少しく注意して吾人精神の現象を觀察し來れば其中概念の存在するを見る概念中には幾多の觀念を含有し個〻の觀念は新陳代謝常に停止する所なしと雖も之を綜括するの概念は變化を受くること極めて少し之を譬へば春過ぎ夏來り一年の時候は轉々相環ぐりて常に窮極なきが如きも四時を綜括して一期と見做すときは一年は他の一年に同じく殆んど毫も變化する所なきが如し

斯の如く幾多の觀念は終始意識中に新陳代謝するも之を總括するの概念は幾んど變化を受くることなし即ち變化中にありて不變化なるものなりと要するに氏は概念を以て萬物の標準とすべしと論じたるなり

概念の性質

内包外延

今少しくソクラテスの說を明晰ならしめんがため概念の性質に就て其大體を講述せん

概念とは多くの物體に普通なる觀念を其物質中より抽象して集めたるものなり而して概念には複雜なるものと否らざるものとあり複雜ならざるものは其範圍廣く漸く複雜なるに隨て其範圍も亦た漸く狹隘となる例へば廣がりなる概念は單一にして萬物を含有し其範圍廣しと雖も物體なる觀念は之に比すれば稍複雜にして其範圍少しく狹く更に固形物なる概念に至りては一層複雜を增すと共に其範圍一層狹隘となるべし今圖を以て之を示さん

而して概念の範圍は之を外延といひ其複雜の度は之を內包と稱す之を要するに外延の大小は內包の大小に反比例するものなり

ソクラテスの概念

斯く概念の內包最小にして外延最大なるときは其中に含有する所の觀念の數最も多きが故に觀念は新陳代謝するも概念は其變化を蒙ること最も少し前例春夏秋冬なる觀念を總括して一年なる一個の概念となすときは年々の變化は春夏秋冬に比して稍少し更に之を擴張し五年を以て一期と假定し之を次の五年に比するときは其變化更に少かるべきなり斯く漸く擴張して六十年を一期となし之を次の六十年に比するときは幾んと毫も差異あることなく同一の事象を現出するを觀るといふ概念もまた之と同じく其外延を擴張するに隨て變化すること漸く少し例へば萬有の存在萬有の大原因善或は美等の概念は萬古不易にして唯其中に含有さるゝ幾多の觀念のみ常に轉變窮りなきものなり往古の善なる觀念は今日の善なる觀念に異り歐洲人の美なる觀念は我邦人の美なる觀念と同じからざる所あり斯の如く其詳細に至りては種々異同あれども大體の「善は爲すべきと」といふ格言的觀念は古今東西を通じて決して渝る所あらざるなり而して斯の如きは甚だ漠然として內包最も小なるものなり然れども其外延

佛氏の涅槃

プレトーの觀念

最も廣く且不易の點よりすれば是れ道義の標準とも稱すべきなり

以上はソクラテスの發見したる所なり而して氏の哲學は元來倫理的に傾くが故に其發見したる概念も亦倫理的なるは自ら然るべきの理なり

佛氏の所謂涅槃は萬物活動の理を論理的に考へ此轉變窮りなき世界中に於て不變の概念を求めたるものにして內包最小にして外延最大なる存在をいふ即ち生と死の區別を超越したる概念なり

佛氏は之を論理に考へソクラテスは之を倫理に說く此二者共に大切ならざるにあらずと雖も未だ以て人間精神の神髓となすに足らざるなりプレトーは此二者に結合するに美の概念を以てし以て始めて圓滿なる概念となしたり凡そ時代の變遷と人種の差異とにより其好尙は各異同ありと雖も未だ美の感なきものなく美は實に古今東西を通じて人の嗜好する所なり

プレトーは元と哲學者にして且詩人なりしが故其哲學は深邃にして且壯快なるものなり氏はソクラテスの門下に出でたるが故に其學統を繼承せ

理想

しと雖もたゞ其學說を紹述するのみに止らず更に之に美妙の趣を添加したり即ち氏はソクラテスの概念に添ゆるに美妙の感を以てし之れを觀念と名けたり而して氏の所謂觀念は今日吾人が理想と稱するものと略ぼ同じ

以上講述したる所により以て理想の性質を了解し得べし即ち理想とは精神中の一現象にして論理的倫理的及び美術的に完全圓滿と認められたる絶對的のものにして卓然として世の變化の上に立ち以て萬物の標準となり萬物進化の目的となるべき完全無缺萬古不動の觀念をいふ是れ人をして益高尚の域に進化せしむるに缺ぐべからざるものなり故に此種の觀念を涵養するは是れ德育の目的とする所なり

理想の意義斯の如しと雖も時として之を狹隘の意味に使用することあり即ち事物の比較的完全なるに用ふ例へば理想的の國家理想的の人若くは理想的の家といふが如し又理想は宇宙間萬物の標準なるが故に之を日常の事物に應用し事物の模範たるべきものを理想と稱することあり例へば

快樂の種類及其性質

彼の人を理想として云ふの如き是なり然れども其本來の意義に於て之を用ふるときは萬物一として理想的のものあらず理想は唯教育ある人の精神中にのみ存するものなり

第十三章　快樂の種類及び其性質

通常心理學者は苦樂の感を以て精神三大部(智情意)の一部とすれども予は斯の如き分類を用ひずして只之を苦樂の感と言はんとす何となれば苦樂の感とは人情の千變萬化を包括するもの即ち都べての感情を言ひ表はす所のものなればなり

感情は心が外界の境遇に感應して發動するものなり而して心と外境の間にありて是れが媒介たるものは耳目鼻口等の感官なりとす故に感情發動の要素たるもの都べて三あり其一心其二感官其三外界の境遇是なり而して感情は此三者の關係上よりして種々異樣の狀態を生ず即ち快樂なるものあり不快樂なるものあり或は快樂中に於ても亦千狀萬態の差あるが如

し

予は今詳細なる狀態に就て論せんとするに先ち先づ快樂及び不快樂とは果して如何なる性質を有するかを研究せんとす科學上の通則よりすれば先づ其種々の狀態に就て研究し而る後性質の攻究に移るを以て當然の順序とすれども予は却て此の反對の順序を取るを以て講學上の便利多きを信ず

人に快不快の感あるは恰も水に寒暖あり光に明暗あると毫も異ることなし而して水の寒暖は其熱度の高低如何によりて異り光の明暗は光線の鋭鈍多少によりて分るゝものにして元と絶對的に寒暖及び明暗なるものゝ存在するにあらざるなり而して吾人の精神現象中には快不快なる絶對的二原素の存在するか或は水若くは光に於けるが如く只一原素のみ存在するか若し果して一原素のみなりとせば其原素は快樂なるか將た不快樂なるか或は快不快孰れにも屬せず一種特殊のものなるか以下此點に就て少しく講述せん

古來學者の說

今歷史に溯て之を考ふるにプレトーの說によれば苦痛は實在するものにして快樂は實在するものに非ず即ち苦痛なきの狀態を稱して快樂といふと言へり然るにアリストートルは之に反して快樂こそ實在するものにして苦痛とは快樂を脫したるの狀態をいふと主張せり其大意を擧ぐれば身體精神共に健全にして其活動調和し完全なる生活を保持し毫も之を妨障するものなき狀態を以て快樂と稱すといふにあり

降て近世に至りハミルトンは苦樂の感の要素を論じて曰く人の此世に生活するは心身を活動せしむるにあり而して活動力は有限なるものなり活動力有限なるが故に苦樂を生ず而して又吾人の生活力は耳目鼻口等各特殊の活動をなす活動力完全なることの度に隨て快樂多く其不完全なることの度に隨て苦痛多し活動力の完全なることを定むるに二種の標準あり主觀的及客觀的是なり主觀的標準とは活動の精神に充滿し過不及なきことを云ひ活動妨げらるゝか或は外物の爲めに强ひられて活動するときは之を不完全なる活動と云ふ客觀的標準とは主觀的に以上の如き活動を生

せしむるものを云ふ故に苦樂の定義を下せば快樂は調和の結果にして苦痛は不調和の結果なりと

スペンサーの說はハミルトンの說と大同小異にして快樂は有機體の活動と其發達に伴ひ苦痛は其活動と發達の損害に伴ふものなりといふにあり夫れ人の精神活動は極めて繁雜にして之を一概に論ずること能はず快樂に種々あると同じく不快樂にもまた種々あり例へば安心立命を以て快樂とするか或は戰場に臨み身命を顧みずして奮進猛鬪するを快樂とするか或は山媚水明の邊邑にあり花鳥風月を友とするを快樂とするか或は廟堂に立ち政治に參與し日夜心身を勞するを快樂とするか是れ等の快樂は相矛盾するを免れざるか如し即ち安心立命或は邊邑に隱遯するが如きは心身の健全に益ありと雖も戰場に臨み或は政治に奔走するが如きは其健全に害あること蓋し尠少ならざるべし然るにハミルトン及びスペンサーの如きは是れ等詳細の點に論及せず其說く所甚だ漠然たるが如し故に予は未だ是れ等の說に首肯すること能はず

快不快の解釋

以下少しく予の信ずる所に就て說述せんとす

快樂とは刺激と其刺激に對する所の感應との關係に於て二者適合したるの狀態をいひ不快樂とは之に反して刺激と感應の二者相適合せざるの狀態をいふ

外境と感官との關係

第一外境と感官との關係　吾人を圍繞する所の外境と耳目鼻口の感官との關係とに就て以上の解釋を如何に應用し得べきか今例を假りて之を說明せん凡そ吾人の感官に受くる所の氣候衣食住光線音響等渾べて外界にありて吾人の感官に刺激を與ふる所のものが感官に適合したるときは之を快樂といふ此の種の快樂は身體の生理上の狀態と身體を圍繞する所の境遇との工合によりて發する所の快樂なるが故に之を生理上の快樂といふなり

心と感官との關係

第二心と感官との關係　吾人の心と感官との關係に至りては少しく生理的心理學上に涉ることあり然れども是れ極めて僅少の部分のみ心と身體の關係上より快樂或は不快樂を發することあり例へば精神が極めて銳敏

外境と心との關係

にして而して身體は其精神の欲するまゝに活動せざるときは大に不快樂を感ずることあり是れ即ち心身體と相適合せざるものなり又身體極めて健康なるも心の快々たるときにありては身體の活動却て心に不快樂を與ふることあり故に心身の二者互に能く相適合せざるに於ては畢竟快樂を得ること能はざるものなり而して其多くは皆身體の健康上より起る故に予は之を稱して一種の生理的快樂と名けんとす

第三外境と心との關係　吾人の心は感官の介助を籍りて始めて感ずることを得是れ此に說くを須ひずして既に明了なり然れども感官は只其媒介となりて傳ふるのみなるが故に心と外界は殆んど直接に相感ずるといふも不可なきなり彼の風光の佳絕なるを見て目を樂ましむといふものは其實心を樂ましむるをいひ音樂の喇嗹たるを聽きて耳を樂ましむといふものもまた其實心を樂ましむるをいふなり又社交上より起る所の快樂も必ず耳目鼻口等の感官の介助を籍らざるべからずと雖も其快樂は即ち相互の心の感應より起るものなり故に都べて外界と心との關係に於て二者

聯想の關係

相適合する場合に始めて快樂を得るものなり

第四聯想の關係　聯想(Association of idea)は吾人の快樂上重大の關係を有するものにして高尚なる快樂は大抵皆此聯想上より發するものなり而して聯想によりて觀念と他の觀念が互に能く適合するか若くは聯想したる觀念と其時の心の狀態とが相適合するときは心中快樂を感ずるものなり

情の正面的及び反面的

情の正面的及び反面的　吾人の感情に於て正面的に云へば快樂、反面的に云へば不快樂なるものあり以下此區別に就て講述せん

快不快の關係

快不快の關係　今之を說くの前先づ快樂と不快樂の關係を述べざるべからず快不快の二者互に相伴ふは世俗「樂あれば苦あり」「良藥口に苦し」「樂は苦の種苦は樂の種」等の俚諺あるが如く一般世人の經驗する所なり而して此點は古來幾多の哲學者が拮据慘憺して研究せんとせしも終に說明し盡すこと能はずして止み爾來今日に至るまで尙は甚だ曖昧たるを免れず

ソクラテスはたゝに智識該博なるのみならず又實際の經驗に富みたる人なりき氏は言へり若しイソップをして快不快の關係の問題を說明せしめ

ば必ず一箇の小說をものして言はん快と不快の二者を調和せんとして神は種々斡旋したれども終に其目的を達すること能はず已むなく此二者(生物に擬して)の頭を合せて一となしたり是に於て頭一にして身體二となり快不快は如何なる場合に於ても分離すべからざるに至れりと斯の如き說になれば快不快孰れが表面にして孰れが裏面なるか明了に之を知ることを能はず

快不快の伴隨

又人情界の快不快を平均すれば三者孰れか多きか或は二者共に寂滅に歸するかとは是れ哲學者中の一大問題なり不快樂を以て多しとするものは厭世主義にして快樂を以て多しとするものは即ち樂天主義なり而して此兩主義孰れか正當なるか或は兩主義共に正鵠を誤るか未だ一定の確說あらず以下此點に就き予の思ふ所を述べん

予は先づ快不快は必ず相伴隨するものなりと一の斷案を下し其範圍內に於て此二者の關係を研究せんとす既に此二者を以て必ず相伴隨するものとせは到底純粹の快樂を得ることを能はざるか、又物理界に於ける勢力(Eng-

(ley)不滅法の如きものの精神界にもこれありて快不快には元と一定の量あり定量以外には二者とも如何にするも之を得ること能はざるか、或は斯の如き一定の法なくして別に快樂增造法とも名くべきものあるか予は是れ等の諸點に就て研究するに人情界には決して勢力不滅法の如きものこれなきを信ず今其理由として快樂增造法の一二を左に述べん

快不快は配列の工合によりて異る

快不快は配列の工合によりて大に差異あるが如し例へば此に十の快樂と十の不快樂ありと假定せんに此二者は配列の工合によりて之を感ずるの度甚だ異る今數學に就て考ふるに錯列の理によれば一二三四と四二三一とは各の合數相等しと雖も配列の順序及其他に於て大に異る所あり快不快も亦之に同じ例へば一方に於ては一日に十の快樂を受け後の十日間に一日一づゝの不快樂を受くると見做し他方に於ては初十日間に一日一づゝの不快樂を受くるとせん此二者快樂を感ずるの度は決して同一にあらざるべし今少しく明了に之を言はゝ初他人より金圓を借りて遊樂に遣ひ果し後之を返濟せんが爲めに勞働するもの

快樂感應の法

と又初勞働を積で金員を貯へ而る後之を娛樂に費すものと比較すれば實際快樂を感ずること前者より後者の方稍多きが如し是に於てか數量同一なるも配列の工合によりて大に差異を生ずるを知る支那の古事に朝三暮四といふものまた精神上の理法に基くなきか

快樂感應の法には其度强くして之を受くるの時間短きものあり飲食の快樂社交上の快樂等の如し又其度弱くして却て時間長きものあり適度の氣候より生ずる快樂衣服の快樂健全の快樂等の如し不快樂に於けるも亦同じ

之を物理上より論ずれば分量に時の長さを乘じ以て快樂の全量を見出すことを得べし然れどもこはまた心理上に應用し得べきや否やこれ一の疑問なり吾人の經驗によれば種々の遇過によりて變化あり必ずしも一定せざるものゝ如し例へば快樂の量少きも長く繼續するを喜ぶことあり貧者に衣食を與ふるの類なり然れども家富みてすべての必要物に不足なきものにありては少量の快樂を長く繼續せしめんよりは寧ろ宴會舞蹈の如き

快樂の裏面

時間短きも其量多きを愉快なりとなすべし是れ等の差によりて快樂の殘象(快樂が精神上に殘す所の結果)大に異るものなり

快樂の裏面即ち不快樂(勞働若くは勞苦)にまた此二種あり之を換言すれば勞働若くは勞苦中には其分量同じきも働き工合によりて大に堪へ易きものと否らざるものあり抑も快樂と勞苦は何時も數理上の關係を保ち定量の快樂あれば又定量の勞苦あり然れども極めて堪へ易き勞苦を費して快樂を得れば二相相扣除して數理上零となるも是れ畢竟失ふ所に比して得る所多きものなり經濟學上最も僅かの勞働を以て最も多くの富を得る(最も堪へ易き仕事をして最も大なる快樂を得)を其主意となすが如き即ち是なり勞働には定量あるが故に働くだけ働かざれば決して快樂を得ることを能はず只其働きをなるべく堪へ易からしめ以て多くの快樂を得んとするにあり

尙は一歩を進めて考察するに吾人は殆んど勞苦勞働を費さずして快樂を得ることあり即ち天然力を利用して人の幸福利益を增進するが如き是な

り昔時アリストートルは其政治學中器械と奴隷の關係を論じて曰く奴隷は生きたる器械にして他器械に比すれば價値夐かに多きものなり而して若し各器械が前知力を有して豫め主人の好む所を知り主人の命令に從て自働(例へば梭は自動して機を織り琴は自動して音を發するが如し)するに至らば決して奴隷の必要なかるべしと然るに今日歐米諸國はアリストートルが想像中に描きたるが如き狀態にあり天然力を利用し極めて僅少の勞働を以て極めて廣大の利益を得るに至れり

また吾人身體の生理上の狀態により身體中蓄積する所の生理的勢力(Energy)を費して快樂を得んとするとき不快樂をして伴隨せしめざるを得ることあり例へば身體を健康にし恰も勢力の蓄積したるとき適度に遊歩し若くは讀書するが如き快樂は殆んど毫も勞苦を要せず是れ蓄積したる勢力を利用して不快樂の伴隨せざる快樂を得る方法なり

斯の如く方法の撰擇如何によりては不快樂の伴隨せざる所謂純粹の快樂を得ることあり然れども若し其方法若くは配列の工合にして拙陋なれば

快樂の價値測定法

快樂を得ずして却て苦痛のみ受くることあり之を要するに此世界に苦痛多からしめて快樂を少くするか將た快樂多からしめて苦痛を少くするかは只其工合如何に存するが如し

快樂の價値測定法　世俗一般に唱ふる所によれば飲食の如きは下等の快樂にして美術を好み道義を樂むが如きは高尚の快樂なりといふが如し其俗說の當れりや否やは今敢て言はず只何故に其一は下等にして他の一は高尚なるか是れ大に吾人の研究すべき一疑問なり

抑も飲食の快樂は特に教育を要せず下等動物も尚ほ之を受くるを得べし然るに美術を好み道義を樂むか如きは大に教育の扶けを藉らざるべからず此二の差異を主點として結論すれば前者を下等のものとし後者を高尚となすも敢て不可なきが如し然れども教育を要せざるものゝ中親子の情或は同感の情の如きは其性質甚だ高尚のものなり然らば必ずしも教育の要不要を以て快樂の價値を判定することを能はず

又人情にありても戀愛の情を下等とし敬愛の情を高尚となすは世俗一般

快樂の價値

に然るが如し是れ一は社會の秩序を正し一は之を紊すの恐れあるに由らざるなきか

又名譽の快樂の如きは其高尚なること勿論なりと雖も尚ほ一歩を進めば天下と共に樂むの高尚なるに若かざるが如し此快樂は其人をして我獨主義に流れしむるの恐れあり

以上の諸點より考ふれば快樂の價値は其一部教育の有無によりて計らるゝと雖も他の一部は社會の秩序を正し若くは發達を助くるの如何によりて定めらるゝが如し

快樂の價値に就て理想的に考ふるときは大に實際上の有樣に異るを觀る

社會を完全圓滿のものと見做し進むことなく退くことなき一定不動の狀態にありと假定すれば快樂の價値は教育の有無によりて決定せらるべし

然れども實際社會は或は進み或は退き其狀態暫くも靜止することなし

又吾人が互に其慾を制抑しつゝあるは畢竟此世界狹くして人口多きに過ぎ各其望を達せんとすれば必ず衝突を生ずべきが故なり隨て此世に行はるゝ所の倫理若くは道德は理想上のものならずして無理に造られたる世界を無理に治めんとするものなるが故に自ら常道によらずして權道を取ることあり即ち成るべく弊害なき下等の快樂を犧牲にして以て高尚の快樂を滿足せしむ

かく快樂も亦權道に制せらるゝが故に時々社會の狀態に從て其價値變動することあり或論者は曰く人道は古今東西を通じて確定不動のものなりと然れども之は只常道のみにして權道は必ずしも然らず例へば我國封建時代に於て廣く行はれし快樂の方法は今日に適せざるもの甚だ多し之を要するに吾人が常に採る所の快樂如何によりて其國の發達に影響を及ぼすこと鮮少ならざれば此研究は決して輕忽に附すべきにあらず

第十四章　音樂

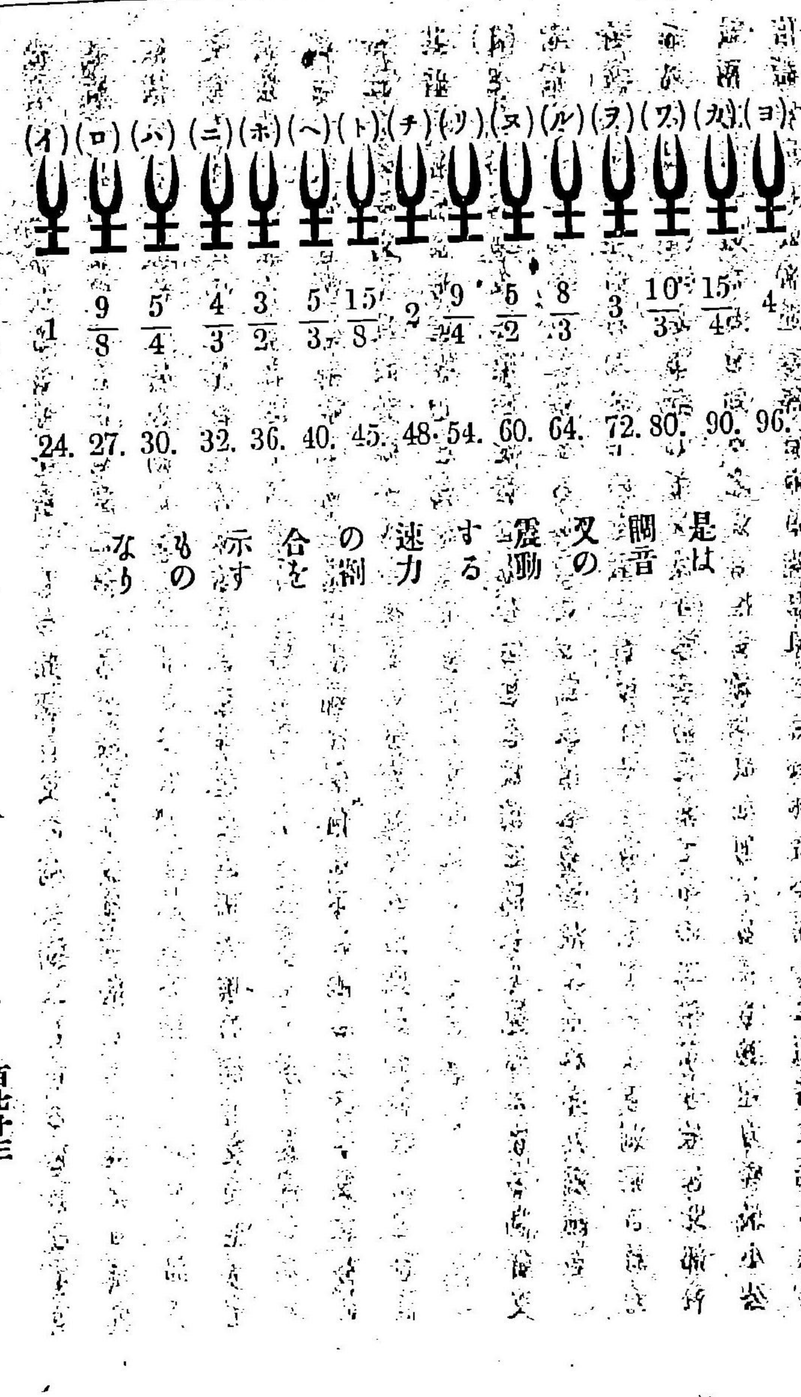
音樂は吾人に宏大の快樂を與ふるものなり彼の妙音の嚠喨たるを聞て誰れか不快の感を起すものあらんやたゝに吾人々類のみならず下等動物と

雖も亦之を好むの實あるは吾人の常に經驗する所なり而して其快樂を生せしむるは果して如何なる點にあるか是れ吾人の研究せざるべからざる所とす

ヘルムホルツの說に從へば曰く

音樂の快樂を感せしむるは音響の調和(Harmony)及び節(Melody)に由る音樂はたゝに音響の集合したるものに非るなり而して其調和及び節を生せしむるは直接に耳の構造に關するものにして發音器の構造には只だ間接の關係を有するのみ

音響は空氣の動搖に起る即ち初め物體震動し援て空氣を動搖せしめ而して空氣の動搖若し調音叉の如きものに觸るゝときは又之を震動せしむるなり然れども其調音叉の震動の速力は之を震動せしむる空氣の震動の速力と同一なるか或は二倍なるか三倍なるか將た二分の一なるかならざるべからず若し此三者が奇數の關係を有するときは假令空氣の震動が調音叉に觸るゝも之を震動せしむること能はず今試に大小の調音叉其序を追うて整列し其間の關係は圖の如き數を有すと假定せば此場合に於て他の



是は調音叉の震動する速力の割合を示すものなり

發音器より(イ)なる音響を發せしめ此調音叉の列に觸れしむるときは(イ)はこれが爲めに震動し(チ)は其二倍なるが故に(ヲ)は其三倍なるが故に(ヨ)は其四倍なるが故に又皆震動す而して(イ)なる音響を原音と稱し(チ)(ヲ)(ヨ)は部音と稱して其勢力次第に弱くなるものなり故に五倍六倍の調音叉に至りては震動漸く微小となる

部音の震動速力は必ずしも二倍三倍或は五倍なるに限るに非ず又二分の一三分の一若くは四分の一等の部音あり而して其倍數が分數なるときは其音の原音より低きこと勿論なり

(イ)と同時に(ホ)なる音響を發せしむるときは前と同じく先づ(ホ)なる調音叉を震動せしめ(ヲ)は二倍なるが故に(ツ)は三倍なるが故に是れ亦た震動す今(イ)より刺撃されたるものを數ふれば(イ)(チ)(ヲ)(ヨ)にして(ホ)より刺撃されたるものは(ホ)(ヲ)(ツ)なり而して(ヲ)は(イ)の三倍にして(ホ)の二倍なり故に此部音は兩方に普通なるを知る之より推すときは如何なる音も其速力の最小公倍數の所には普通の部音ある理なれども其部音が遙かに原音に隔ること

あり例へば(イ)と(ト)の如きは三者の最小公倍數三百六十となる是れ(ホ)の十五倍にして(ト)の八倍なり故に極めて微小にして實際上(イ)と(ト)と相合する所なきに同じ而して實際(イ)と(ホ)の如き音響が同時に發するときは(ヲ)の部音之と共に響きて(イ)(ホ)を助く此(イ)(ホ)を調音と名け二者續て發するときは節と名く之に反して(イ)と(ホ)の如きは之を不調音と稱するなり

以上によりて考ふるに發音器より來る音響の調音叉に觸るゝものゝ中(イ)と(ホ)の如きは調音となり(イ)と(ト)の如きは不調音となる

調音叉の列は耳中の神經を表はすものなり耳の構造は甚だ錯雜なるが如しと雖も實際大小の調音叉を順次に並列したるに異らず而して耳にありては大小の神經蝸牛殼中に順列し而して外物の刺撃を受けて震動し調音不調音の差違を生ず是に因りて之を觀れば調音が快樂を生ずるは異種なる符音をして共に結合せしむるに因る

右に論じたるは原音より高き部音が互に結合するによりて快樂を與ふるものなり然れども音響は必ずしも原音より高きものに限るに非ず以下原

音より低き部音に就て說述せん[illegible]前圖に就て以上の反對の關係を示さんに(ヲ)なる音響を生ずるときは其音響調音又に觸れ(ヲ)なる音響を再生す是れ即ち原音なり之と同時に(ホ)なる調音又は(ヲ)の三分の二なるが故に之と同時に震動して部音となる又(ホ)なる調音又は其三分の二なるが故に亦震動す是に於て(ヲ)なる一原音の爲めに(ホ)(イ)兩部音同時に震動す斯く一原音が二種の部音を生じ部音原音と調和して原音をして益壯快ならしむ[illegible]是に因りて之を觀れば音樂の吾人に快樂を與ふるは異種の符音が結合し又十の符音が異種の符合を生せしむるに由る[illegible]

第十五章　繪畫

繪畫の吾人に快樂を與ふるは同伴法によりて精神中に感觀念を惹起すに起因するものなり小兒が錦繪を見て快樂を感するは獨り同伴法の作用にのみよるに非ず其彩色の美麗なるを見て重もに其知覺より得るものなり然

れども知覺の外に又觀念の同伴することは明なり例へば肖像に於ける其人物の一面識あると否とにより小兒に與ふる感覺に差異あるは頗る明了なり是れ同伴法の作用にあらずして何ぞや[illegible]繪畫が吾人に與ふる所の快樂に三種の別あり第一摸擬の巧拙第二繪畫の撰擇第三畫工の意匠是れなり以下順次之を說明せん[illegible]

摸擬の巧拙

(第一)摸擬の巧拙　摸擬に二樣の別あり前人の畫趣に摸擬するもの及び天然に摸擬するものの是なり

我國從來の繪畫の如きは大抵皆前人の畫趣に摸擬するものなり有名なる狩野派の如きも亦此類なりと云ふ[illegible]天然を摸擬するは繪畫社會漸々に一般に行はるゝ所なり故に其地山水の豐秀美妙なるが如きは大に繪畫の發達を幇助す以太利に於て繪畫の盛なりしもの豈偶然ならんや[illegible]然りと雖も天然は決して完全無缺のものにあらず故にたゞ天然に摸擬するのみにとゞまりて理想の美術を得ること能はず我國の富士山米國の[illegible]

カラの瀑の如きを巧に描くときは或は高尚靈妙の繪畫を得べしと雖も是れ偶然にして決して之のみを以て一般を推すべからざるなり

摸擬の巧拙如何を以て畫工の技倆を判定するは繪畫鑑定の一大要素なり然りと雖も又一方より考ふるときは天然の摸擬は器械的になすべきことにして藝術の剛毛を如何に巧に使用するも到底寫眞師に及ぶこと能はざるべし寫眞の術漸く進歩するときは其儘天然を寫すに至らん故に摸擬の術は器械的の術に譲り畫工が技倆を顯はすの地は他に之を求めざるべからず

繪畫の撰擇

(第二)繪畫の撰擇　天然に美麗のものと否らざるものあり畫工は其美麗のものに就て描寫せざるべからず例へば洋服の兵士よりは甲冑の勇士を畫くに如かず夏樹の鬱蒼たるよりは秋山の落葉を畫くに如かざるが如し洋服の兵士夏樹の鬱蒼固より可ならざるにあらず然れども題目の可否によりて繪畫の良否の幾分か支配せらるゝは疑ふべからず是れ演說家が其演題を定むるの大切なると等しく其撰擇の時に於て後來の繪畫の良否を

定むるに幾分か關係するものなり左れば是亦繪畫鑑定の一要素たること勿論なるべし

畫工の意匠

(第三)畫工の意匠　繪畫の繪畫たる所以は天然を摸擬するに止まらず精神中の無形の觀念を有形のものとなし以て視覺に訴ふるものなり繪畫は思想を他人に傳ふるの方法中最も壯快にして且了解し易きものなり此點より觀るときは繪畫の良否は天然に摸擬するの巧拙如何に關せず其物が畫工の精神中にありて言語に表はし難き多くの高尚なる觀念を現はし且觀る者の精神中に高尚なる觀念を惹起すを以て標準となす

ロスキン曰く美術の廣大なるは其看客の精神に廣大なる思想の最大數を生せしむるにあるか或は天然物に類似せしむるにあるか若し後者をして果して眞ならしめば古來諸大家の手に成りたる美術をして其價値を失はしむるもの甚だ多しと云はざるを得ず美術には種々の目的あり或者は物を敎ふるを以て或者は人を喜ばしむるを以て或者は天然に類似せしむることを以て或者は新工夫を以て其目的となすと雖も其目的と方法の如何

を問はず精神中に廣大なる思想の最大數を生せしむるは即ち美術の廣大なることの要素と云ふべきなりと是れ繪畫の最も高尚なる目的にして主觀的現象の客觀的に現はるゝものなり

第十六章　美の學理

美なるを見て快樂を感じ美ならざるを見て不快樂を覺ゆるは是れ吾人の通情なり吾人は實に之を感ず然れども其美たる所以を知るもの甚だ少し蓋し美の感覺は甚だ複雜なるが故に之を組成する要素も亦隨て多し而して美の感覺銳なるが如く又鈍なるが如く其要素の二三を增減するときは直に之を知ること能はず然れどもまた一の要素を缺くときは知らず識らず不完全なる感覺腦中に入りて美の感覺を損するものなり斯の如くなるが故に美なると美ならざるとの區別甚だ漠然として容易に之を知ることを能はず唯吾人は其極端なるものに於て明に甄別し得るのみ

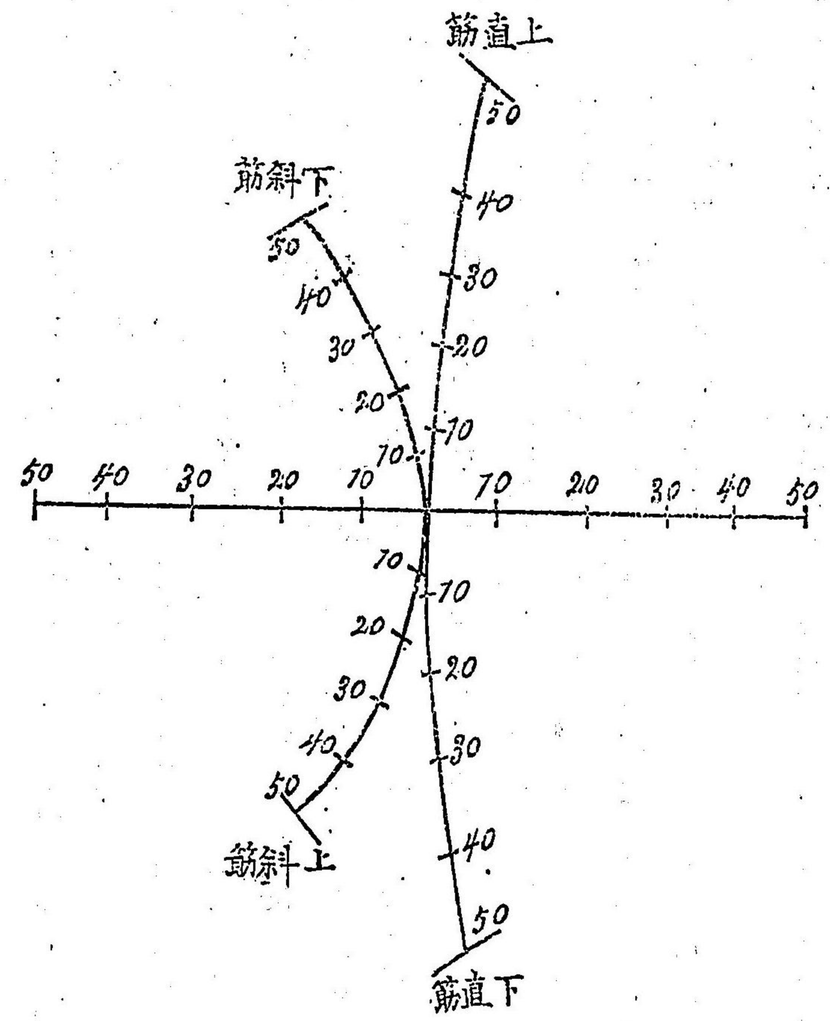
却說美の感覺が吾人に快樂を感せしむる所以甚だ多しと雖も之を大別すれば大約左の三要素中に含有せらるゝものなり第一眼球筋肉の感、第二色の調和、第三同伴法によりて惹き起さるゝ主觀的觀念即ち是なり

眼球筋肉の感

第一眼球筋肉の感　眼によりて物を視るときは網膜の中央小窩の運動によりて廣き平面をも明了に看取し得せしむる所以は既に前に述べたるが如し是に於て眼の筋肉の感覺が視覺に結合して相分つべからざるや甚だ明了なり又短線が長き直線を横截するときは眼の長き直線に沿ひて運動せんとするに妨害を與へ爲めに平行線をして殆んど平行ならざるが如く感せしむる所以は既に幻影の章に於て說明したる所なり

是に由りて之を觀れば吾人が物を視るには眼は絕えず運動し而して其物體の形像によりて眼の運動滑なるあり又否らざるあり運動滑なるときは愉快を感じ否らざるときは甚だ不愉快を覺ゆ其趣恰も手を以て物に觸るゝとき其物體の滑なると否らざるとにより感覺に快不快の差を生ずるが如し

抑も眼球を運轉せしむるは六個の筋肉の作用による內外直筋、上下直筋及

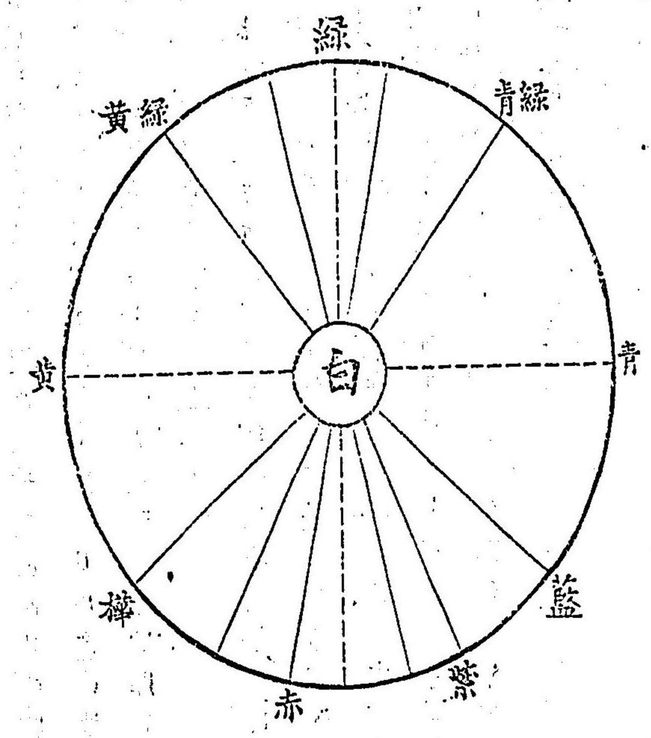


び上下斜筋是なり今假りに其一對の筋肉を殘して他の筋肉の働きを中止し上下直筋內外直筋及び上下斜筋を漸次各別に働かしめ而して網膜の中心と眼球の中心を通じて一の想像線を畫き其線端を紙の表面に達せしめ又想像線の端に筆を付けて紙面に眼の運轉を記せしむるときは各對の筋肉の働きによりて眼球を運動せしめたる結果恰も右圖の如くなるべし眼の地平線に沿ひて左右に運動するは直線なるが故甚だ滑にして且易しこれ內外直筋の働きにのみ由るものなり然して鉛直線を見るときは上下斜筋及び上下直筋共に働かざるを得ざるが故に稍複雜に至る然れども鉛直線を見るには兩眼の働き相合するが故にまた少しく便なるものあり而して以上の外家の軒若くは天井の線の如く高所にある直線を見るときは眼の運動甚だ複雜なるものにして今一々此に說明すること能はず只其大體を概言すれば斯の如きは直線より寧ろ稍曲線なるを美なりとす何となれば眼の運動は直線より稍曲線に沿ふもの最も滑かなればなり其他並行線を見るは快樂にして不規則の線を見るは不快樂なる等之を眼の筋肉の

感覺に就て研究するときは一々之を說明し難きにあらずと雖も今此に略す

第二色の調和　色の調和に就ては未だ其學理を發見したるものなし唯畫工の彩色婦人の服裝等に於ける色の排置は實驗的の暗指なきにあらず例へば黑と靑、白と黑、靑と金色、深紅と樺、靑と樺等の如し然れども其學理に至りては之を他日の發明に俟たざるを得ず

色の種類甚だ多しと雖もすべて皆白色の分析せられて得たるものに外ならず故に之を合するときは又復び元の白色となる左圖に畫くものは輪の中心を白色と定め其周圍に種々の色を置き而して其種々の色を合するときはまた白色を生ずることを表はしたるものなり



第三同伴法により惹き起されたる主觀的觀念　吾人美を見るときは其物と同伴法の作用との結合とにより主觀的に種々の觀念を惹き起すものな

り元來觀念の結合は各自過去の經驗に基くものなるが故同一物を見るも甲の觀念と乙の觀念は自ら異る所あり然れども又他の一方より觀るときは人の精神の構造は自ら定限あるが故に高尚の彫刻若くは繪畫を見れば自然深遠の快樂を感ずるものなり固より甲乙の快樂を比較して之を量ることを能はずと雖も其快樂を感ずるに至りては即ち一なり之を概括して一の名稱を附するを得美妙の感是なり

演劇若くは小説に於て現はるゝ感覺は喜ばしきことのみにあらずして悲哀のことあり失望のことあり然るに是れ等も尙ほ看客に一種の愉快を感せしむ而してこはたゞに演劇小説にのみ限らず美術一般に於て然るなり故に美術に於てはたゞ美麗歡喜の感覺のみならず悲哀、警愕、恐怖等皆奥深く且多量の感覺を起すを以て其高尚のものとなす

第十七章　笑

笑は人のみに限り下等動物には幾んど此作用なきが如し口の形若くは顏

高尚なる笑

諂笑

嘲笑

の容を見るときは或は笑に似たることなきにあらずと雖も其果して笑なるか否かは判明ならず

笑の原因種々ありと雖も要するに皆快樂の外面に表はれたるに過ぎず笑を惹き起すに左の四原因あり

第一　高尚なる快樂より起るものあり例へば佳絶の風光を見て愉快を感じたるとき或は親愛の知人に逢ひて愛情胸に滿るとき微笑を洩すが如き是なり

第二　己れの情を矯めて故らに笑ふものあり元來快樂其胸に充滿し終に溢れて笑となるは恰も花の其蕾を破りたるが如くたゞに笑ふ人の快樂のみならず之を見る人も亦大に快樂を感ず故に交際上に於て互の關係を圓滑にし人々相引き合ふの基となるものなり然るに屢僞りの笑をなして他人の歡心を買はんとすることあり之を名けて諂笑といふ斯の如きは笑の甚だしき誤用にして社會に害毒を流すこと尠少ならず

第三　己れを他人と比較し己れ他人に勝りて決して劣る所なきを知ると

滑稽の笑　愛情

きは他人に對して一種の笑をなすものあり之を稱して嘲笑といふ是れ倫理上に於て最も嫌忌する所なり

第四　滑稽的に笑ふものあり抑も滑稽は其原因概して思はざるものゝ現はれ出るにあり若し現はれ出でたるもの己れの危難に關するか或は精神に苦痛を與ふるときは之を驚愕といふ其危難なく苦痛なきもの之を名けて滑稽といふなり滑稽の笑は倫理に反すること少く却て精神の疲れたるときは之を快活にし爲に大に益する所あり

第十八章　愛情

愛情は他人に對して發する一種の感情にして爲めに快樂を起すことありまた悲哀を生ずることあり愛情に種類多し兩性の間、朋友の間、若くは君臣の間等に發する愛情は其性質各同じからず而して憐むべきものを見れば一種の感情を發す之を憐憫の情といふ又一個人が社會全体に對して一種の感情を起すあり之を愛國心といふ今是れ等愛情の性質を知らんには先

づ其要素たる同情、欽仰及び固着の性質を究めざるべからず以下之を説明せん

同情　同情とは其字義の示すが如く他人の感情の外に表はるゝを見て己れの精神中に同樣の感情を發するを云ふ即ち他人の快樂を見て己れ快樂を感じ他人の不快樂を見ては已れまた不快樂を覺ゆるが如き是なり只吾人に同情あり是に於てか私慾心は始めて他愛心と結合し吾人をして社會的動物たらしむ

今一の譬喩を假りて之を説明せん爰に直立する三個の圓筒あり其大さ皆同じ而して之に水を注入するに其分量同じからず甲は深さ二尺乙は三尺丙は四尺なりとす然るに今細き管を以て各筒の底を通ずるときは其水皆平均して各三尺の高さとなる其後其一筒に水を注ぐときは他の二筒の水も同時に增加して三筒の水量共に同一となるべし

吾人同情の感は猶ほ彼の三筒を通ずる細管の如し如何に己れの利欲をのみ滿足せしめんとする人と雖も他人の災厄に泣き疾病に苦むを見るとき

同情行はれざる區域

は之を顧みずして只己れ一身の安樂を得るを快樂とする人あらざるべし
吾人が其子及び兄弟等の困難を見るに忍びず幾分か己れの快樂を犧牲に
して以て之を救はんとするは實に同情の然らしむる所なり
然るに一方より考ふるときは吾人は幾んど同情の感を有せざるが如し今
日社會の狀勢を見るに富者は益富を得て榮華殆んど至らざる所なく貧者
は彌貧に陷り日夜身心を勞役して秋毫も快樂を得ず富者の爲めに一層强
迫せらるゝの趣あり是に由りて之を觀れば富者と貧者の間には少しも同
情の感なきが如し
以上によりて觀るに社會には同情を以て結合する家族あり又無情にして
競爭する富者と貧者あり是れ其兩極端なるものなりされば同情の行はる
べき範圍は果して何れの所にあるか是れ吾人が研究せざるべからざる所な
り
同情にも種々强弱の度ありて一ならず其强きもの行はるゝ範圍は甚狹し
と雖も弱きものに至りては甚だ廣し而して同情は大抵己れより劣等の地

同情を增加する原因

位にある人に對して發するものなり是れ第一の制限なり又同情は己れに
敵するものに對して發せず是れ第二の制限なり之に加ふるに同情は全く
無知なる人に對して發することなし是れ第三の制限なりとす是れ同情の
行はれざる區域なり
更に一歩を進めて同情の度を增加する原因を究めん
第一　其人を知るの深きこと
第二　其人と同樣の位置にあること例へば商人は商人と感を同くし文人
は文人と情を共にするが如し
第三　己れと目的を同くすること
第四　近きは父母を共にする兄弟より同人種に屬する一國民に至るまで
多少の同情を有すること
第五　親子の間に存する本能
第六　兩性の間に存する本能
是れ等は皆同情の度を强くするものなり

同情の實際存するか否かに就ては往々之を定め難き場合あり否己れ自身を欺きて同情なきを尙ほ同情あるが如く思惟することなきにあらず同情の存するは甲が乙と共に喜び若くは共に悲み而して必要あるときは毫も忌避することなく乙の爲めに己れの快樂を犧牲にするによりて知るを得べきなり

倫理的同情

以上講述せしものは自ら精神に發する同情なりとす此外尙ほ一種の同情あり之を倫理的同情といふ之を心理的に考ふるときは倫理的同情は感情的性質最も少くして理性及び實行的性質を有するものなり然れども其外觀的性質に至りては他の同情と酷だ類似する所あり例へば自然の情によれば怨恨を含むべきに却て愛情を發することあり即ち敵を愛するが如き是なり

欽仰

欽仰　欽仰はすべて美麗のものを見て發する一種の美妙的感情なり然れども此に論ずるは只他人の容貌品行及爲人を見て發する感情のみなり精神の活動は其類甚だ多し故に甲の人と乙の人を比較せんには只一點の

みによりて其優劣を判定すること能はず斯の如きは其全般を比較するにあらずして甲の精神活動中の一部分と乙の精神活動中の一部分を比較するものなり元來欽仰は自己と他人を比較するより生ず例へば自己より一層健全の人を見てそを欽仰するは是れ自然の情なり其他智力、德義、若くは勇氣等の點に於ても皆然らざるなし而して人を欽仰する結果は自ら其人の行爲に摸倣せんとするに至り竟に愛情を發するものなり

固着

固着　固着は人と人若くは人と物と互に相引くの力にして其性質甚だ複雜なり例へば吾人は國に固着し、家に固着し、親に固着し、子に固着し又兩性相固着するものなり而して其固着の由て來る所もと一樣ならざるが故に今精細に說明する能はず只其愛情を惹起すべき一要素たるを示すのみ愛情を惹き起すには右の三要素共に存することあり或は只一二を存することあり以下三要素の結合によりて愛情を生ずる有樣を說明せん

兩性間の愛情

兩性間に發する愛情　男子より女子に對すると女子より男子に對するとは其間に發する愛情の原因同じきことあり又否らざることあり同情と固

若の點に於ては男女敢て相異るにあらざれども欽仰の點に於ては同じからざる所あり即ち男子は女子の美を愛し女子は男子の勇を慕ふが如き是なり

親子の愛情

親子の愛情　親の子に對すると子の親に對するとに於て少しく異る所あり若し之を心理的に考察するときは親の子に對する愛情は甚だ單一なり即ち本能的固着及本能的同情に基き其間決して欽仰の情無きが如し而して其本能は果して如何にして生せしむるか此點に就ては學者中未だ一定の確論なし

子の親に對する愛情は固着に基くこと最も強し其固着の原因は親の子に與ふる衣食住及び其他の愛情に在るが如し而して其間欽仰の情亦少しく存せざるにあらずと雖も同情に至りては小兒の精神中決して發動することなし其漸く成長するに迨び親子の間漸く疎なるに隨て始めて同情增加するものゝ如し

朋友の情

君臣間の愛情

憐憫の情

愛國心

朋友の情　朋友の愛情中には固着と同情と最も多くして欽仰は存することあり或は存せざることありもとより一定ならず

君臣間の愛情　君臣間の愛情、主僕間の愛情等は主として同情及び欽仰に基く、固着も亦些か存することなきにあらず

憐憫の情　憐憫の情は少しく愛情と異る所あり即ち慈惠者より被惠者に對して發する情なり而して被惠者より慈惠者に對して發する情は之を感謝の情と云ふ憐憫の情は重もに同情に基き感謝の情は固着より來ることあり或は欽仰より來ることあり又倫理的同情に因て發することあるものなり

愛國心　愛國心も亦愛情の一種たるに外ならず然れども其感情の度に至りては他に比して少しく弱き所あり而して其範圍甚だ廣く且他の感情の爲に動さるゝこと罕なり

固着は其主たる要素にして同情及び欽仰も亦大に之を助く

愛國心を惹き起すの要素大略左の如し